



四代
校長

大野純一先生

退官記念号

緑
丘

全国版

(通巻)No. 26. 27合併号
(37年度2. 3号)

大阪市北区曾根崎新地
日本電気機器株式会社内
緑丘大阪支部

編集部
大阪市東区道修町三の一
塩野義製薬株式会社内
藤目英三

26 27 合併号

母校を去るにあたって

大野純一

私このたび停年により母校を去ることになりましたが、大正十一年から丸四十年間楽しく仕事をさせて貰いました母校と母校の先生、同僚、学生諸君に先ず第一に感謝の念を捧げて居ります。と同時に恐らくは他の大学等では見られない同窓諸兄の学園並びに学内の者に対する温かい心根に頭の下がる思いをいたして居ります。

母校が戦後独立を保ち単科大学になり得ましたのは、専ら、同窓の熱望と地元民の応援と学内諸君の努力の賜物であり、昭和二十一年から二十四年までのこの三者一体の協力は私の終生忘れ得ない感激の思い出であります。

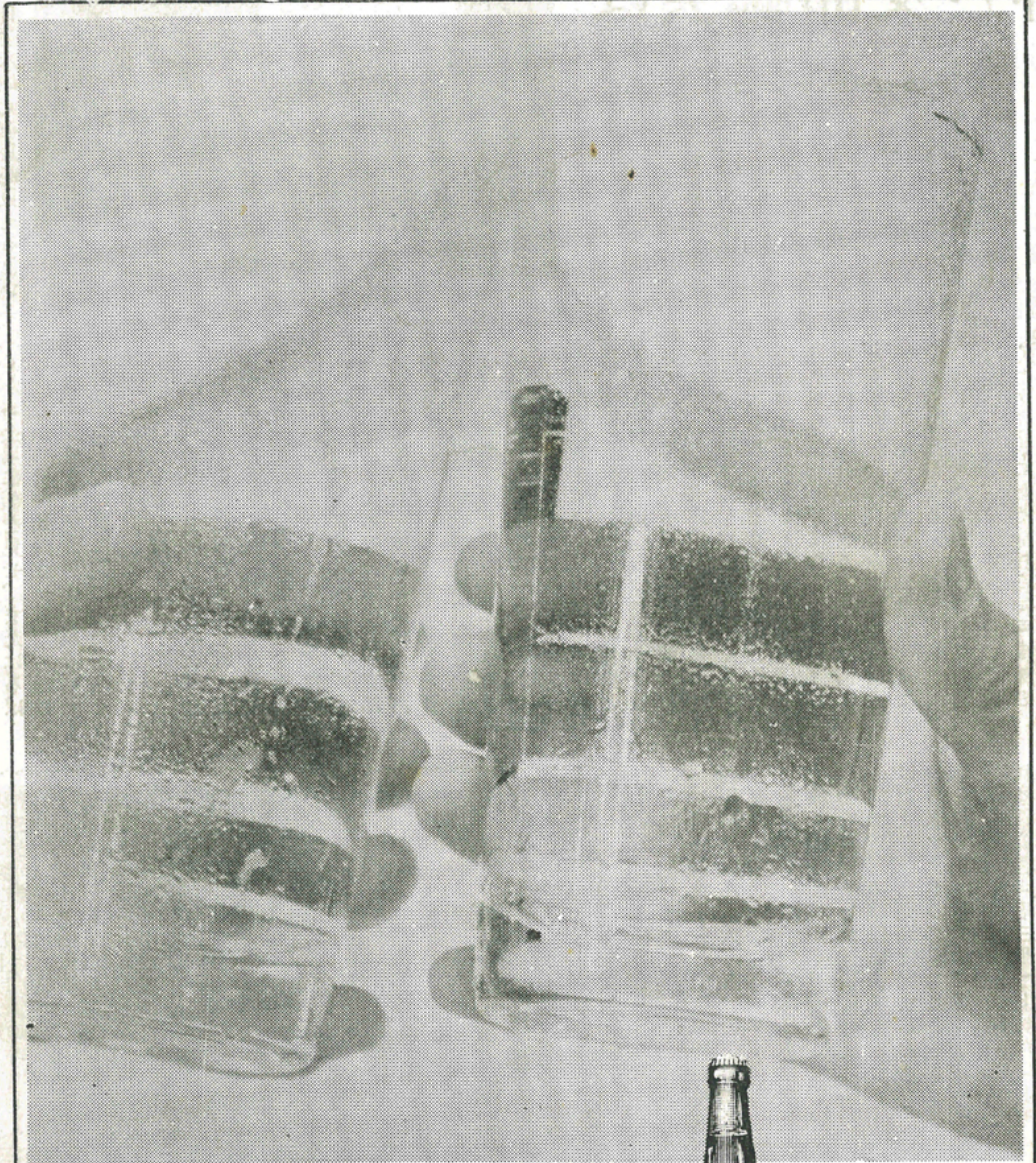
自由な身となった今もあの当時の人々の激励、援助をしばしば思い出して独りで感涙にむせぶことがあります。

小樽商科大学は独立性を保持いたしましたが、それはいわば大学の看板をかかげたのでありまして、真の大学の建設は今後にあるのであります。それには総合大学尊重の文部省に丈頼つては百年河清を待つようなものがあります。

この困難な仕事を前に加茂先生と緑丘会とがしっかりと手を握って建設の楫の音を高らかに響かせておられることは誠に心強く感ずる次第であります。私は安心していま緑丘を去ることが出来るのであります。

終りにのぞみ、私は学園を離れるにあたり名誉教授の称号を頂き学園との緑りの糸を与えられたことを無上の喜びとして感謝いたしますと共に退官に際し緑丘の諸兄から御親切なる言葉の教々を頂きましたことに対し厚く厚く御礼申し上げます。

(元小樽経済専門学校校長)
前小樽商科大学長



世界のビール三大名産地

München ← 札幌 ← Milwaukee

(ミュンヘン) (サッポロ) (ミルウォーキー)



日本麦酒株式会社

(姉妹品) リボンシトロン・リボンジュース・リボンコーラ

大野先生の御退官に思う

学長 加茂儀一



大野先生が
停年退職でこ
の三月末に退
官されてから
もう二ヶ月に
なる。先生が
大正十一年に
母校に職をも
たれてから四十

年というが、それにくらべると二ヶ月という間は全く短かい期間である。しかしこの二ヶ月は大野先生にとっては生涯のうちで最も多くの思い出にふけられた日々であったに違いない。

教師の生活というものは外面は静かに見えても内面では苦勞の多い生活である。教師には遊ぶときがない。学校のこと、学生のこと、自分の研究のことなどで教師は眼がさめたときから寝るときまで頭のなかにつねに一杯である。今の先生先生に就任しては、先生が終戦のときから病気で倒れたときまでの間の御苦勞がどんなに大きいものであ

ったかは容易に想像がつく。周知のように終戦後新制大学の発足の商科の単科大学として残ることができた。これは母校の長い歴史から見て非常に慶賀すべきことであつたし、大学の性格を考へても非常によかつたと思ふ。しかし当時その交渉にあつた人々にとつては、当時の情勢から考へてこの単独昇格は非常に難かしい仕事であつたと思ふ。

私は就任以来そのことで努力され人々から当時の事情をきくことが度々あつた、そしてまた当時のことを書いたものを見ることもできたが、みなさんはそのときの苦勞を語り、自分の努力の並々ならなかつたことをいっておられる。小樽商大の単独昇格がかくしてみな努力によつてできたことを私は知つたが、ただ一人そのことで得々として語らなかつた人があつた。それは大野先生である。しかも大野先生は当時母校の最高責任者であり、従つて先生は当時の事情を一番よく知つており且亦一番多く苦勞もされた方である。その先生が当時の苦勞について、私に一つも得々としてもらされなかつた唯一の人であつた。普通の場合であれば前任者が後任の者に昔のことを得々として語るのが普通である。ましてや単独昇格は母校にとつての

最大の事件であつたから、前任者がそのときのことをいわないのが不思議である。しかし先生はそれを語られたことがほとんどない。先生が後任の学長でしかも全然未知の学校に飛び込んだ私に向つて、その苦勞を得々として語られなかつたのは、先生の人柄のせいでもあろうが、一つは私にひけめを感じさせない願慮からであつたと思ふ。

先生の病気が回復されてから私から幾度か御願ひして無理矢理に復職して頂いたお蔭で、私はいつでも先生にお眼にかかると機会をもつことができたが、この新参の私にひけめを感じさせない先生の御氣持によつて先生に対する私の信頼がどんなに強められたか、それは言葉ではいい尽せない。私は先生がおられることによつて気兼ねなしに仕事をする事ができた。それは私にとつてプラスであつたばかりか、母校にとつてもプラスであつた。その点私は、先生は母校思いの教師であり、人間としても立派な方であると思つてゐる。

由來単科大学という全国でも特種の大学であることに誇りをもつことができて、その運営は決して楽ではない。大々でも楽でないことは同じであるが、そこには大きい組織があり、各学部があつてそこで小さいことや大すじのことが処理され、最後のところを学長がやり、学長は主として文部省や外のことにかかつてゐるのが通常である。

ところが母校のようなどころでは例え、辺村の小学校のようなもので内のことから外のことまで一切が学長の手でやらなくてはならない。

大大学の学長の場合にはやらなくてもすむような小さいことにまで学長は手をかけなくてはならないような仕組になつてゐる。その煩雜を面倒がついては学長はやれない。学長は大々学長のように座布団の上にとつかとすわつて殿様然としてはいられないのである。少しは落ちついてきた現在の母校でもいろいろと悩みはあり、煩雜さにさして異いはないが、それに比較して戦後十一年間のあの困難な時代にはその悩みはもつと大きいものであつたと思ふ。その時代の学長としての大野先生の苦勞が大変なものであつたことは、学長になつてみないとわからない。それを思うと母校を今の状態にまでもつて来られた大野先生の大きい功績を私たちが考へなくてはならないし、またそれを忘れてはならない。

大野先生はいつも話をされるときは母校を思うてのことであつた。その意味で先生は私にとつては唯一の相談相手であつた。それにつけても母校のことを思つて本氣になつて母校のことをいつも考へていてくれる第二、第三の大野先生の出ることを願つてやまない。現在どの大学にしても問題は山積してゐる。それを批判する人も多いが、批判は誰でも出来るやさしいことである。もつと難かしくて、しかも大切なことは批判だけでなくて、建設することでありそれにぶちあたつてゆく教師こそ本當の教師であり、ヒューマニストである。

前学長 大野教授 退職慰勞会

小樽支部



S. 37. 6. 23. 北海ホテルで
挨拶する大野先生

大野前学長は学長退任後も教授として母校に留つて居られたが本年三月三十一日附を以て円満に停年退職

ということになつた。大野さんの四十年に渉る御苦勞を慰勞する会が、札幌、函館、旭川、室蘭と相次いで開催されたが我が小樽支部に於ても去る六月二十三日百十名の支部会員が北海ホテルに参集して盛大に開かれた。昭十一卒小林啓作君の司会の下に發起人代表猪股孫八氏(大正八年卒 大野先生の同期生正八会のメンバー)の挨拶があり大学の感謝の辞、引続き昭和十五年卒上村高満君の御令嬢から大野先生御夫妻に花束の贈呈が行われ約一時間に渉り大野先生は御自分の生

涯の追憶を語り和氣

アイアイの中に開宴、大正十三年卒北海ホテル社長茶谷豊彦氏、昭二年卒の木曾教授、昭和八年卒南氏等のテトブルスピーチ加えてキャバレーモンパリの楽団による校歌演奏、ムードミュージック更らに昭和三年卒坂田全氏のフランク永井を負かすような低音調の「俺は寂しいんだ」そして司会者小林君の「人生劇場」等の余興が行われ二時間余に渉る大野前学長退職慰勞会はフィナーレに近づき校歌斉唱の後出席者の最長老大正五年卒石川源蔵氏の発声で大野さんの健康を祝う万才三唱、大野さんの音頭による緑丘会の方才、万雷の大拍手の中に大野さん御夫妻は感激に顔をほころばして退場された。緑丘会小樽支部としては稀に見る盛んな会合であり参会者の同窓諸氏も心から満足されて散々会場を後にされたが尚同期生同志でバイカウントやモンパリの二次会に臨んだ人々も多数居られたようである。なおこの催しには



S. 37. 6. 23. 北海ホテルで
花束贈呈をうける御夫妻

苦米地先生、北の普酒造株式会社から沢山のお酒が寄贈され皆さん充分に召し上つて戴いたことを特筆して筆を擱く次第であります。

(緑丘会小樽支部)

大野純一先 生の履歴書

生年月日 明治三十一年八月五日
 大野長太郎氏の長男に生る
 本籍地 小樽市南浜町四丁目一番地
 現住所 小樽市入舟町九丁目一三番地

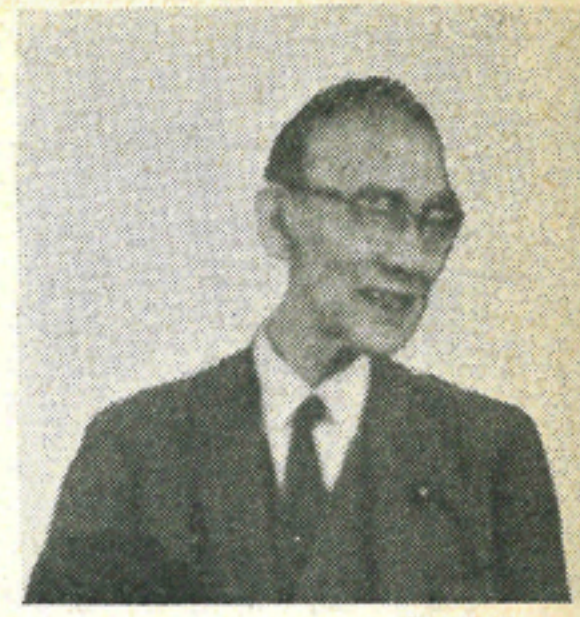
【学歴】

明治四十四年四月—大正五年三月
 石川県小松中学校
 大正五年四月—大正八年三月
 小樽高等商業学校
 大正八年四月—大正十一年三月
 東京高等商業学校

【著書】

「貨幣の社会経済学的理論」
 「マルクス貨幣理論批判」

日付	事	項	発令庁・その他
大正 11. 4.21	講師トシテ経済学並商業学ノ授業ヲ嘱託シ報酬1箇年金1,320円交付(常勤)		小樽高等商業
〃 〃 11.29	任小樽高等商業学校助教授		文 部 省
〃 〃 12. 1	1年現役志願兵トシテ歩兵第26連隊ニ入隊		
〃 〃 〃 9	文官分限令第11条第1項第4号ニ依リ休職ヲ命ス		〃
12.11.30	満期除隊		
〃 〃 〃	予備役編入		
〃 〃 12. 1	予備役見習士官トシテ勤務演習ニ応召		
〃 〃 〃 6	復職ヲ命ス		〃
13. 3.31	召集解除		
〃 〃 10.29	木村円吉氏次女キミト結婚		〃
〃 〃 11.10	任小樽高等商業学校教授		〃
昭和 2. 2.15	商業学及経済学研究ノ為独逸国へ在留ヲ命ス		〃
〃 〃 3.31	出 発		〃
〃 〃 3. 5.30	伊太利国及ビ亜米利加合衆国ヲ在留ニ追加ス		〃
〃 〃 6. 1.10	帰 朝		
13. 8.28	臨時召集ニ依リ歩兵第26連隊留守隊ニ応召		
15. 7.31	召集解除		
18.12. 7	臨時召集ニ依リ北部第2部隊ニ応召		
20. 9.12	召集解除		
21. 5.31	補小樽経済専門学校長		〃
24. 5.31	小樽商科大学長ニ補スル		〃
26. 3.31	兼職解除小樽商科大学小樽経済専門学校長		〃
28. 7.29	昭和28年7月29日小樽商科大学長ニ選考サレ任期ハ昭和28年7月29日ヨリ起算サレル		
32. 4. 1	職務ノ等級ヲ教育職(1)等級ニ決定スル		〃
〃 〃 〃	1号俸ヲ給スル		〃
〃 〃 7.29	小樽商科大学教授ニ任命サレル		〃
37. 4. 1	昭和37年3月31日限り停年ニヨリ退職シタ		〃
〃 〃 〃	小樽商科大学名誉教授ノ称号ヲ授与サレル		〃



思い出一つ

三代校長
 苦米地英俊

大野前学長が先般教職から退官されたので、「緑丘」で退官記念号を発売される由、誠に企てであると、賛意と敬意を表します。大野君が健康上の理由で、学長をやめ、同時に退官する意思を自分に或る時洩らされた。その時自分は退官は自分見合せるよう勧めた。何かの参考にもと思い、その理由をこの機会に明らかにしておく。

「初代学長たるものは、万事につけよい範を後世に残す用意がなければならぬことは前々から話し合った通りであるが、その去就については特にいい慣例をつくる必要がある」

「将来、或る時、是非学長になって貰いたい人があり、その人は年が若く、学界で雄飛しようとしたら、学長就任に躊躇することは明らかである。そのような場合に、任期終了後、誰にも気兼ねなしに教職に戻り、自由に研究が続けられる慣例が出来て居れば、問題解決を容易にするかも知れない。或は君の意に添はないかも知れないが、健康が許すまい。君はこの慣例をつくる礎石となるべきではないか」

と教授として当分残留するよう勧めた。

大野君は緑丘学園に幾多の功績を残し、最後に自己のためにではなく、学園の将来に思いをよせて、停年に達するまで努力を続けられたのは高く評価されなければならぬと自分は信ずる。大野君の御多幸を祈りつつペンを擱く。


三十七年七月八日 夜東京にて

目次 (大野先生関係)

母校を去るにあたって	大野 純一 (1)
大野先生の御退官に思う	加茂 儀一 (2)
前学長大野教授退職慰勞会	小樽支部 (3)
大野先生の履歴書	小樽支部 (3)
思い出一つ	苦米地英俊 (5)
大野さん御苦勞さま!	小林 象三 (6)
大野先生の偉業を憶う	青田 滝蔵 (6)
同期生の人々	郡 菊之助 (7)
大野前学長を思う	戸井 正三 (7)
母校とはなにか	大泉 行雄 (8)
大野さんの退官に思う	菅谷 重平 (9)
水天宮祭に大野先生御夫妻を訪ねて	玉井 武 (10)
大野先生と私	桜庭玄一郎 (11)
大学昇格は大野さんの犠牲の賜物だ	大久保鹿式 (12)
御高徳に頭が下がる思い	野又 貞夫 (14)
大野純一先生	古関 周蔵 (15)
大野前学長の退官を惜しむ	天野 雅司 (16)
大野さんとその仕事	大平 善梧 (17)
大野先生と私	西野嘉一郎 (18)
大野先生のこと	西川 正己 (18)
大野先生のベース	中野 清一 (20)
今昔の思い	金巻 賢宇 (21)
大野先生を語る	大塚 武雄 (21)
母校昇格運動秘話のひとこま	木曾 栄作 (24)
巡回講演	渡辺 胖吉 (25)
大野先生と展丘時代の油小僧	渡辺 胖吉 (25)
大野先生のアルバムから	寺尾 八郎 (27)
丘を下りた大野さん	寺尾 八郎 (27)
大野先生の思い出および時世雑感	有我栄一 (32)
北海道経済研究所と大野さん	墓目 英三 (32)
大野先生御退官に当り	斎藤 雄治 (33)
とりとめなく	渡辺 泰助 (33)
大野先生から同期生中最も心臓の強い男と紹介されて	若山永太郎 (34)
小樽経専時代のこと	内山 三郎 (35)
何時何時までも	保郎 (35)

山小庄料理

同窓諸兄の利用御引立を乞う
 (池袋から電車バス共20分)



百瀬荘

新館落成
 (TEL) 大和132

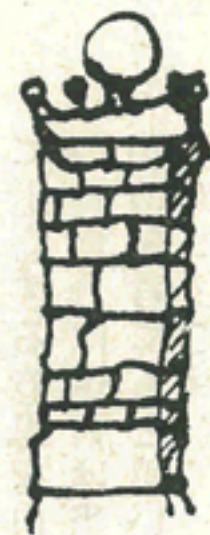
富永政資 (第5回卒業)

(第1, 3日) 埼玉県足立郡大和町白子1357 (池袋駅起点バス白子坂下下車) 電車東上線成増駅下車
 曜 定休日) 御申込次第案内書 (主人随筆集) 御送り申上げます

山小庄料理

大野さん 御苦労さま!

小林象三 (元教授)



教授、校長、学長として緑丘学園のために、長い年月まことに御苦労でした。とくに新制大学への昇格当時の御苦心は実にたいへんなことでしたらうとお察し致します。いよいよ定年御退職の由、当方も万感こもこもといった有様であります。大学になった時、学長大野さんと英語陣の木曾、玉井、速川、花村の諸君と一緒に数回接衝したことは当時の思い出の一であります。高商時代、毎週六十七八十九時間、単位

に換算すると、数十単位の英語が新しい制度によると、八単位でよろしいということ、実にたいへんなことでした。新制大学へ昇格とともに、初年度には、教授が僅三名となり、その中の一人の私が京都大学へ転任ときまかり、大野学長にたいへん御迷惑をかけたことも忘れられぬ思い出の一つであります。ここに私がある機会に申したいことを書き添えて筆をおくこととします。今は昔のことながら、大野さんは戦争中、再三出征され、まことに御苦労でした。三度目かの出征の時の送別会は、感慨深いものでした。こ

大野先生の偉業を憶う

青田滝蔵 (大五)

戦後吾国の学制改革にあたり、当然北大に吸収さるべき運命にあつた母校小樽高商が、唯一校単科商科大学として独立したこと、緑丘史上がやかしい一頁でなければならぬ。当時東北のある古い専門校が、母校と同様、単科大学として存続すべく、多額の資金を費し運動を続けたが、遂に不成功に終わった事実を知っているだけ、一入独立敢行に對し同慶に堪えない次第である。この世紀的偉業を成し遂げた蔭に

の会合に、私の述べたスピーチは次のようなものでした。「皆さんは、日本語でものを考えられるので、大野さんのことが御心配かもしれないが、私は何事でも英語で考えていますので、大野さんの再三の出征も何の心配もないことがわかります。一つ英語で質問してみましよう。Will Mr. Oono happen to be wounded or.....? (大野さんは負傷なさるか、それとも.....することがありますでしょうか) 答は勿論 Oh, no. オウノウ (大野)。六、一〇、一九六二 (大阪工業大学教授)

は、涙ぐましい幾多のエピソードがあるが、要は地もと学校関係者の猛運動と、中央に於ける同窓各位の血の出るような苦心が、文部省並にマツカーサー司令部の要人を説きふせたように想う。その中心人物は何と云っても、時の校長大野純一その人であった。中央に於てその運動にたずさわっていた私共は、運動の途中何回か挫折し、もう諦めようかと話し合ったが、その都度校長は、或は電報で、或は長距離電話で、先生独特の熱とねばり度で最後の目的を果した次第である。今回先生が長い緑丘生活を去られることを耳にした筆者は、当時の先生の功績を想起し、無限の敬意を表すると共に学校より最高の感謝状を、呈上することを提案するものである。

楽しいお買物センター

Daikokuya

取締役社長 金榮西吉 (大正7年卒)

小樽市稲穂町

同期生の人々

郡 菊之助 (大八)

私は小樽時代、即ち大正五年四月から大正八年三月まで、第四寮即ち玉の井寮に生活したので、同期生のうち東京組の種村、藤村、高橋、山岡、鈴木の諸君、関西組の広岡君や辻川君、岡山県出身の東原、川根、谷本などの諸君、それに東北組の大内君や会津君、北陸組の養君、吉尾君などは、同じ釜の飯をたべた関係上、交友も深く、印象もなつかしいが、他の寮の人々とは異人會(茨城県出身者)や学校のクラスで話し合つたり、知り合つたりした程度で、深い交わりをむすぶ機会がなかった。しかし、同じクラスのうちには静岡県出身の大村君や増井君のような秀才が居り、地元の中からは大友君、藤井君、大野君のような有力者が居て、学業の成績は前後の学年にくらべて遜色がなく卒業の際の就職状況なども、概ね良好であった。但し、教室における学習の態度は、かんばしくないものがあったと思われ、エスケープなどという言葉がはやったり、当時の教務課長であった坂本教授から「落葉松のようにまっすぐに延びよ」と注意されたことなどもあった。

先生で私も三年生の秋頃、講演会に出演し、アジア民族の将来を論じて大野君は学生時代には、むしろおとなしい存在で、私にはこれという印象は残っていない。この人が後に、母校の運命をになう学長になられるとは夢にも考えられなかった。南君とは共に大西先生について卒業論文の指導を受けたので、私にとっては学生時代から学問的の因縁が強かつたといえよう。私は小樽高商卒業後、健康を増進するために数箇月休養し、大正八年の九月に東京に出て職に就き、翌年四月一橋商科大学の開校と共に之に入學して大正十二年春に卒業し名古屋高商に赴任した。ところが大野君や種村君や藤村君は、私のように実業界に出ることなしに、小樽から直ちに一橋に入學されたので、いわゆる専攻部の最後の卒業生であり、一橋では私よりも一年先輩格なのである。

大野君との交友は大正五年入学から始まっているから四十二年余になる。しかも二人共終始小樽に常住したから此交際は正味である。其間特別親しかつた訳でもないが、また喧嘩もしていない。燈台下暗しで余り身近に暮すとうっかり其真価に気が付かすまい事がある。誰かが言ったが歴代校長を呼んで初代渡辺ザ、グレート、二代伴ザ、セントル、三代苦米地ゼ、エーブル、と言った。蓋し適評である。此三校長は我々の確かに誇るべき立派な校長であった。しかし、今にして大野君の学長としての業績を考へて見ると成る点では此三者の長所を兼ね備へ、此三者以上の実績を残したのでないかと思う。卒直に言つてグレート、セントル、エーブルの点では三校長に及ばないかも知れないが総合的に於て特に学長としての功績に於ては歴代中の第一位に推すべきだと言ふ点で我々は一致した。此事は同窓の中で意外に思う者もあるかも知れ

大野前学長を思う

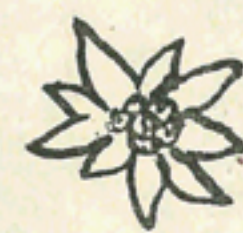
戸 井 正 三 (大八)

ないが人の功績は所謂「棺を覆ふて後定まる」で大野君に在職中余り名校長と言う評は無かつたかも知れないが今彼が退職して其在職中果した数々の業績を数え挙げるに彼こそは偉大な功業者であつた事がよく理解出来ると思ふ。北大の一部に吸収されず商科大学として存続した事、優秀な逸材を集めて本日助教授陣に学位を得る者続出した事、同窓会の役員に佐々木理事長以下を引き出して募金の基礎を築いた事、図書館の充実、堅固な就職地盤の建設等凡そ商科大学として必要な要素は殆ど完成された感がある。此間彼の一眼平凡の如くして卓抜な手腕と献身的努力は今更の如くに頭の下の想いである。彼は一応果すべきものを果した。彼の能力からすれば方面を変えてまだまだやうて貰い度い。願くば小樽の地に安住して。

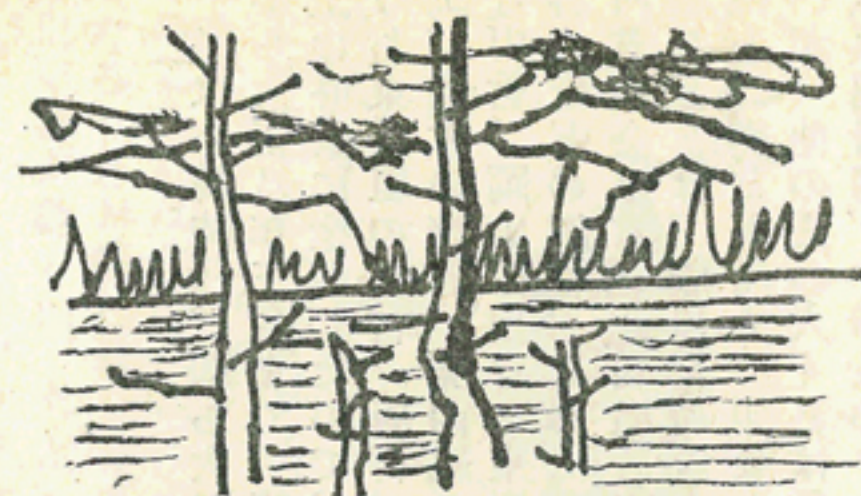
れたことがあったが、当時私は追放問題でもたまたましていたので会見を速慮し、支部長の功刀氏に代りに会ってもらった。その後数年たち、名古屋の緑丘会支部会の席上で久しぶりに大野氏と会い、快談したのであった。その時の支部長は東海銀行の古関氏であり、先輩の大宮五郎氏も列席された。席上一同はテーブル・スピーチで、戦争の苦勞を語ったり、将来の希望を述べたりして互に

交歓した。私は大野氏がその後母校の学長や教授の職も円満に務められたり、芽出度く定年退職せられたと聞き、大いに安堵したわけである。大野さんは戦時中、軍籍にも居られたよし承ったが、あのおとなしそなただつた大野さんが戦後の学校経営のために燃やされたフアイトと努力は、並大抵のものではなかつたらうと想像し、いつも感謝の心持であつたし、また同級生として誇りにも

思つて居た。このことは五十周年の記念号を見たり、記念論文集を読んだりしたときに特に切実に感じたところである。どうぞ大野さん、今後も健康には特に注意せられ、いつまでも永生させられて、緑丘学園の成長発展の姿を見守つて下さい。私も微力ながら名古屋に踏み止まり、小樽と共に渡辺龍聖校長の忘れがたみである名古屋高商の卒業生と小樽高商の卒業生



との結び目の役に当り、人生観を充実するとともに余生を楽しんで、神がこの世に自分を送り給うた恩義にむきたいと思ひます。
(愛知大学法経学部教授)



母校とはなにか

—大野先生におくる—

大 泉 行 雄
(六十一)

母校の校長さんとして、また新制度になつてからの学長さんとして大きな功績を残された大野先生が、この春勇退をなされたことは、まことに感慨の深いものがあります。わたくしは先生が母校にご赴任の年に、母校を卒業したという関係で、学校で先生と親しくお会いするような機会にはもぢえませんでした。高松へおいでになられた折に、お元気なる姿に接したこともありました。その後ご健康を害されたと承つてご案じ申上げておりました

が、昨年夏母校の五十周年記念日にご健勝なお顔にお目にかかつて大へんうれしく思ひました。わたくしは自分が教師であることからたびたび卒業生の同窓会に招かれます。時間の許すかぎりには、少々の無理をしても出席するようにつとめております。卒業生たちにとつては、自分たちの在学時代の教師が会に顔をだすということは、特別にたのしいもののように見受けられるからです。

なかには、かつて教場で講義を聞き、時には談笑し、時には叱られ、一緒にテニスをしたり山に登つたりも、こうした生活のあいだから指導をうけた旧知の先生というものがたち切りがたく結びついていることは争えない事実です。同窓会に旧師を迎えるという気持ちのなかには、旧師の面影に母校を思い偲びたいというねがいが強くはたらいっているのではありますまいか。

母校というものにいづく卒業生の感情には、旧師を通じての往年の生活が、もつとも固く結びつけられていると信ずるものです。

自分たちが学んだ母校から、旧知の先生がたがだんだん後進に道をゆずられて勇退されてゆかれるのは自然の數でありますが、母校への感情というものが、旧知の先生がたと離れがたく結ばれているものであることを思ひますと、お顔を知つて先生が学校を去られるということが、卒業生にとつてはまことに淋しいものと申さねばなりません。
(一九六二年六月、香川大学長)

大野さんの退官に思う

菅 谷 重 平
(大 九)

大野さんの心境

緑丘前号に大野さんが自ら筆をとり、定年で退官する、と淡々とした心境を短かく書いていたので、その事は承知していた。

大学教授の定年は大学によって違つていたので、小樽は幾つが定年かと思つた。兎にもかくにも前学長であるし、また全生涯を小樽商大に捧げたこの人に対して、学校側も校友側も学生側も、揃つてこの人の過去に対して心からの感謝を捧げ、今後についても変らぬ善意と好意を贈つてゆきたいと願つているものは、大野さんを知つていてるもの全部がもつていてる共通の感情であろう。

大野さんは私よりも一級上級であつたのと、学生の時から温和しい紳士であつたので、私は学生時代につき合はなかつた。つき合うようになつたのは学長になられてから、屢々東京や大阪へ出てこられて、積極的に勢力的な活動され出してからのことである。だから大野さんを語るには他にモット適当な方があるだろうが、私が語る資格が無いでもないの

小林象三さんの概念

小林先生から私は教を受けたことではないが、小林先生が小樽をやめて京都に來られてから、お目にかつた。私は奇妙な「クセ」をもつてい

て、所謂学界という世界で、誰がどんな仕事をしていて、どの位のレベルにいるかに興味をもつていて、凡そ自分なりに人々のレベルについて見当をつけている。小林先生もそういう意味で昔から尊敬していた人の一人である。

この小林先生が、渡辺 Great Gentle 苦米地 Able 大野 Noble というような言葉で、各学長を特色づけたものがある。これを読んだとき成る程巧い表現だと感心した(この特色づけは私がいま記憶しているもので、或は若干間違つてゐるかも知れない)。

もつとも英語で表現してはいるだけに、この小林概念は十人十色に解釈するかも知れない。苦米地先生がエーブルか、エーブルとは何だとなる議論はつきない。しかし小林概念は七八十%方多数の承認を得るものであることは確かであろう。

大野さんという方は確かに Noble 方である。小樽という田舎にいた関係もあるが、特にケバケバしいような活動はしてはなかつたが、自分の専門の学問についてはチャンと学位もとつて学殖の程を示していた、小樽高商はよく大学の学長を産んだ学園で、大野さんと同級であつた関太一さんは東京経済大学の学長になつたり、大野さんより一級上の糸魚川裕三郎

さんは和歌山大学の学長になつたり、又二一三級下の大泉行雄さんは香川大学の学長であるように、尚その外にも学長がいるのであろうが、その中でも大野さんは特に光つた存在であつた。

大野さんの苦心の点は

小樽商大は、良い学風をもつていて、(一)卒業生は学校思いであり団結力もあり、(二)学生も卒業生も好学の精神に溢れており、(三)人間的にはどこかジミな所があるが底力と人から信用をうける点が長所になつてゐる。この学風が存在している限り小樽商大というものは大盤石なのだ。最近はこの欠陥が出てきてゐるようだ。この原因がどこにあつたか、又あるかは別に書いてもよいが、今は書かない。大野さんはこの点を昔の小樽の姿に返したいという念願であつたのだから。自ら率先して、あの坊ちゃん坊ちゃんした人が、勇敢に街頭に出て涙ぐましい努力を続け、小樽復旧に尽された姿は、私は今尚忘れられないでマブタの中にある。

卒業生も大野さんに激励を送つたが、私はいつも思うことだが、どこかの学校の卒業生会も、学校の教育行政のことになると、よくもマアと思つて「メクラ」になるものである。卒業生が就職出来、学校の中に波がたたなければ同窓会はそれでよい学校だと思つてゐる。そんなもんじやない。学校の学問的水準が下つてい

でも同じである。

渡辺先生のとくに若い人達を引張つて来て教壇に立たせた。この若輩達は皆な将来大成した。渡辺先生の引張つて来た若輩もその後の先生方が引張つて来た若輩も同じ素質をもつた人達だが、この人達が嘗ての若輩のようにどれだけ伸びてゐるだろうか。こういう差の出来るのは結局学問的環境が変つて来た点にあると私は思つてゐる。大野さんはこの環境作りに生命をなげ込んだ人であるが、不幸にして中途で倒れてしまわれた。本人の爲にも学園の爲にも、この位大きい損失はない。

大野さんが倒れた後の学園はそれこそ支柱を失つたので混乱を極めたことは御承知の通りである。私は何度か大野さんを訪ねて意見を申し上げようかと思つたが、いろいろの事情で果たせなかつた。

今後へのお願い

さて最後に、大野さんをお願いがある。昔、同じ船で欧羅巴へ行つた人達は生涯親しくつき合つたものであつたが、津軽海峡を連絡船で渡つた人々も同じような気持がある。退官後の大野さんが何処へ住まわれるかは知らないが、小樽におられるなら気軽なセミナールでもたれて、小樽のよい学風をもつた学生を養成されたいことと、学問的にいえば小樽学派というものが今ボンヤリとわれわれの脳裏にある、また社会的にも一般人の意識の中に或る学問体系があると思う。この統帥になつてもう一度花を咲かせて貰ひ度いことである。折角の御自愛を祈念しつゝ、筆をおく。
(六月四日)

水天宮祭に大野先生

御夫妻を訪ねて

玉井武 (大一一)



六月十五日は札幌神社の祭礼であり、小樽は、小樽の人々のいわゆる水天宮さんのお祭である。花園大通・電気館通りなどの目抜き通りを彩る紅白の垂幕や、はしやぎまわる少女達の情着の上に、初夏の日ざしがやわらかくさして上々のお祭気分。残念なことには自分はお祭の方に目も足も向けるわけにはゆかない。

「緑丘大野先生記念号」に先生御夫妻の御近況を報告しなければならぬ自分であり、そして今日が原稿の締切日なのだ。

あらかじめ電話打合せの上、午後三時半に入舟町のお宅に参上、御夫妻の御懇ろな御出迎えをうけて、南にひらけたお座敷に通される。からつとあけ放された縁先には、毛無山が飛び込んで来そう。夜ともなれば石狩の浜茄子咲き競う砂浜の灯台の明りもこの縁側から望まれるという。

緑丘会旭川支部主催の大野先生感謝会に出席されて今御帰宅早々という先生の胸中には、同窓生に囲まれて過ぎた一夕の楽しさが脈々と波打っているようで、目にも言葉にも明るさとはずみがある。退官されて一層強く感ずる緑丘の絆—というところか?と拝察する。

第一に御うかがいしたのは現在の御仕事のこと。御退官を待つのももどかしいようにして諸方面から様々の関係を辿って持ち込まれる仕事は色々おありのようで、例えば某々短大の話とか、産業道路関係の委員長とか。しかし原則として責任のある肩のこるような仕事は固辞しておられ、同窓寿原氏経営の北洋相互銀行の研修所(札幌郊外円山のエルム山荘)に毎月一・二度行員研修のための講義に出席されるのが唯一のものらしい。これなら公式だったものでなし、却て若返り法に役立つのではないかと拝聴した次第。その他は精々ロータリークラブの名誉会員くらい。そのかわり、私的方面では前より一層御多忙とのこと。先生御自身の表現を拝借すれば、冠婚葬祭係—という大役。それも同窓生、その子弟、或は友人知己関係ということであるから、余り四角張っ

戸井会計事務所

北海道税理士会長 計理士 戸井正三 税理士

(大正8年卒)

事務所 小樽市稲穂町西3の6 産業会館二階

TEL ② 2128

たものではないらしいが、今月中にもう婚礼が十回あったということでは、これも仲々相当のもの。

次に「めぐり類ですよ」とニツコリされる。中でもおそばが大好きで、東屋や両国などにも出向かれるとおっしゃる。しかし何よりも奥様の御手料理が一番のお好みと拝察したのはヒガメか? ゼミの学生四名が今卒業記念に、おそばどんぶりを四枚おいて行った話が出る。奥様が家宝物のようにして奥から持って来られる。一つ一つのどんぶりに銘々の寄書がかゝれている。大野御夫妻には懐かしい思出であろう。二年間の御指導への感謝にどんぶり四枚! 全く学生らしい思付きとほゝえましくなる。加藤健三さんのお店(今井百貨店の向側にある小樽一の陶器店)でもこの学生の寄書は無料で焼いてくれたとの話。四人がそれぞれ北見・小樽・名古屋・大阪と別れ別れになつてしましましてねーと、御二人で子供に巣立たれたような寂しさを訴えられる。これからは若い学生に接する機会がありませんからねーと沁々と話される言葉の中には、大正十一年以来の緑丘生活の長さが秘められている。

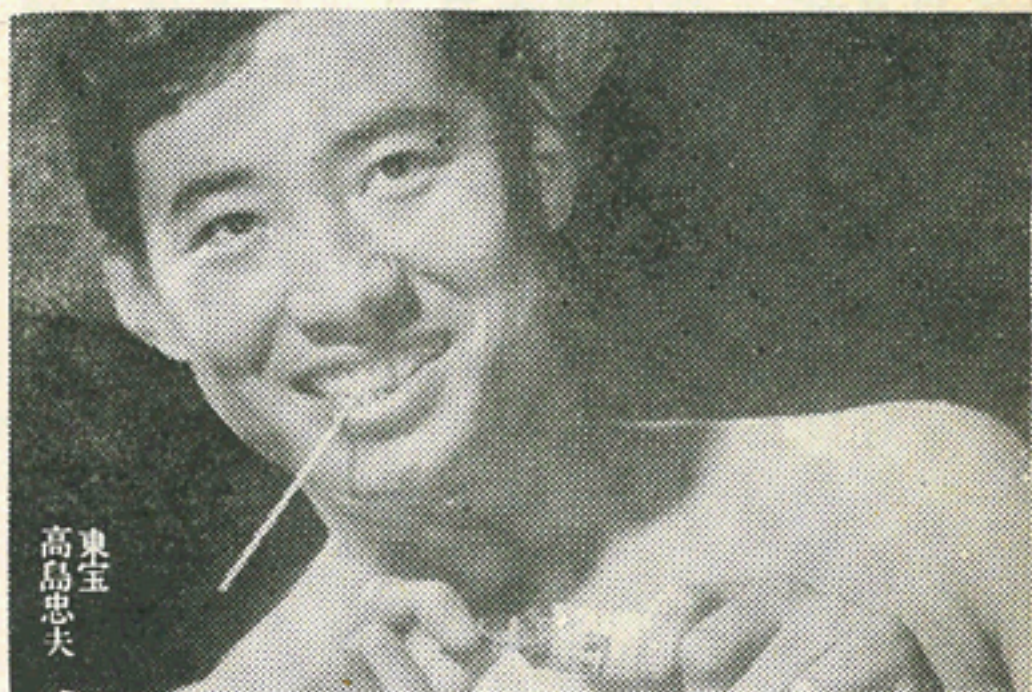
お庭にたくさんの植木を拝見しながら、食べもの以外の鳥や植木などでは何がお好きですかとの質問に、梅ですと即座にお答え。ちょうど客間の正面に梅の木が見える。こゝではからずも大野御夫妻が小樽を離れ得ない理由をきかせていただくことになる。

その一つは気候的な理由。幼稚園

通いの可愛い盛りのお孫さんが二人おいでで東京のお嬢さんのところへ、昨年の九月に奥様が、十二月に先生が夫々出かけられたそうです。先生が奥様は東京の暑さにまけて十月に入るまで毎日水枕に水を入れて暮され、先生は十二月から一月の東京の寒さに参って、電熱器やらガスのトープに品川アンカまで抱えて、風邪に罹ってしまった、お二人ともこれからは春か秋の温和な気候でなければ、東京へは出向かれぬと沁々と感じられたとのこと。長年住みなれた小樽ほどだからだにあってたところはな

いと述懐されるお二人。

その二の理由—これは「庭木と卒業生」に要約されます。大野先生のお宅のお庭には実に木が多いが、その大部分は卒業生と在学生の思出に連なるものとお話で、結婚のお仲人を頼まれた若い人々が、記念に植樹して行ったもの、就職の記念に東京から車中の運搬もいとわず担いで来た植木、裏山の散策に見出したナ、カマドの若木をひつぎて玄關に現れた学生、飯川文三さん置き土産のオノンコ、松田新さんが忘れ形見の鈴蘭……と数え上げれば、一つ一つに懐かしい思出が深くこめられて、どれもこれも、皆大事にして育て、ゆかなくてはならない。これだけの植木をどこへ運んでゆけましようか—とここに至って大野先生の口調は凛として迫力を持って来る。小樽の市商歴代の校長は御勇退後、小樽の市民と朝夕の親しみを日常生活の中にお持ちになることが余りなかったが、大野先生に於てはじめてそれが叶えられることになったといえよ



高島忠夫

元気が出る!

ローヤル・ゼリーとビタミンC 200mg / たっぷり飲める 美味しい内服液です

アピ 内服液

強壮・美容・疲労回復に

日本新薬

かの約束を示しているような気がして心から御二人の御平安を祈って又お祭りの町の方へとさがって来た。石狩の灯台の火のともるのも間もないことである。天狗も毛無もそろそろ夕暮の色になって来たようだ。

(札幌・藤女子大学教授)

大野先生と私

桜庭亥一郎(大一一)

私は函館商業高校時代に度々お会いしておりました。又大野学長は当市(滝川市)出身の偉才であり、昭和三十四年春この地に私立の滝川商業高校が誕生した時に後輩の私を初代の校長に推薦して下さい、以来何かとご指導ご鞭撻を賜っておりま

(滝川商業高校)

大学昇格は

大野さんの犠牲の賜物だ

大久保 鹿 式

(大一二)

終戦後の学制改革に当って、当然北大に吸収される筈の小樽高商(当時小樽経専)を伝統を活かして全国で唯一の官立単科商科大学として残すことに成功したのは、大野さんの血の滲むような大活躍の賜物である。

大野さんが前校長吉米地さんに代って第四代の校長に就いたのは、終戦後の昭和二十一年三月のことであつたと思う。大正十一年以来母校の教鞭をとって二十五年間貨幣論に取組み経済学、商業学に研究者として象牙の塔を築いて無上の楽みを味わい、ただひたむきに精進して来られたにもかかわらず、その間二度の応召となつて、小柄な身に軍服を纏つて戦線に馳駆し、弾雨下の戦場から九死に一生を得て帰還せらるるや、息もつかせず、国内の混乱、虚脱の中に学園の再建が待っておつたのであつた。

吉米地前校長は終戦後の混迷を拂うける日本の民主的再建のために、政治の第一線に出馬し、校長の地位を辞されたからである。大野さんの校長就任は将に研究生活の放擲である。奇しくも戦場に命

拾ひした喜びを母校再建の捨石になろうと決心されたのである。ところが学園の再建は単なる戦後の混乱收拾だけに止まらなかつた。それは従来戦争遂行の要請に基づく教育施策を一掃して、文化国家、道義国家建設の根柢となる文教制度の全面的大改革があつたことによつたのである。G・H・Qの指示によると母校は北大への吸収を免れえない。

全国の直轄専門学校は何れも合併か吸収かの運命に置かれ、創立以来の伝統を守り個性を活かしうるものはほとんどないことになる。このため対策には日夜を問わず、東奔西走の運動が続けられ、文字通り席温るを知らずと言う大活動が展開されたのである。その中であつて、独り小樽高商のみが、全国唯一の官立大学に昇格を認められて、創立以来の伝統を活かすことが出来たのであるから大変な収穫である。われわれも母校を失わずにすんだのである。全国に散在する八千の卒業生はもとより北海道全土を挙げて喜びに湧きかへつたことであつた。

この朗報をうるまでの大野さんの活動は本当に並大抵のことではなかつた筈だ。解決は中央交渉である。それも文部省だけではきまらない。アメリカの指令は絶対である。しかも東京への道は誠に遠い。現在のよろに飛行便はもちろんない。三日にあげず津軽海峡を渡つて本土遠く東京への行きかえりはよほどの健康者でも参つてしまふ。そればかりではない。当時再建に乗り出して、ポツポツ緑丘大阪支部をまとめつつあつた大阪へもほとんど毎月のように足を運ばれた。情報交換や応援依頼、与論喚起のためである。

緑丘大阪支部は大先輩林源太郎氏のおとを受けて比較的閑職にあつた小生が、戦後第一回の支部長となり硝煙に燃る焦土の中を所在すら分らない緑丘人を、そこ、ここと尋ねあげ、または身一つで外地から引きあげて来る同窓を一人また一人と拾ひあけて、大阪支部の確立と団結を計つておつたのであつた。その時大野さんの出現はどのくらい心丈夫に不屈の気持を湧き立たせてくれたかわからない。

大野さんが東京、小樽をまぐるしいほど往復して大学への道を活躍しておられるさ中に、寸暇をさいて度重なる大阪への訪れがこれまた全国にさきがけて大阪支部の確立となつたことも大野さんの大きな功績といわねばならない。

「小樽高商は創立以来学生を遇するに青年紳士をもつてし、学生と教官の間には常に人格的接触がある。また学校と卒業生と地元の間にも密接なつながりがあつて、常に一体となつて助けあつてゐる。これは小樽高商の伝統であり、個性である」と

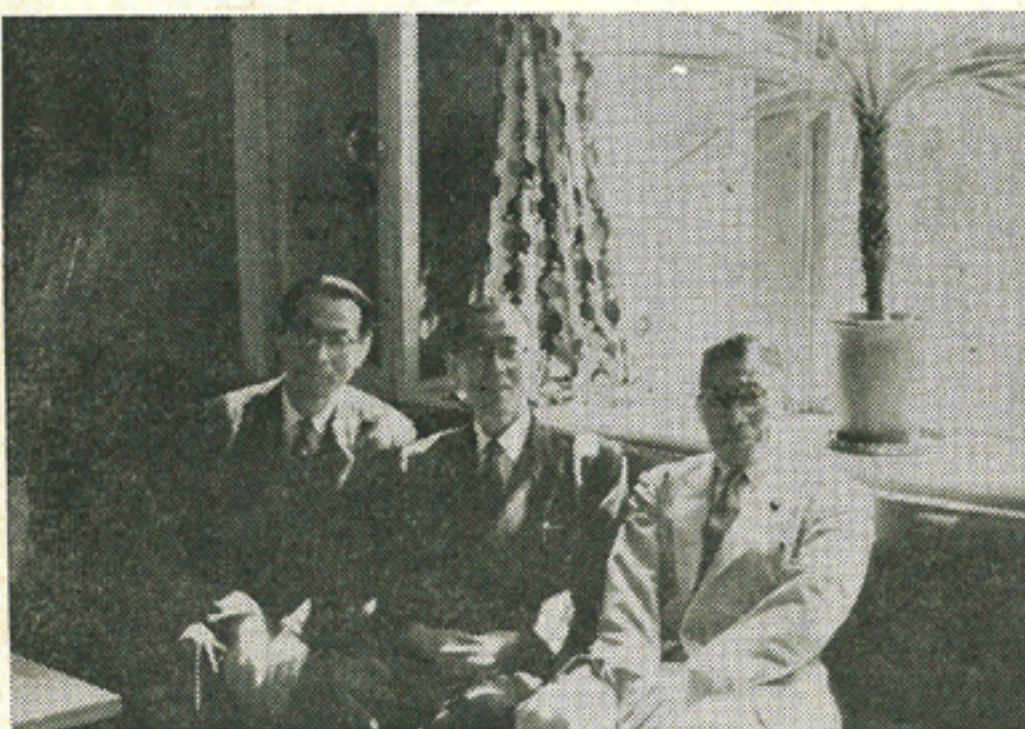
ろい教育と全人格な人間形成を基礎として、『よき市民』をつくる新しい教育理念への体質改善を実行に移したのである。一口に筆ではかく表明することが出来るが、実際問題としては荆の道であつたに違いない。人が足りない、金はない、食も足りない、家もないと言う、ないないづくめの貧弱な敗戦後の渦中であつたの努力である。転々感無量のものがある。大野さんが昭和三十一年一月ロータリークラブでの会合中蜘蛛膜下出血で倒れたと聞いた時、全く肝をつぶして驚いた。長い間の無理が身体を痛めておつたためであろう。戦後の再建から大学昇格へと己が身を挺して犠牲になられた結果である。

再起不能かと思われたが、幸にもその後回復されて母校で教鞭をとられたことは、練磨されたからだ。不屈の精神力によるものと祝福申し上げる外はない。一昨年(一九六〇年)五月小生が小樽を訪れた時わざわざ駅頭まで出迎えて下さつた。玉井、清水、久木、原など母校出身の教授連と大野さんを中心に思い出は尽きなかつた。その後去年は切角の五〇周年祝賀式参加も小生の渡欧で果されずお目にかかれなかつた。

そこへ今回突然の退官通知を受けた。大野さんの一生は母校の再建と大学への確立にあけられた。そして確実に掌握した。そうした大野さんの活躍は彼本来の素志ではなかつたのだ。彼は小樽で学んで、東京高商専攻部に進み、左右田博士のゼミナールで貨幣論を専攻した。彼の本志は経済学者への道であつた。東京高



(左から) 原君 清水君 筆者 大野先生 玉井君



(左から) 玉井君 大野先生 筆者 S.35.6.10

留學してベルリン、ハンブルグの両大学では専攻の貨幣論を深く究め、彼は学徒としての熱情の限りを尽くしたのであろう。一九三一年ライプチヒで『貨幣の社会経済理論』を刊行して内外学者の注目をひいたのも彼の情熱の現われである。こう言う彼を二度に亘る応召、戦後待っておつた校長への道、さらに教育制の一大改革による大学経済への道へ大転換しなければならぬようになってしまったのである。彼はこの転換に当り母校再建の捨石になるのだと考へた。将に大きな犠牲である。遂には労苦が重なつて倒れたのである。小林教授は代々の校長を the great, the noble, the able, the victim の敬称を奉つてゐるが、大野さんの場合は the victim の敬称を奉るのが至当ではなからうか。

大野さんの追憶は限りなく大きい、しかも身を挺して大学を築き上げた偉業は永久に輝き、小樽の地を踏むものがおしなべて初代の渡辺校長と相並んで中興の祖として強く敬慕を惜しまぬことであらう。

しかしながら今や大野さんは学園を去り、静かな余生をさらに燃やして、本来の素志を呼びもどし、自由な立場で学徒として研鑽が出来るようになられたのである。

大野さんは停年退官といつても、現在の人間の平均寿命からすればまだ若い。空白に過ぎた犠牲の幾年月は誠に惜しいがまだまだ余生は長い。幸に健康に留意されて本来の素志に立ち還り貴重な研究を続けられることを心から御祈りして、大野さんの思い出の記を終る。

大野さんはイールズに述べたのと似た。この意味が遺憾なく単科大学昇格への熱情として表われたのである。

大学昇格が決定した翌年二十四年十一月大野さんは伴前々校長の古稀の祝を大阪支部でやると言う時、一しよに連れ立って来られ小生の自宅で一泊されたことがある。いかにもしんどの仕事をやり抜いたと言う面持ちと喜びに全面を輝かせて、活動のあとを静かに語り聞かせてもらったのであつた。汽車の旅はリュックを背負い、混雑する車の窓が出入り口である。宿屋もろくろく開いていない上にお米は持参というころおのことである。

大野さんは「新たななる小樽商科大学は学問の情熱によつて結ばれたる人間育成の道場であつたらねばならぬ」と断じて爾來宮々拮据、専門学校から大学へときりかえ実務的教育を中心にした古い高等専門教育から、ひ

左から 天野氏 大野先生 伴先生 筆者 S.24.11.9



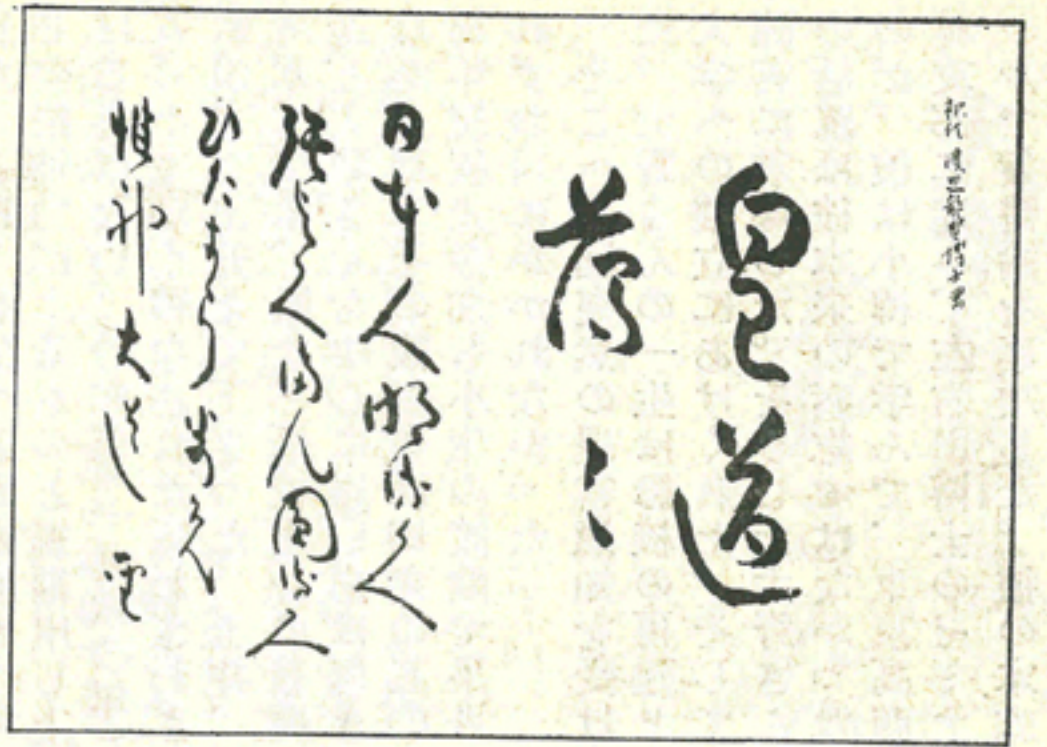
耐酸 耐蝕 滲鉛 加工 鉛 工事 一般

日本 滲鉛 工業 株式会社

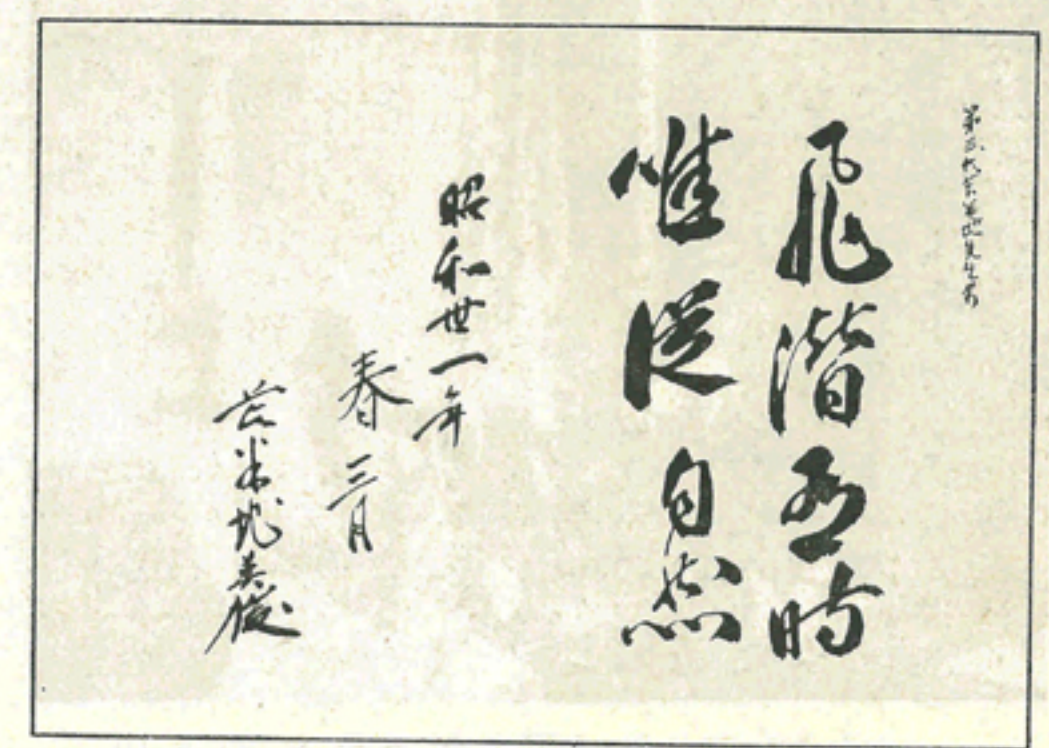
社長 大久保 鹿 式 (大正12年卒)

大阪市東淀川区木川西ノ町六丁目五

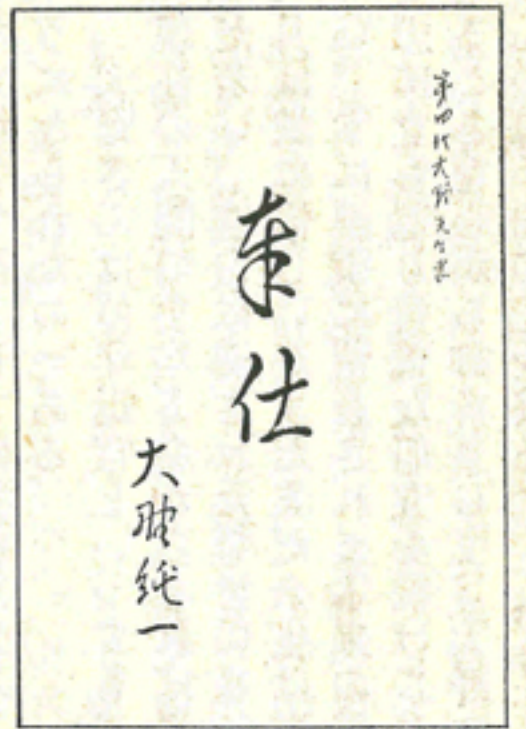
電話 大阪 0561・0492



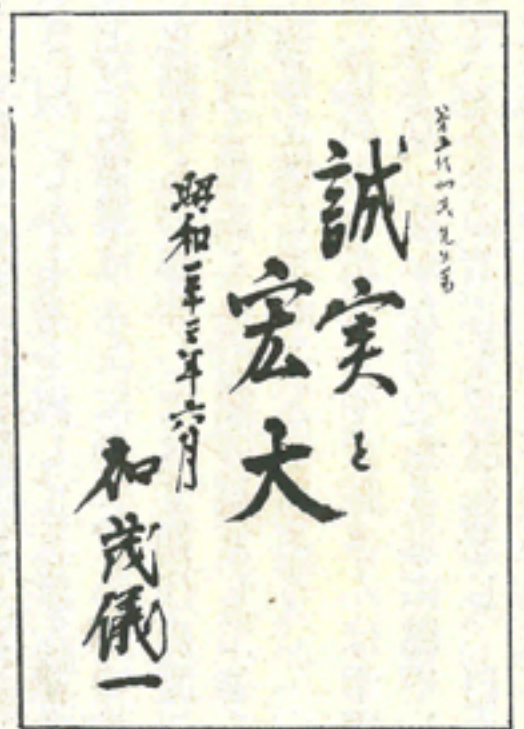
初代校長 渡辺先生墨書



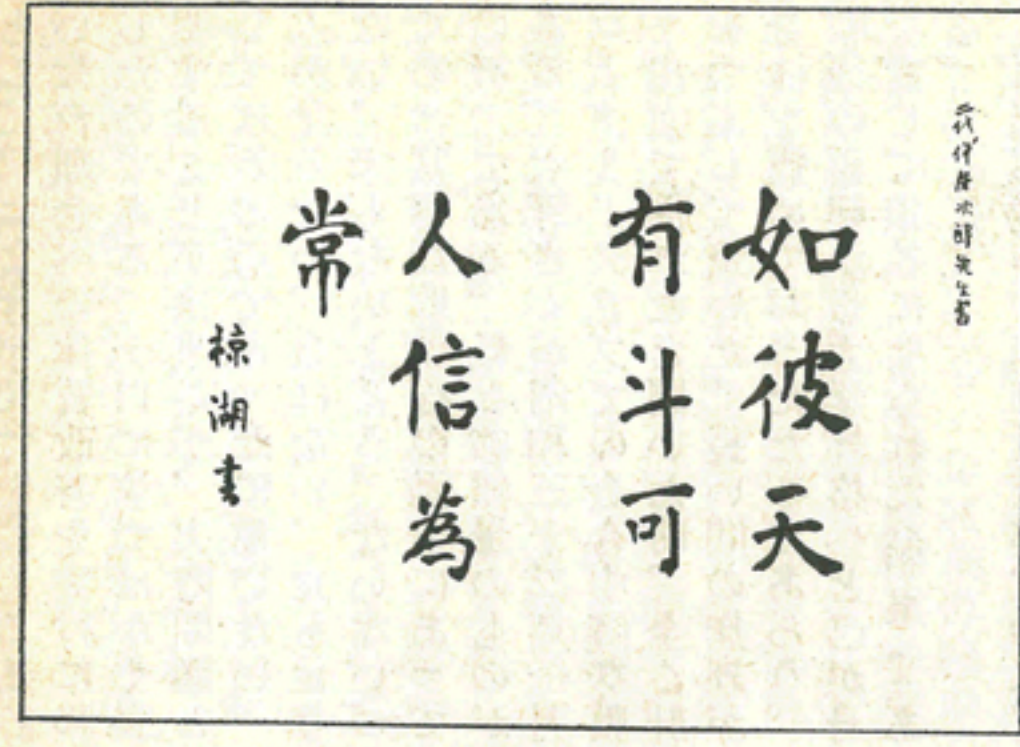
昭和二十一年
春三月
花潜あ時
性従自然



大野純一



昭和二十三年三月
加茂儀一



二代校長 伴先生墨書

御高德に頭が下がる思い

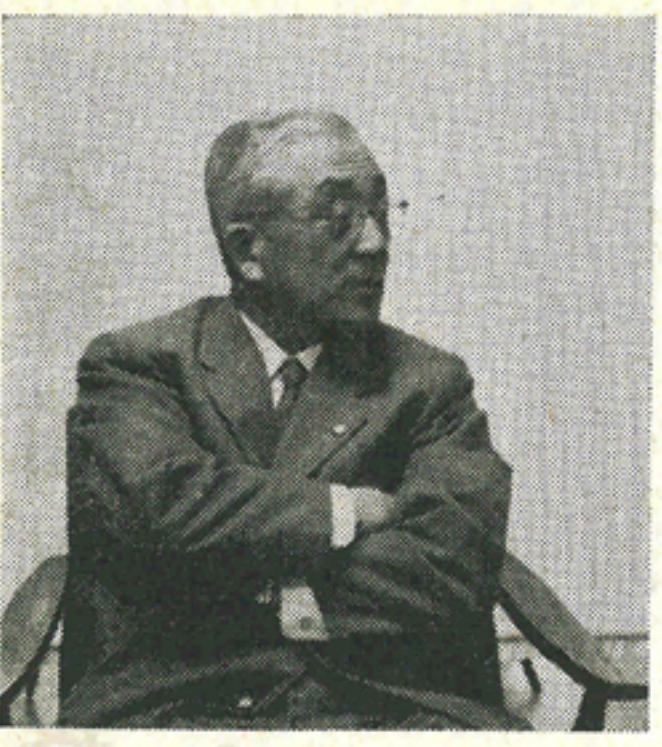
野 又 貞 夫 (大一二)

私は小樽高商を卒業してから、来年で満四十年になる。初代の校長先生、渡辺龍聖博士から現学長加茂儀一先生に至る五人の校長先生の御薫陶の賜で、どうやら教育界、否私学経営に毎日楽しく暮らせて戴いている。特に伴先生は私の一生の恩人であるが、私が函館に商科の短期大学を創るときには、大野先生にも一方ならぬお世話になった。兼任の教授は殆ど全部と云って、位、小樽商大の先生方を派遣してくれ、お蔭

いや学園宝として大事にしている。初代 渡辺龍聖先生は 皇道薄々 日本人明るく強くまん円るく ひたすら歩め惟神大道 二代 伴房次郎先生は 如彼天有斗可人信為常 三代 苦米地英俊先生は 飛躍有時唯從自然 昭和卅一年春三月 四代 大野純一先生は 奉 仕 五代 加茂儀一先生は 誠実と宏大 昭和三十三年六月 と書いてくださった。有難いと思っ

以上五人の先生のなかで大野先生に書いてもらうことが一番難関であった。先生は俺は字を書かないことにしているから勘弁してくれと、何遍お願いしても書いてくれない。仕方がないから教務課長の原憲一君(私と同級)を口説き落して色紙帖を先生の御宅に持って行って貰って、いつか気の向いたとき書いてもらうことにお預けした。約二ヶ月位たってから小包で色紙帳が原君から届いた。お蔭で五人の校長先生の書が全部完成した理だ。どの先生の書いてくださった教訓も私にとっ

ては座右の銘である。やはり学者として、教育者として功成り名遂げた校長及び学長先生達はみな立派な信念と広い人生観を持っていらっしやることを考え、自分も齢六十を越して何等為すところないことを恥じ入っている。思い出すまゝに記した。 (函館商科短大)



大野純一先生

古 関 周 蔵

(大一三)

大野先生との本当の交渉を持つ様になったのは終戦後のことである。私共クラス大正十三年卒業組は大野先生が大学を出られて初めて教壇に立たれた組の由、その時は先生の思い出によれば合併教室であつたらしく「ふるえましたよ」と言われるけど、どうやら此時の思い出は先生の方の思い出が強いようで、我々学生の方は「優しい坊ちゃん風の先生だな」と思った程度であり、私にとっ

すことを聞かれた時にその事が浜林先生の口から出た由でお葬いが済むと大野先生が東京に出られて私を尋ねられたのが私と大野先生、学校との繋りの本當のきっかけである。

大野先生と深くおつき合いをさせて頂くようになったのは昭和二十四年頃から小樽の卒業生を毎年東海銀行に採用するようになったり、終戦後のGHQの学制改革で小樽経専(当時の名称)が札幌の北大に合併される気運が極めて濃厚になったとき、折から日本橋の私の銀行(東海銀行)の三階に大先輩佐々木周ーさんの事務所があつたりしたので、自然小樽商大の今日に至る諸般の運動の事務所の一つになり、大野学長が上京される毎に私の銀行にお寄り頂いたことが自然先生との交渉を深くし、また先生が今日の小樽商大の基礎を築かれる各方面への運動に伴ったことが深い深い先生との繋りの素であると考えられる。

先生との——それは惹いて学校との——交渉を持つようになったのは浜林先生の逝去されたことがきっかけである。

浜林先生に福島中学で可愛いがられたのが縁で、浜林さんが小樽に行かれた翌大正二十年中学を卒業するに当って浜林さんから北海道の風物を説いて小樽高商を勧められたので遂その気になり小樽に入学した。

終戦後、銀行の用務を帯びて卒業後始めて昭和二十三年北海道の地を踏んだ。勿論物資の窮乏時だったが小樽の浜林先生の安否を聞いて見ると、重病でとても再起の見込みはないとの事で驚いて早速札幌から小樽に飛んで行ってお見舞申上げた。それから亡くなられる迄いろいろと文通したりしてお慰めしたのを浜林先生死の直前、大野学長から何か言い残

当時東京、北海道間は今のようないや飛行機は無論なかったし、上野、青森間の列車も少く、速度は遅いし、設備はお話にならない、そうした時代の東京、小樽間を多い月で月に数度往復された先生の御辛勞に対しては全く同窓生なればこそ尽される母校への愛情に吾々はひとしく敬意を

表し刺戟されて我々も、またその御努力に添うてお手伝いした次第であった。

当時全国に数多くの歴史ある高等商業学校が皆県単位の総合大学に編入されて影を失ってしまったのに独り小樽高商が小樽商大として今日在るを得たのは全く素朴な飾りのない誠意に溢れた先生の御態度がGHQも文部省も、大蔵省等も動かし、また吾々卒業生の熱意を好意を以て理解してくれたことは全く先生が中心となつて此運動を遂行された賜といふべきで当時大野先生のみが成し得る大事業と言わなければならぬ。

幸にして、その後任の加茂学長の幅の広い時宜に適した学校御経営の推進力は今次の募金運動を以て見事な成果を挙げ小樽商大の基礎を磐石の安きに置いた。また加茂学長の人柄から来る有形無形の力は小樽商大の内容を日に逐うて良化しつゝあることは万人の認める所であらう。

いま母校の盛況を見るにつけ、あの敗戦窮乏の朝、時流に流されず敢然として全国に只一つの単科大学として小樽を残された大野先生の功績に対して当時東京に於て最も親しく此運動の一端に御指導を頂いた一人として心からの感謝と讃辞を呈して先生の今次の御退官に心からの惜別の言葉と致度いと思ふのである。

(千代田火災海上保険会長)



大野前学長の退官を惜しむ

天野 雅 司
(大1五)

私が小樽高商に入学したのが大正十二年。大西猪之助先生逝いて無き学園ではあったが南、大熊、室谷などの少壮教授が若い情熱を傾けて経済学の理念を追求し、感銘深き講座



大久保氏 筆者(昭二四、一一、九) (後列左から) 大野先生 伴先生

を担当、北限の地ながら経済学のメッカ小樽高商の伝統を護り続けておったのである。それら一國の新進気鋭の学者の中には勿論大野教授の端麗な姿があつて、貨幣論を授講され

理論経済学の深奥へ吾々学生を導き入れたものである。社会に出てから既に幾星霜、諸々の人生絵巻を経た今日でありながら厚い過去の壁を透して、在学時代の善し悪しが鮮明に頭に焼きついてゐるのに驚く。

大野教授が結婚時、始めて教壇に立たれた時のあの光景。学生達の万雷の拍手と羨望のどよめき。しばし黙然と微笑を洩らして居られたが、直ちに講義を始められた謹厳な態度は、今でも好ましい記憶として脳裏に深く刻まれて居る。

卒業後永らくお会いする機会がなかったが、終戦直後、当時緑丘大支部長をして居られた大久保氏邸に先生の御来訪の知らせを受け、久々にお目にかゝつて、全然若き日と交らぬ温顔に接する機会を得たが、物馴れた態度の中にも烈々たる気魄を秘められ、対者をして不知不識に話の中に引き込まれる魅力に感嘆したのである。

私は今にして憶うに、積年の悲願であつた小樽高商の大学昇格の夢が達成されたのは、固より母校の伝統と実力が世に認められた事もさる事

乍ら、灼熱の気魄を温顔に秘めた大野校長の優しき接渉の物腰こそ、物情騒然たる戦後の役所に於て諄々と当局者を説破された成果であると思ふ。

教授になられて四十年。人生のすべてを吾等が母校の為に尽された先生が、今や幾多の功績を遺し乍ら齢来たつて母校を去られると聞く。先生の思いや如何ばかりかと思ふが、吾等の如く嘗て親しく教を仰ぎ、更に引き続き公私の御交情を賜つた者として、惜別の情堪え難きものがある。

御健康も快復されたときいて居るが、たとえ学園を去られても、次代を担う人々を作り上げる為に、智と徳の糧をものにする事に御精進の程を切に祈る次第です。
(緑丘大支部長・日本電気機器社長)

「緑丘」アンケートについて

「緑丘」アンケート用紙(ハガキ)を同封しました。ご多忙中まことに恐れ入りますがご記入の上(五円切手貼付)御送り下さい。

この「緑丘」が今後とも皆さまの「緑丘」として楽しいものにするためにぜひご協力下さいますようお願いいたします。

「大野先生退官記念号」についてのご感想が同封用紙で充分意をつくせない場合はご遠慮なく原稿用紙に書いてご送附下さい。
八月末迄に御送りいたゞければ幸甚に存じます。

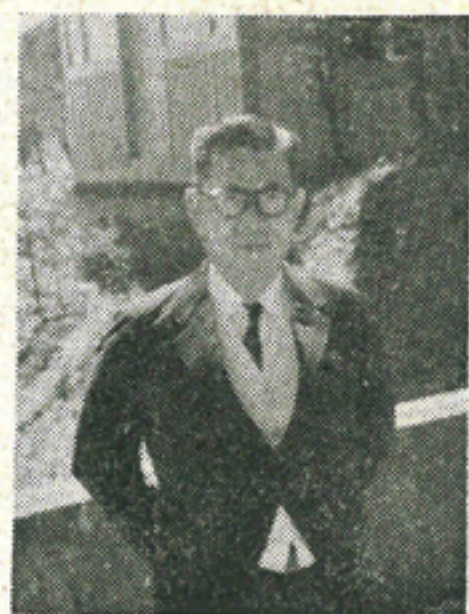
普通倉庫業

東罐倉庫株式会社

本社 大阪市北区中之島5の17 電話 大阪4403 151-5
青森支店 青森市大字浦町字野脇125 電話 青森(2)2457・4087
東京営業所 東京都品川区東大崎5丁目51 電話 東京032258・9260

専務取締役 堂城不二人 (昭2)

大野さんとその仕事



大 平 善 梧
(大1五)

大野さんは、小樽商科大学の生みの親であり、あの時期に良い学長を持つて緑丘は本当に仕合せであつたと思われてならない。

大野さんが、昭和二十一年の五月に、小樽経済専門学校長になられ、早速に上京して国立を訪れ、学園充実のための協力をわれわれに懇請された。確か、国立の職員集会所にて大野さんは、一橋の首脳者ばかりでなく、私達にまでも衷情を披瀝して助力を依頼された。板垣与一君と私が、緑ヶ丘再建のブレインの一翼を買つてやることになったのも、両人が母校出身だという理由だけでなく、実に大野さんの人柄、とりわけその熱意に動かされたためであつた。

大野さんは、前後十二年の長い間、苦勞の多い学長の重責を守りつづけられた。昭和三十一年一月、ロスター・クラブの会合の席上で蜘蛛膜出血で倒れられたが、全くその

健康を学園のために捧げられたのだと言つてよい。終戦後の激動した国情のもとで、小樽専専の充実として小樽商大の単独昇格を実現し、しかも今日の緑丘後援財団の設立の基礎をつくられた。大野さんの功績は実に偉大であつた。私は東京におりながら、その私われた辛勞をつぶさに知るものとして、良く大野さんはやられたのだ」としみじみと憶うものである。

学長後期の大野さんの評判は必ずしも良くはなかつたようだ。少くとも功罪相半ばすという批判があつたことは事実だと思ふ。だがこの批評は、大野さんの人知れずなめられた辛苦の深さを理解しないものだし、功績の客観的な測定を誤つてゐるものである。誰れでもあの時なら緑丘の単独昇格はできたのだらうと秘かに酷評する人もいないではないが、それはことをなすものの主観的苦勞を無視した見解である。

学長という仕事は、なかなか容易ならぬものである。総合大学などはほとんど名譽職であるが、これに反して、経専や単科大学の学長の職は、責任あるデジジョン・メーカーとグとその執行を伴うので、極めて重要なものと考えられる。学長としての資格に(1)学問(2)人物(3)人望の三が挙げられるが、それだけでは足りない。その外に(4)経営力と(5)政治性が必要で、そして最後に大きな物心のエネルギーが不可欠である。日本では学問や人格があれば、名学長だと考えられがちであるが、それは近代的な学園経営をわきまえない謬見である。アメリカ流に研究職と管理職とを分けて、学長はその能力と功績によつて判定することが、この意味で肝要である。大野さんが四十年代で学長となり、その地位に十二年間あられたことは、あの当時の緑丘として全く幸いであつた。学長は若い方がよいのだし、思う存分そのエネルギーを発揮してもらうように四圍が仕向けることが大切なのである。大野さんはよく働かれたし、内外の緑丘人が大野さんを中心に結合し、そのために学園再建という大きな事業が生まれたのだと言つてよいのである。緑丘学園のある限り、大野学長の名は不朽のものとして残さねばならぬし、また残ることは確かである。

大野さんの氣くばり、お膳立ては素晴らしいものであつた。事を見透す眼識も確かであつた。あの物の少い終戦直後に、困難な交通事情を克服して、日夜東奔西走、大車輪の活動をつづけられたことは、まことに

瞳目に伺いするところである。熱と汗、そしてただ母校愛に燃えて大野さんは働かれたことを記して置かねばならない。若手教授の招聘・商学討究の復刊・鬼頭文庫の購入、そしてそれに要する資金の調達、これはすべて大野さんの心魂を注がれた仕事だつた。商大の単独昇格は決して誰れがやつても出来た事業ではなかつたのである。

あの当時の板垣与一君の広い学識に裏付けられた助言は実に素晴らしかつた。私も別な面でお手伝いをした。人事の点で、浜林・長谷部・麻田の三君の外に、天利長三・古瀬大六・地主重美・桑原輝路の方々の就任についても、斡旋の役の一端を果した。桑原君は私のゼミナリストンであるが、だんだんよい仕事をして今では国際経済法の分野で押しも押されぬ確乎たる日本の地位を築きあげていくれて、頼もしい次第である。

讃

歌

学問の大きさを讃えるのに、北辰の所にあって、象星これに向うと言つてゐる。緑丘を再建し、北斗の星の光りをいや呀えわたらせたらは実に大野純一さんであり、その愛と汗とがなかつたならば、今日の小樽商大はできなかつたらうと書いたとしても過言ではないと思ふ。

積まれたるいさを高く丘の上に聳ゆるボプラの如く輝く
小樽商科大学初代学長のその名とは
に残らむ立てられしいさをしゆゑに
暫らくは心豊かに安らぎたまへ
(一橋大学教授)

大野先生と私



西野嘉一郎 (大15)

いま手許にある「緑丘五十年史」をひもどき大野先生の若かりし時代の写真をみながら約四十年前の記憶をよみがえさせている。

私が北陸の田舎都市敦賀の商業学校を卒業して母校に入学したのは大正十二年関東大震災の年である。入学と同時に糸魚川教授が主催しておられる高商YMCA(基督教青年会)の寮に御世話になった。寮といっても数人の者の下宿生活で、入寮後半年位たったころと思うが、糸魚川先生が結婚されて官舎に移られ

たので、そのあとこの室にこられたのが大野先生である。一年生の私には親しく御目にかかったのはこの時がはじめてである。先生は大正十一年東京高商をでられ母校に教鞭をとられたのであるから、まだ就任早々ということであつたと思う。

この寮の最も良いことは必ず寮生が一緒に朝夕食事をすることで、家庭的な点であつた。それで先生とは毎日食事のときはお目にかかる。昔から「同じ釜のめしを喰うほど親しくなるものはない」といわれる通り

大野先生のこと



西川正己 (大15)

僕達が二年生のとき大野教授が軍隊から学園へ戻られての最初の講義が「貨幣論」であつたがその論旨が著しく哲学的で若い学生間に人気があつた。大野さんは左右田博士の高弟で従つて哲学に造詣が深かつた。三年生の有志が先生に科外として哲学概論に似た講義を御願ひした。

藪鶯の声の聞える静かな二階の三年の教室で放課後夕日が校舎の裏山に沈む頃まで端麗な先生の温容を仰ぎ見ながら哲学入門を聞いたあの日が昨日のように思い出される。

「わかるということがわからないのだ。ほんとうにわかるというにはそのわかつたことが真実の——ほんとうのことではなければならぬ。あることがほんとうであるという事は第一に普遍性(アルゲマインハイト)第二に必然性(ノットヴェンディヒカイト)があるということがある。哲学ではこの二つの性質をひつくるめて真理性(ワールハイト)」という。

ここに机がある。これが机だとわかるためには……と大野さんが懇

私の大野先生に対する感情はこわい先生というよりも兄さんという感じだ。先生も面とむかえば必ず「嘉一ちゃん」と呼んでくださる。今でもお目にかかる「西野君」といわれず「嘉一ちゃん」である。先生と私の間柄はこんな形でいまでもお続いている。

この数人の家庭的な生活の中心に柿沼という大変親切な小母さんがいた。この小母さんがわれわれ数人の食事や身のまわりの世話をしてくれていたが、大変潔きで仲々やかましく食事のときなどは田舎からでてきた私にわが子のごとく強いしつけをしてくれた。私ばかりでなく他の者も同じで大野先生もときには叱られることもあつた。一同少々閉口の態であつたのでこの小母さんを一度こまらせてやろうと悪童共で計画して、留守中寮の食器を全部よこす奇襲戦法を用い大変しかられたことを思いだす。

先生はこの寮に移れたときにはすでに今の奥様との婚約ができておられ、ときどき婚約者が訪れる。今でもおきれいな方であるだけ、当時はおおさらお美しくわれわれはあてられどうしてあつた。先生も気がひけられたか婚約時代私達には一度も紹介されなかつた。しかし、われわれ学生には強い刺激で夕食時には先生をひやかし、必ず食後の御菓子をおねだつたものである。こんな関係で卒業後も御上京の折には同窓会などでしばしばお目にかかつていたが先生が学長になられてからまもないころと思う。私の会社に訪ねてこられ東芝に勤務されている古瀬大六君と

いう人を是非小樽の教授に迎えたかったので私に骨を折るようにと御頼まれた。私は古瀬君とは一面識もないので早速人事担当の東芝の重役に会つたところ、古瀬君は今、東芝の労働組合の専任書記をやっているが仲々の秀才で将来性のある人であるから惜しい人であるが、会社員というよりも学者として大成される人と思うから、本人が希望ならばというこゝとで会社の方は即座に決定して古瀬君が小樽に迎えられる次第。ただ今は小樽の一枚看板となり今回古瀬コンピュター・センターの設置等、小樽商大ではなくてはならない古瀬教授であるが、この教授を小樽商大に迎え入れた方は大野先生であることを紹介すると同時に、私も経営学者として古瀬君の大成のために大変喜んで一人である。

そんな関係もあり私も多少会計、経営学の研究もして著書もあるというこゝとで大野学長から依頼されて、二、三回小樽で会計学の集中講義に出講したことがある。そのとき小樽の先生御夫婦に御自宅に御招きをうけ奥様の御手料理の食事をいただき学生時代食事のときになると下宿の小母さんに行儀が悪いと叱られた話が出て、今でも家内に同じことを叱られていますよといつて先生御夫妻と大笑いをした。大野先生が今回停年で退官されるについて編集子より依頼されるまま四十一年の昔の思い出をかいてみた。どうか先生御夫妻がますます御健康でこれからの御生活を大いにエンジョイして下さいことを願っている。

切に認識論の入門を僕等に手引きして下さつた日は先生にとつても僕等にとつても今はもう戻らない過去なのだけれども、僕は先生を思う毎に、若き日のあの課外授業の一ときの大野先生を思い出さずには居られないのである。

貨幣論の講義の中でもよくカテゴリーだのア・プリオリなどという哲学用語が飛び出して来て僕等に「哲学すること——自ら哲学するところ」に学問の根本があることを教えて下さつたのは大野先生であつた。

三年生になつて選科で大野先生の貨幣論を選んだのは自分なりに先生のお人柄に対する傾倒があつたからであつて、個人的に先生に接触出来るという大きな期待があつたからに他ならない。然しこうして折角先生のゼミナールに入れて頂いてアンダソンの「貨幣の価値」をたつた四人で読み始めてみて、余りに小人数で当然のこと乍ら毎時間のようには講義が当ると、きまつて先生に援けて頂かないと満足に「読む」だけ出来なない怠け者の自分であつた。卒業のとき「卒論」に代るものとしてミルの原論中の貨幣論(money)の抄訳を命ぜられて、やつと期日に提出し得たに過ぎなかつたのに、後日或機会に自分の成績を取り寄せてみると、先生の科目に意外なほどの高点を与えられていたので二十数年後に先生の御厚意に感銘した。

大野先生のこと——が自分のことになりそうなのを心苦しく思うけれども御許しを願つてもう一つの思出を書きたい。

昭和三十一年の夏休み、まる三十年振りでは僕は学長室に大野先生を御訪ねした。すると先生がいきなり「ヤア一寸も変らんぢやないか」としかつめらしい挨拶なんかは一つもいはないで、一挙に僕を学生時代の先生の一ゼミナリストに引き戻してくれた感激に僕は危く涙が出そうであつた。先生の温情が身にしみてありがたかつたのである。この先生あつて小樽は間違いなく僕の母校なんだと痛感したのである。

その後学長専用車で先生はわざわざ僕にその後の変つた小樽の所々を案内して下さつてお昼の御馳走にまでなつて了つた。——こんなに先生に御世話になり乍らその後先生が切角伊勢市へ御出下さつたとき生憎僕は病気で臥つていて先生の御案内も学校の事務長さんに御願ひして了つた始末で、本当に申訳ないことだと僕の心に大きな悔恨となつて未だに心残りになつて居る。

先生母校に在さばこそ——と思つていたのに今回の先生御退官の報は本心に寝耳に水の驚きであり、痛恨に堪えない。しかし今後も名誉教授として母校に席を連ねられ、また母校同窓会の会員であり客員としてもいつまでも僕等の「先生」として、生くる限り先生は緑丘に明るい燈火として暖かい光りを投げかけて下さることであらう。

(宇治山田商業高校)



大野先生のペース

中野清一
(大一五)

どんな場合でも御自分のペースで物静かに、だが意志強固に歩いていかれる、大野先生はそういったお人柄のように思われる。背伸びもなさ

ず、そうかといって低姿勢を街角のでもない。殊更なアクセントをおくことをなさらないのが巧まずして風格に富んだアクセントになっている。それが先生の周辺に芯のある、それでいて柔らかなムードを漂よわすものになっている。
思わず先生の人物評めいたことを書いてしまった。先生は勿論のことこの原稿を書くように指名した西川正己君も生意気な奴だと苦い顔をされるに違いない。格別先生に可愛がられたり、親しくして頂いたわけでもない私なのだから苦い顔をされても当り前というべきだろう。けれども矢張りこのように書かずにはおれぬ何かがある。学生時代、教官時代を通しての凡そ十六年間、先生のお宅に伺ったのは唯の一度きりという私でありながら、この上ない親近感を先生は私に感じさせてきた。それというのも一に先生のユニークなペースぶりがもとになっているように思えるし、思わずあのよう

の名も登場した。その頃からひそかに社会学を専攻したいと思いついた私はジンメルの貨幣学説史上のユニークな立場について教えられた時、一知半解ながらあのジンメルがと目が醒めるような思いがした。
緑丘新聞が創刊されたのは私たちが三年になった時のように思う。同期の富士元君が並大抵でない苦勞をしたと記憶しているが、その蔭には編集部長をしてもらった大野先生のお骨折があった。これだけでも緑丘の出版文化史の上に先生は巨跡を残しておられることになるわけだが、小樽の誇る商学討究の推進のために果された先生の、地味だがたえず前進している助言指導の役割を見逃してはなるまい。これは私が教官として緑丘に戻ってからのことだが、商学討究の二十周年や二十五周年の記念号を企画する時の大野先生の、柔軟なリードぶり、派手ではないが色彩ある采配振りが今もなお鮮やかに浮んでくる。
別に学園共同体に限るわけではないが、共同体の経営や運営には、わけてもそのトップに立つ方々の人柄や才幹の点でのリズムミカルな受継ぎが肝要な場合が多い。その点、渡辺先生の後に伴先生、苦米地先生の後に大野先生という快調な律動がどれほど緑丘学園の発展のためにプラスになったか測りしれぬものがあると思う。大野先生のユニークなペースが、タイミング良く、所を得てその全性能を発揮されたことが母校の歴史の無くてはならぬ一節を裏切りあらしめたといっても過言ではない。
(広島大学教授)

蔵本正宗菊一本の生灘

おみき茶屋

東京店 東京都港区芝新橋5丁目(芝新橋5電停前菊栄ビル地下) 電話(431)3879番
大阪店 大阪市北区永楽町(械田新道東映会館西北角) 電話(361)8996番
神戸店 神戸市葦合区雲井通7丁目(三宮駅地下秀味街) 電話(22)8589番



大野先生と

緑丘新聞の創刊時代

「緑丘」は大正十四年六月五日に発刊された。THE MIDORIGAOKAとトップに記録されている。
「緑丘」は伴校長の筆である。
編集部長は大野純一先生で、今回大野先生の退官記念号を発刊するに当って大塚武雄氏(大一五)と金巻賢宇氏(昭二)の両先生をわづらわして御寄稿をいただいた。

今昔の思い

金巻賢宇

(昭二)

大野純一先生が本年三月、母校を定年退官されて先生の温容に接する機会が稀になったことは、私にとつて淋しい限りである。本紙から大野先生と「緑丘新聞」について一文を乞われたので敢えて秃筆を顧みず、この稿を草した次第である。すでに

大野先生を語る

大塚武雄

(十五)

過日神戸支部同窓会の席で偶然大阪の墓目さんから近く大野先生退官記念号を出すから何か書けとの厳命で引受けて帰りましたが、ほぼ四十年前の記憶を辿って果して正確なものが出るか、恩師を冒瀆するようなものにならないかを恐れつつこの

一再ならず他紙にも記事を書き寄せてきたが、また私の記憶も三十幾年のながい歳月の間に霞んでしまつて今では大半茫莫の彼方にあるので濃淡定まりがたく大方の寛恕を冀うのほかにない有様である。

「緑丘新聞」創刊の功は、ひとえに先輩、大塚武雄氏(旧姓、富士元一、大正十五年卒)に帰せられるべきものと思つてゐる。もしこの人の放胆と寛容がなかったならば、あの新聞は産まれないであらう。

ある日の放課後のことである。私は緑町二丁目の官舎街の路上で村瀬玄先生に呼び止められた。当時の先生は外国留学から帰校されて間のなほいころである。たぶんすでに誰かから先生に「高商文芸」への執筆をお願いしてあったものと思ふ。「高商文芸」はながい歴史をもつ雑誌であり、私達編集部員は年に二度ばかりこの雑誌の編集をするのが仕事であつた。そのある日の午後の路上でお話は——米国のカレッジなどでは雑誌の型式はすたれて新聞様式に替りつつあるようだから、君達もひとつ学校新聞の体裁で遣つてみてはどうか、ということであつた。

題字の「緑丘」は伴校長先生の筆になるものである。そしてそれがまた新聞の紙名ともなつたのである。最も意外なことは、この「緑丘新聞」がわが国の学校新聞の草分けとなつたことである。この榮譽こそは永く緑丘学園の歴史を飾るものと称することが許されるであらうか。

主として先生方の玉稿を頂いて、

紙面に横組みにするのが私達の仕事となつた。算盤片手に字数をかぞえて割り付けをしたり、校正をやつて指をインクで赤く染めたり……稚拙な作業をやつたものである。昨年七月、母校五十周年の記念行事の一つとして「展示会」が催されて会場の一角に「緑丘」第一号も象人の眼をひくもの一つとなつてゐた。私はなぜか物悲しい思いでその姿に凝視したものである。黄変の紙面にぼやけた活字がいまは無心に眠つてゐる。——時の流れは荒涼であつた人もまた遠く、あまりにも遠く別れている。

創刊の頃、稿を寄せて頂いた先生方が懐かしい。柔弱で頼りなげな私が、おぼろげと執筆のお願いをするのを、たぶん先生方は哀れに思われたいことであらう——どの先生にも断わられた覚えがない。浜林、村瀬、小林、若米地、南の諸先生、なお一々お名前を挙げないが多くの先生方に絶えず御好意の玉稿を賜つたのである。この紙上をかりて特に小林象三先生に御詫びを申し上げたい。私はこれまで一、二の機会にはからずも先生の尊名を逸しており申しわけなく思つていたのである。

大野先生は当時編集部顧問であられた。若き日の先生の姿である。はじめた新聞ができてあがつて発送のときの光景であるが、新婚まのない先生が部員の私達と一緒に玄閣脇の守衛室の畳の上で、折畳みやら帯封の糊付けやらをやらされた。この当時学校の会計課には、窓口に二人の麗人を配してわれわれの授業料納入を

ペンを執つてゐます。

緑丘五十年史が刊行される時も緑丘新聞創刊当時の思い出を書けとのことで「緑丘新聞創刊のころ」の見出しで左のようなものを送りました。(同史一九四頁)

「私は大正十二年から十五年まで正気寮に寄宿して青春の運命的なコマを刻んだのであるから、ほぼ四十年前の記憶をよみがえらせてこの手記を書かねばならぬ。従つて事実と相違する事柄も相当あるうかと恐れているが若き日の情熱を傾けて全国にさきがけ高商新聞発刊当時の記憶は今もなお鮮烈である。

当時校友会の一活動分野として編集部なるものがすでに年数回校友会誌を発行してゐた。しかし、その内容はほとんど文芸作品が八、九割を占め、文芸同好者の同人雑誌の観を呈してゐた。内容的には長篇、短篇小説、詩、歌とりまぜて誠に絢爛たるものがあつた。小林多喜二氏や伊藤整氏の作品などが光つてゐた。北辺の商学の府に後世名をなす文芸人を育んだのは緑丘の自然的環境もさることながら、この文芸人が自由に発表し得た機関紙のあつたことも見逃せない要因のようにも思われる。

ともあれこの文芸に偏した会誌に批判の声が高まつてゐる最中、われわれ(三浦、金巻、木下、岩波、甲斐)が前後して編集部員に選ばれ、何れ劣らぬ健筆家揃いで連日、あの図書館書庫奥の院で記事を書きながら新しい構想に胸を熱くしてゐた。

当時御帰朝間もなく御身辺から欧米の香りがただよつてゐるような感のあつた村瀬玄先生を訪ね原稿をお

願ひしたみぎり、先生は「この際雑誌から新聞に切り替えたらどうか、記事不足の場合は引き受けて書いてやる」と力強いお言葉をいたされた。これに力を得て当時編集部員であつた大野純一先生の新家庭をおつた。今でいへばミス小樽全道一の令嬢と噂された令夫人に迎へられ幸福のシムボルだつた大野先生に新聞切り替えの相談をもちかけた。

かくして私達は教室で接する以外に部長として、また先輩として接する機会が頻くなつたのであります。

大野先生は大正十一年に糸魚川、南両先生とともに母校に御就任になつたようでありますが二代校長伴さん的人事で最も異彩を放つたものではないか、三先生は小樽出の秀才であり、先輩の眼本を毎日見せつけられるようであり、三先生も腰かけ式でなく後輩指導には全力をあげられてゐました。就中大野先生は糸魚川先生のような寸言肺腑をつくといつた鋭さはなかつたように思ひます。南先生のような春風駘蕩、自から備わが御身辺常に春風駘蕩、自から備わる気品と御人格は多感な青年に安らぎと親しさをおぼえさせ無慮に御私宅まで押しかけたのである。

難壇からやおら教壇に降り立たれたような美男におわしました先生、当時女子学生はいなかつたので問題はなかつたが何れを見ても山家育ちのような無粋なわれわれは「大野先生御結婚のため休講」の報が伝わるや羨望の雷声を張り上げて祝福したものである。休講解除いよいよ講義再開という直前、黒板は野卑な祝福の落書で満された。(書いた覚えの

視せらるるの傾向の存せる看過するを得ざる事実なりき。この事実、この弊を救むがために今やわが「緑丘」の出現を見る、当に大なる使命と抱負とを有すべきものなることを痛感する所以なり)

こんな学生の拙文にも先生は丹念に目を通され、また学園改革論を寄せられた貴重な苦さんの原稿の一部を赤線で消されたこともありました。かくして血気にはやるわれわれを善導され深謀遠慮の下に堅実な「緑丘」新聞の礎地を作られたのは、実に大野先生でありました。

後年第四代校長として、終戦後の極めて困難なる局面に当られ、日本唯一の商科大学に昇格せしめられた先生の功績は緑丘史に不滅のものとなりました。

四十年の昔まだどっかに童顔の残つていられた先生が、多年繰り返された昇格運動を見事に実現されるお方であるとなつて予期したでしょう。はるかに母校を偲ぶ時、常に先生の御健在を祈らずにはいられませぬ。計らずも御退官の御挨拶状をいただいた時諸行無常もさることながら師弟どもにはろくも歩み来し先生の旅を思ひました。

(一九六二・六・一三)

して極めて魅力あらしめていた。この二人がすすんで発送の手伝いを申し出られたのは、けだし感激であつた。ことに大野先生の前で、この二人がまさに花の羞らう風情であつたのは、いまもなおわが老いたる眼底に彷彿として温い思い出となつてゐる。

先輩、大塚氏は豪傑であつた。これもある日のことである。部員数名を引連れて先生の新居を襲うたのである。どういふ話のきつかけでなつたのか忘れたが、御馳走に出された汁粉と先生の御飯の数と喰べ競べがはじまつた。大塚氏は大いに頑張りついに先生の御飯のお代りに勝つたのである。その時の若い奥様の驚きぶりは、無礼なわれわれには頗る愉快であつた。その大塚先輩には十年ほど前に私は神戸市でお会いしたし、先生も数年前宿願の再会を果された由を承つてゐる。

部員は大塚武雄氏を部長に、三浦茂太郎氏、わたくしと同級の木下彰氏(後に木島克巳氏に代る)、一年あつたが甲斐啓一郎氏と岩波英太郎氏とであつた。もつとも新聞も忙しくなつたので井上閣太郎氏ほか一、二の方達に援助してもらつた。

このような紙上であるので、筆が私事にわたるのを許して頂けるかと思ふ。わたくしも卒業後、かなり永く北海道の地を離れていたので、自然と緑丘学園にも疎遠となつてゐた。その間、大野先生夫妻の外国留学を横浜港に見送つたこと、戦時中の中ごろに先生を多摩霊苑に案内して左右田喜一郎先生の墓碑に参詣

したのを覚えてゐる。そうして昭和三十一年から大野先生の学長であられた緑丘学園の翼下に勤める身となつた。公私ともに受けた恩義は大きい。銘記して師恩に謙虚でなければならぬ。

本年二月十一日夕刻より小樽市内の旗亭「新松島」において、先生の送別会が催された。教官がほとりの例外もなく全員出席をみたことは、稀有の事例でもあるが、かぎりなく心温まる会合でもあつた。私は大野先生が挨拶に立たれて終始元氣に話をなされる姿を仰ぎみつつ、ひそかに感動の涙を禁じ得なかつた。戦後の最も困難な時期において小樽経専校長から商大校長への十年間の御健闘である。先生がその後、病を得て、暫く静養の時期をもたれたのもまさに心魂を傾けつくしての所労と思われてならない。しかし見事に健康を回復されて、公人として有終の美を飾られたことを深く喜びとした。

私も母校の卒業生で教官の列にある者のうちでは古い人間の一人となつてしまつた。現学長、加茂儀一先生の御赴任以来、学内の融和と信頼感に日にまして高揚されつつある。かつて学園の一隅に学んだ者として今日の精華を目のあたりにみることは、何とこの喜びであらう。

草萌ゆる校庭わかき日におく
 鮎彦
 (小樽商大短大教授)



大野先生のアルバムから



留学のときパスポートに貼った写真
S. 2.3.



結婚記念 T. 13.10.29



S. 22の大野先生



支那事変応召記念母校々舎前
S. 13.8.28

母校昇格運動

秘話のひとこま

木曾 栄 作
(昭二)

終戦後の日本の教育制度、したがって大学教育制度の改革に当って最も大きな発言力を持っていたのは、連合軍最高司令部内のCIE(民間情報教育部)であったことは周知の事実である。六・三・三・四制度という一大改革もこの現われと見るべきであり、大学教育制度の四年制化と一県一総合大学への統合整理という原則確立と実施への動きもその例外ではあり得なかった。CIEの最高顧問として登場したのがイールズ博士であり、同博士の構想が日本の教育制度を新しい方向へ導いたと言っても過言ではないだろう。



思い出すと、母校小樽商大は今日日本唯一の国立単科大学としての独立性を堅持して発展の一路を歩んでいるが、これに到る過程は文字通り「いばらの道」であったと言わなければならない。

さて、イールズ博士は北大視察に際しては有名な「イールズ事件」の渦中の人物となり(当時、筆者はその現場にたまたま居合せたのであるが)室蘭、帯広各地の視察後、北大において全道の大学、専門学校、校長、校長を召集して道内の大学統合整理方針を明らかにするとともに、各責任者の所見を求めたのであった。その夕刻、大野学長は色をなし

る限りでは、小樽経済専門学校は北海道大学の経済学部として昇格させるといのがイールズ構想であるというのが最も信頼し得る情報であった。母校当局は大野学長を中心として、緑丘会関係者と緊密な連絡をとりつつその対策に涙ぐましい努力を続けたことは忘れ得ない思い出であらう。

て帰校され苦米地先生、飯川文三緑丘会理事長とともにイールズ構想が小樽専を北大経済学部として昇格させるという方針にあることを明らかにされ緊急にその対策に腐心されたことは今もなお眼前にちらつく。しかし、これに関連して忘れ得んとして忘れ得ないことは緑丘会本部、各地の緑丘会支部、特に東京支部の涙ぐましい母校独立昇格のための熱意と協力上の姿である。東京支部からはすでに同窓O氏がイールズ博士と同行するという特別なはからいがとられ、母校独立昇格に絶大な援助をなされたのである。またイールズ博士、渡道とともに函館、札幌、室蘭、帯広、その他の緑丘支部の大きな協力も忘れ得ない。

イールズ博士は翌朝、母校を訪れ視察するということとなり筆者が博士を小樽駅に迎えてその後視察、学内関係者緑丘会代表、道民、市民代表関係者との懇談会のスケジュール進行を委嘱されたのであるが、思えばまたとない母校の運命をかけた極度に緊張した一日であった。

その経緯は別の機会に譲るとしても、約三年に亘る母校と緑丘会との文字通りの一体化した母校の単科大学昇格の宿願がめでたく達成して、今日の緑丘学園の姿を見上げることが出来るまでの関係者の熱意と努力は緑丘学園の五十年、いな一世紀後の歴史において決して忘れ得ない厳然たる輝しい事実であらう。

(一九六二・六・一七)
(母校教授)

技術革新に貢献する





(上) 退官慰労会に出席の正八会一同 北海ホテルで
S. 37.6.23



緑丘会から大野先生に贈られた肖像油絵 S. 36.7.8



(上) 大野学長(左から四人目) 伴元校長(五人目)
来阪歓迎パーティー アサヒビールで
S. 24.11.9



(左) 左から伴先生, 大野先生, 元大阪支部長大久保氏
大久保邸で S. 24.11.9

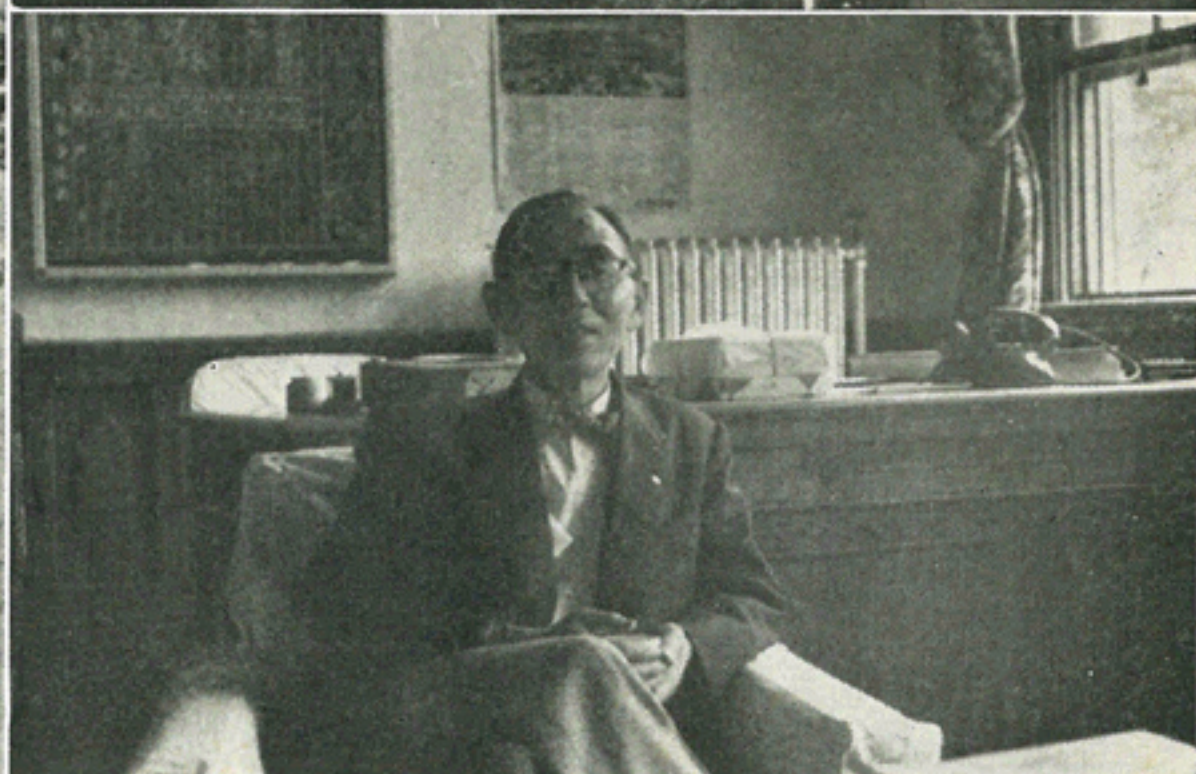
慰労会翌日の御夫妻 自宅玄関で
S. 37.6.24



(上) 加茂学長から表彰状を受ける
50周年式典 S. 36.7.9



(下) 学長室の大野先生 S. 36.7.11



(左) 中央左から二人目大野先生
緑丘有志による職員慰労会
海陽亭で S. 36.7.6

(下) 母校50周年記念式典当日
(前列イス) 左端大野先生
S. 36.7.9



大野学長と緑丘時代の油小僧

油 小 僧 (昭二)

大野先生は、アイズル、ボーイ (Idle Boy) の小僧にとつて懐しい緑丘生活中最も御厄介になった生涯忘れ得ぬ大恩人である。

先生に始めてお目にかかったのは一九二三年四月憧れた緑丘に入学を許可され緑町のマッキンノン教授宅の隣にあったYMCAの寮に田中修吾(共栄火災常務)西野嘉一郎(商博、芝浦製作専務)西川正巳(宇治山田高校)その他の諸兄と糸魚川先生を中心にヤンチャな生活をしてきた時である。

そのころは糸魚川先生も未だ独身

で、同じ仲間の大野先生、大熊信行、南亮三郎の諸先生方がよく寮へ遊びに来られ親しくその警咳に接したのが、つい昨日の出来事のようにありありと眼前に懐しく憶い出される。糸魚川先生はほどなく洋行、大野先生がその跡釜に座られることになるのだが小僧不運にも当時大流行の白村病(ドクトル、小林象三先生御発見)に悩み切角喜び勇んで入学した緑丘生活も二カ月余りで帰郷、九月一日の関東震災の被害をモッケの口実にして遂に休学してつた。

そんな事情で先生と共同生活を始める光榮に浴したしたのは翌年の新学期からであった。

そのころ先生は二階の一室で文字通り、昼夜を分かたず一生懸命に勉強をされていた。アイズルの小僧胸に一物あり、「先生勉強許りしては健康に良くありませんね」と促して緑蔭の公園を散策し、リリーの香薫る夜店の出ている花園通りに出て、さて「先生一服しましょう、アイム、タイヤード。アイム、ハングリ。」と旨く誘惑してカゲ蕎麦の御馳走になったものだ。

温厚な先生も蕎麦は御好きでこの誘惑にはいつも弱かった。

その間に先生はアメリカの名女優某嬢(乍残念どうしても名前が思い出せない、アル中のためなるか?)と瓜二つのウルトラ美貌の才媛、現夫人と目出度く御結婚。この報一度び伝わるや学内に一大センセーションを捲き起した。悪童ども羨んで曰く「御内裏様カッブル」

早速数人語らい御新婚の御宅荒し

に押し掛け御馳走になったのはよいが、美わしい新夫人の御もてなしに流石図々しい小僧も遂に堅くなり、切角の御馳走も咽喉を通らなかつたのは、われながらだらしないやら、残念やら。

学内では先生に貨幣論を教わった。先生の講義は一つ橋万能のそのころの学内におつて東大の山崎覚次郎博士と同じ流れを汲まれたようであり良く纏って判り良いと評判が、良かった。

「ゼミ」では「ゼボンスのマニール」を輪読させられたが金銀比価の問題で幕末小判が多量海外に流出したことが例証されており、「毛唐の学者は日本のことまで好く調べたもんだなあ、偉いなあと感服した。(如何に小僧がアイズルであり、ブアイヘッドでありしことよ)

アイズルの小僧は卒論の代りに前記ゼボンス中の一章を翻訳して勤弁して頂くことにした。

先生もあるいは若干小僧の語学力を買取っておられかくも寛大な取扱いをして下さったのかも知れない。

さもあらばあれ、一年間の休学をさえさせた小僧の白村病は一向に快くならない。勉強なぞ手につかない。いよいよ卒業試験は迫って来る。流石のアイズル小僧もノートのプランク埋めに汗だく、悠長な翻訳等やってくる暇はない、万事休すか、否弱すれば通ず、フト妙案?が浮んだ。当時学内にあった英語の臨教生Y君に林檎若干を提供してこれを強引に翻訳してもらい検討する暇もあらばこそやつと期日すれば提出しホッと胸なで下したまでは

丘を下りた大野さん

寺 尾 八 郎 (昭九)



良かったが、後日先生の批評に曰く「拙劣なる迷訳以外の何物でも無い」天罰をき面、汗顔の到り、くやしいやら、悲しいやら。

大野先生、前非を悔いここにカトリックならぬ告白を敢てしている憐なる小僧の罪を御許し下さい。

『私の秘密』やれやれこれで胸がすつとした。

(一九六二・六・一二)

下しバスで半島を日本海の熊石まで横断しそこから歩いてたりバスに乗りたりで北上して北松山に抜け瀬棚線まで振り出しに戻った。夜遅く帰宅したのが「緑丘」が着いていたので疲れものかわかぬ一気に読んでしまった。九頁に大野教授記念特集号が予告され記事が募られている。私の思いは早くも時代に潮り追憶の作用は大野さんとの接触の一点に集中される。

私達が入学した昭和六年には大野さんは洋行中で翌年帰朝し私達の貨幣論を持たれた。当時の編集子は五代目張りの男前と紹介したがそれもさることながらグスタフ、カッセルの学説を骨子とした講義が面白ろかつた。その明くる年には為替論を担当し口授の合間に外国為替相場の動きを的確に説明する定説はないと感慨ふかげに洩らした時には学問の道のけわしさを思い知らされた。

提出した。稚拙なレポートを読ませられ教授はさぞかしがっかりしたことであろう。学期末のお蔭か私のは公開の粗上にはのほせられずやれやれこれで冷汗はかかないで済むと胸をなでおろした。しかし、このゼミナールで論文の書き方に開眼させられたのは大きな収穫だった。会社でなにかかにか書かせられた時には大変役立った。

ではゼミナール席上でのやりとりとか指導の仕方はどうだったかとなると一向記憶がない。三十年の時へだたりは余程印象深いことではないと忘却の彼方へ押しやってみよう。学究的雰囲気はまさぐったところとところが実態であつたらう。一度私宅を訪ねてアフタリオンの為替心理説を拝借した。真新しい原書の感触が今でもたなごころに蘇るが図書館に入着してないとはいえよくも貸して下さったものだ。後日偶然書評を目にしたのが為替とう落の原因を心理に求めるのは斬新な着想だが心理を左右する経済事象がある筈だから問題には正しく答えたことにならないとの相当手厳しいものだった。案外大野さんの書評を緑丘で読んだのかも知れない。

昨日は日曜を利用して北部渡島を駆けめぐった。函館線で八雲まで南

原稿用紙に清書の上期限すれすれに

「一葉落ちて天下の秋を知る」とは言いふるされた表現だが前号で本間英作さんがかこつ通り教えを受けた教授は数少ない。そこえまた一人大野さんを失う。自分達も年を取ったものだと身につまされる。幸い小樽に定着されるらしいのでいつでもお目にかかれるわけだが学究的ムードを漂わした学者の正統派が学園から姿を消すのは洵に寂しい。

「一葉落ちて天下の秋を知る」とは言いふるされた表現だが前号で本間英作さんがかこつ通り教えを受けた教授は数少ない。そこえまた一人大野さんを失う。自分達も年を取ったものだと身につまされる。幸い小樽に定着されるらしいのでいつでもお目にかかれるわけだが学究的ムードを漂わした学者の正統派が学園から姿を消すのは洵に寂しい。

代表的 サッポロビヤホール

3階 お座敷 御宴会

2階 レストラン 成吉思汗焼

1階 純ドイツ風ビヤホール

文化人のビヤホール

ニュー・ミュンヘン

梅田阪急前・梅田シネマ裏 TEL 34 3381-36 6545 7122



S-Light

営業品目

直流点灯式蛍光灯 (バス・各種自動車用・船舶用)

高力率ネオン変圧器 防災型ネオン変圧器

株式会社 三陽電機製作所

三陽商事株式会社

本社 岐阜市雲井町3の10 電話 代表③ 4135
工場 岐阜市上土井字狭間81 電話 ③ 6211~2
事務所 東京・大阪・福岡・札幌・仙台・広島

昭和16年前期卒 常務取締役 中川 和行
昭和16年前期卒 取締役 高田 勇

昭和33年卒 大阪事務所長 代 矢島 実

大野先生の思い出

および時世雑感



有我栄一 (昭八)

あれからすでに三十年もたったのに、ついこの間のように思われる。大野先生が洋行帰り間もなくのころであった。私共が教えられた貨幣論の中の「グレッシャムの法則」の講義のムードが、今もなお眼前にありありと浮んでくる。先生の講義の調子は、今でいう「シャーベット・トーン」であったと思う。あの声の響き、およびシットリとして落ち着いた論旨、ならびにシエントルマンシップの権化のようなスタイルおよび容貌のごときは、私の主観的形容であるかも知れないが、そう信じられるのである。

こんど懐しの母校を退職せられたのであるが、何時でも再び講壇に立たれるように御健康を完全に御恢復されることを祈っている次第です。

もしも若干のお開きがあれば、矢張り池田勇人さんのように在野時代は、出来るだけ市街の間を闊歩されて、小樽のみならず、いろいろな社会の各分野を心ゆくまで御調査願いたいものだと思う。

グレッシャムの法則は、誠に真理である。……ある社会、またはある時点においては、人間界にも本当に

(昭八)

当てはまると思われる。世は正に乱世である。大なり小なりの権力、または暴力、あるいは金力、若しくは縁故、閥などによって、社会全体または部分的に、非道に罪業を重ねていることが、往々にして目に止まるのである。正義感と勇気のある者、および衆生の抜苦、与楽を心がくる者は、これらを黙って見過すことはできないのである。

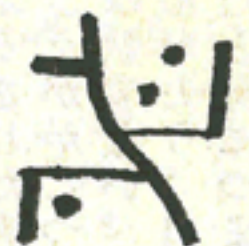
されば叡智と、エネルギーのある者は、これらの中に入って、改禍遷善せしめたく思うのである。武者小路先生は「天に星、地に花、人に愛」とも書いており、まことに美しい御言葉である。私も天下泰平、万民豊楽を念願としており、民族が伸び伸びと、それぞれの個性を發揮できるように社会を希望している。

再び御健康を取り戻して、産業振興による所得水準の向上、国民の完全就職および栄養問題、ならびに各種学校建設、その他の難問題に、是非共、真つ向から取り組んで、いただきたいと思うのである。(私はその御手伝いをするでしょう)

(一九六二・六・二四)

北海道経済研究所

と大野さん



墓目英三 (昭一一)

昭和十一年二月十一日付のスクラップブックの新聞に
「高商学生調査論文
審査結果発表」という見出しで「小樽高商内北海道経済研究所では昭和八年創立以来毎年学生間から懸賞で論文を募集し、その中優秀なものを公刊して中央の論壇から絶讃を博して来たが、かねて募集中であった今年度論文は十二篇の多数に達し十日手塚、大野、服部教授が審査の結果、左のごとく発表された。

- ▽一等 北海道を中心とするフィッシュミール賞金五十円三年薑目英三
- ▽二等 なし
- ▽三等一席 北洋材積取労働について 賞金十五円 三年木下春雄
- ▽三等二席 本道重要輸出品の外国販路調査賞金十五円 三年竹内良和
- ▽三等三席 北海道蚕糸業事情 賞金十五円 三年真田達男」とある。

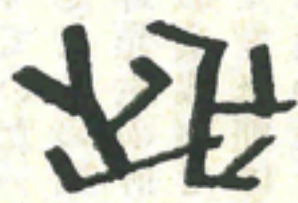
このスクラップブックを見るたびに大野先生の温顔が浮んで来ます。古ぼけたうす暗い商品陳列室の前で大野先生に「大部論文の方は進んでいますか」と問われたのは六月ごろだったと思います。前年三等等った論文が「北海道水産の缶詰」であった

(昭一一)

ので小生の顔を知って下さったのでしようが全く戸まどいました。「まだテーマが定まらなくて弱っています」と答えました。「フィッシュミールなど面白いのだが」とテーマを教えたいただきました。余市には水産試験所もあることでした。フィッシュミールの資料は手に入るであろうと直感してそれからこのテーマに取組んだのであった。締切りも迫っているのに仲々進まず、卒業試験も近くにあり、途中で放棄しようと思っただけでも度々であった。しかし、どうしても商品陳列館前で会った大野さんの顔が頭の中を去来して申しわけないという気持の方が先に立った。再び自分の論文に手を入れず予ゆうもなく提出したのがはからず一等に当選した時は先生から内容の貧弱なこの論文に賛辞をいただきました。北海ホテルで賞金をいただいた時は手が振るえていた。はじめていただく北海ホテルの料理もどうして食べたか記憶がありません。

大野先生、以上は二十六年前の話ですがこんな懐い出もまた先生の御仕事の昔を振り返って見るなにか

大野先生御退官に当り



斉藤雄治 (昭一〇)

小生昭和十年卒業以来満二十七年間母校を一回も訪れず大野先生には、また一回も御逢いたさず真に不勉強のいたり申しわけなく思っております。すでに先生の御記憶より遠ざかった小生が今さら先生の事等書くことも大変気後れがしてなりません。

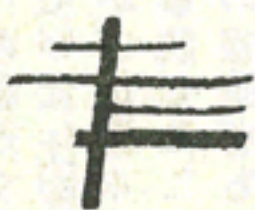
私が大野先生と親しく御逢い出来ましたのは北海道経済研究所の会員としてであります。昭和八年には渡会丑春さん(九年卒)が土功組合の研究をされその優秀さが高く評価されまして研究所調査報告の第一輯が出版されましたのは翌九年の三月であります。もちろん渡会さんの研究論文は第一等に入選されたもので

す。昭和九年には平間義さんの樺太材の調査(二等二席)沢田さんの北海道におけるフィッシュミール(三等主席)薑目英三さんの北海道の水産缶詰(三等二席)等々の数々の経済調査論文がありました。幸い小生の北千島の沖取漁業についての論文が二等主席に入選の栄を受け大野先

生に対し厚く感謝いたしました次第であります。またこの研究論文を大野先生が修正補筆して同十年五月に第二輯が出版され、さらに市販(一円二十銭)されました記憶があります。

北海道経済研究所の会合が折々町の高商クラブの二階で開催されましたが大野先生には御多忙の折にも時には和服姿ダブルの洋服等で御参加下され駄菓子(せんべい、アンボイル等)や粗茶で終始なごやかな雰囲気であられた学生の研究発表を聴いて下さったものです。現在同所の会員で京浜地区在住者は十年卒では石沢勇、杉本敏雄の両氏と小生の三名で齢五十前後になったわけですが二十七年昔の大野先生は四十才前だったのですから、小生には当時三十七、八才時代の面影しか知りませんので今回六十四才になられた大野先生には明年北海道出張の節是非御逢いたし一献差し上げたく思っております。どうか御健康に充分御留意下さいまして何時までも好きな学問のため御健闘されんことを御祈りいたします。(安田倉庫横濱支店長)

とりとめなく



渡辺泰助 (昭一四)

小林象三先生が、大野先生を「The noble」と評されたそうですが、まったくそのとおりでと思います。

こんなことをいうと変ですが、私が大野先生のゼミを選んだ主な理由も、どうもその辺にあったように思えます。つまり、先生のゼミなら、あまりしほられないで済むと考えたからです。もっとも、先生のゼミでは、私のような不心得者が、例外であったことはいうまでもありません。その証拠には、金融論をやったそのゼミから第一銀行の伊原利勝、富士銀行の波川昇、高橋淳太郎、第一生命の北館文雄の諸君のような俊秀がでて、大いに活躍しています。残念なことには、先生のゼミは、二回位しか開かれませんでした。先生が旭川かの連隊に召されたからで

しく睦まじく御送り下さいますことを私と同じように願っております。この特集号が出来ましたのも二十六年前の御指導が実を結ばせて下さったのか判りません。(塩野義製薬株式会社)

す。昭和十三年の初夏のことではなかったでしょうか。そんなわけで私は在学中には、とくに先生に親しくしていただく機会をもちませんでした。

先生にしばしばお目にかかるようになったのは戦後のことです。昭和二十二、三年ごろ、先生は商大昇格のことで頻りに上京されていたようでしたが、今のよう飛行機の便があるわけがないし、連絡船と汽車のつながりさえ時にはうまく行かないこともありました。そんなことから先生は、私の住んでいる青森で、一息いれて行かれたことが数回あったように覚えております。ずいぶん面倒な問題をかかえておられたのでしようが、いつもニコニコとして張り切っておられました。充実した大学を

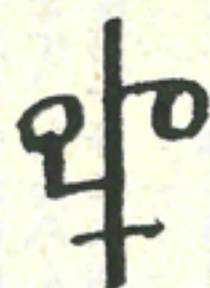
大野先生から

同期生中最も心臓の強い男

と紹介されて

若山 永太郎

(昭一三)



「本年度卒業生の中で一番心ゾウの強い男を紹介します。その名は若山永太郎君……」

これは昭和十三年三月私共が卒業した日、卒業式後恒例の北海ホテルでの祝賀懇親会席上での大野先生が私を紹介していただいた冒頭のお言葉であります。

私自身ではそれほど心ゾウが強いとは夢にも思っていなかったが、在学中に、大野先生を中心として、金垣英雄君(太平工業事務常務)らと共に「貨幣金融研究会」なるグループを作って、メンバーが交代で研究発表をやっていた。

たまたま私の順番にあたった時には、大野先生の肝入りで三井銀行小樽支店の会議室で、支店長初め同支店の方々をも前にして、研究発表することになった。

確かハイエクの景気論について厚顔しくも研究発表(?)したと思う。三井銀行小樽支店長以下銀行のお歴々を前にして、強心臓に一席ブツブツのを大野先生が思いだして、同

年卒業生中「最も心臓の強い男」と言う前置きで私を紹介していただいたものと思う。

ゼミナールについては、私は手塚先生のゼミであったが、大野先生からは、「貨幣論」「財政学」とご教授賜り、前述の貨幣金融研究会などもあって、特別に可愛がっていただいたものである。

終戦後大野先生が学長時代に大阪にいられた際一度お会いして、その後ご病気でたおれられ、次にお会いしたのは一昨三十五年の九月、私が卒業生採用依頼のため母校を訪れた時である。

母校の学長室で加茂学長とお話しておいたら、大野先生も元氣になつて、丁度その日お見えになつておいて石河学長部長先生のお室でお会いした。

その時の大野先生のお顔を今でもありありと思い出す。涙を浮かべているようなマナザシで、丁度永年會わなかつた息子を久し振りに迎える親父のような格好で私の手を握りしめ

つくりたいこと、そのためには若い優秀な教官を集めなければならぬことなどをよく話しておられました。

その後、私は仕事のことと北海道へ渡る機会が多くなり、時々先生を小樽へお訪ねしました。いつでしたか、お宅へ伺った時、話が先生の逸話時代のことによんだことがありました。その時、いいものを見せてあげようといわれて、独逸で購ってきたという一冊の原書を取りだしてこられました。それはマルクスが自筆で贈呈の辞を書き入れてある資本論でした。私の記憶に誤りがあるければ相手の人は女性であつたようです。それがどういふ人であり、先生がどうしてそれを手に入れられたのか、先生から伺ったように思うのですが、今は覚えていません。ちょうど、昭和二十三年の夏ごろから、二十四年の暮近くまで、当時青森に在住していた比較的若い緑丘出身の有志が、毎週木曜日に集つて、資本論を輪読したことがありましたので一種の感慨をもつてこの本を見せたいだいたことを思い出します。

昭和三十三年の一月、先生は不幸にしてご病氣になられ、間もなく学長の職を辞されました。学校を商大に昇格させるために、そしてまた商大としてそれを立派なものにするために、それまで十年近くの歳月をそのことのためにだけ尽くしてこられた先生にとってはどれほど心残りなことであつたらうと思われまふ。しかし「緑丘五十年史」によれば、このころ大学の内外にはいろいろの問題が生起していたように思えま



られた。私もグツと胸にこみあげて来る思いであつた。

「先生お元氣になられてよかつたですね」と申し上げたら「有難う、有難う」とあのニコヤカな温顔で繰り返し繰り返し言われた。

その次は昨年七月、五十周年記念日の翌日お会いした時には、さらにお元氣になつておられた。

その晩は日本航空の林先輩の肝入りで、墓目兄と共に小樽の海陽亭にとうとう先生をご自宅から引張り出して、一夜楽しくご懇談した。

大野先生がこのたびいよいよご退官せられた。

今静かに花道から去られたと言ひ先生の緑丘学園に残されたご功績は大きい。特に私共教え子の胸中には先生の温かいイメージは永久に焼きつけられております。

本間に永い間ご苦勞様でした。恩師として、そして大先輩として、今後共にご健康に留意せられ、何時までも私共教え子に先生のご温眼で見守っていただきたいものであります。(丸嘉機械(株)常務取締役)

小樽経専時代のこと

内山 三郎

(昭一六)

昭和二十一年九月、私は卒業以来足掛け五年振りになつかしい地獄坂を登りました。大野先生の御口添えもあつて満州中央銀行に就職した私は一介の引揚者として故郷の小樽に帰り、在学中御世話になつた先生が学長になつておられることを知り、引揚げの翌日一目お会いしたい気持ちで母校を訪ねました。その時は、よくもや、これから二年半も母校で働くことなど予想もしていなかつたのですが、学長室で先生にお目にかか

り、在満当時の思い出に花を咲かせていた時、突然先生から、「内山君も引揚げて来て職もないことだろうから、取り敢えず学校の仕事をやってみないか。機会をみて就職先を世話してやろう。それまで、ここで働いたらどうか」との御言葉がありました。実のところ、これからの生活について全く途方にくれていた私にとって、この御好意は文字通り千天の慈雨でした。早速御好意に甘えて、囑託(会計課勤)を拝命

、ついで文部事務官、文部教官と、すべて先生の御配慮で戦後の混乱期を榮養失調にもならず無事過ごさせていただきました。

昭和二十四年五月退官するまでの二年半の間、若くて(今でも未だ若いですが)血氣にはやる私にとつては、またとなく得がたい数々の御教訓を頂戴いたしました。毎日のように、あの円満な御人格に接し、生来軽卒で簡単に腹を立てることを習癖としていた私には本當によい勉強になりました。

商大昇格運動のさなかには、日頃御円満な先生が、反面猛烈なファイトをお持ちであることを知りました。交通事情、宿泊事情、食糧事情の非常に悪かつた当時、文部省との折衝にたび重なる上京、そして当時世田ヶ谷にあつた私と同期の佐藤政志君の自宅を根城にして夜を徹しての昇格交渉打合せなど、多難をきわめた当時のあれこれも今では楽しい思い出です。

拓銀に勤めていた現在、二年半の短い期間でしたが、官庁会計を経験させていただいたこと、小樽経専、緑陵高校で教鞭をとらせていただいたことなど一つ一つがよい体験をさせてもらつたと今も感謝している次第です。

大野先生の御退官記念号を出すに當つて「内山は大野先生のゼミナールだつたから何か書け」との編集長の御指示だつた筈ですが、幸か不幸か、在学当時の私は本科乙類(大陸科)第一期生という口実に支那語一辺倒で、李香蘭主演の映画に熱中しておりました。そのせいか、先

生には全く申しわけない話ですが、貨幣論を勉強した学生時代の私については何一つ記憶がなく、書くべき材料の持ち合せがありません。ただ一つ、先生のエンマ帳では私の名前が末尾に近かつたため(出席簿がアルファベット順であつたことによる)と、昭和十六年十二月に早産卒業したため、卒業論文は提出した筈ですが、教室での研究発表は遂に順番が廻らず、お流れになつてしまつたことが、借金のしっぱなしみたいな妙に頭に残つております。かといつて今さら、小樽まで出てこいとはおっしゃらないだろうと、内心今もつて先生に甘える氣持を捨てきれずにおる次第です。(北海道拓銀大阪支店次長)

何時何時までも

豊島保郎(昭一一)

大野先生、お別れしてからもう二十五年になります。先生から教えを受けましたのがつい先日のように思われてなりません。

先日先生の送別記念写真を墓目先輩に見せていたといふ時、教壇の上の二十五年前の先生と少しもお交りになつていない温かなお顔を拝し何時何時までもお若く、そして御退官後の余生を今まで歩まれた緑ヶ丘の思い出などをつれづれなるままにお書きになられたらとその瞬間私の脳裡をかすめました。

どうぞ先生も御元氣で、

まんびつ五人集

次回

- 大野純 (大八)
- 浅田厚 (昭一一)
- 中村信雄 (昭一一)
- 佐藤重雄 (大一一)
- 沢村一 (昭一四)

楽しかった若き日

戸井正三

(小樽支部)



若い日の無謀な考え方を催すことと冷汗を催すことが少くないが、中でも学生時代勉強家を軽蔑する気風の多かつたことは慚愧に堪えない次第だ。勉強もせず学校をよく逃げることをもって英雄のごとく考え教室に残って質問したり逃げる仲間に入らない人間を頭の悪い奴と断じた傾向は今にして思えば大きな誤りであった。とは言えノートも余り苦にせず休みたいときにはよくサボったり時には集団的に逃げたりしたわれわれの学生時代は楽しかった。特に運動部の選手は放課後から日没までの練習で軟式庭球選手として北大に連勝して黄金時代を築いた金岡君等は練習の途中で腹が減ってやれないと悲鳴を上げたものである。硬式の湊君時代も毎日薄暗くなってネットをしまつて帰って行く姿を権名教授はよく見たと語っている。金岡君湊君

の当時の学業成績は知らないが今日立派な地位を獲て活躍しているところを見ると学生としての勉強も選手としての練習も効果においては同様でなかったかとも考える。われわれの卒業した大正八年は景気の絶頂で貿易会社が全盛だった。銀行は日本銀行へ行く者が無かつた。入学は無試験入学も多くかつ競争もそれほど激しくはなかつた。要すれば今の学生諸君の日夜責められる、入学、勉強、就職と言う苦勞をわれわれは全く知らずにきた幸運児であつたらしい。社会へ出てこれが幸か不幸かは別としてこの故をもつて母校に対しては良い印象らしい想いが数多く残る。特に私は卒業証書の御蔭で税理士商売が出来、また北海道税理士会内の多数の同窓後輩の支持で北海道の会長に選ばれているから母校の恩恵を最大に受けていることになるが、この恩恵は死ぬまで払え切れないかも知れない。しかし同期の中でも大野君のごとく四十年も簿給に甘んじて母校の教授学長をやつてくれた学校へ大きな貸方をつくった友人がいるからこの方の貸しを振り替えてもらおう。同窓会も五十周年を契機にそろそろ若手にバトンが渡ることにならな

いか。苦米地先生のこのたびの選挙で小樽では元老が引き込んで新谷、小林、川島、上村等の諸君が日夜奮闘していた。この点で大阪の地でわれわれの希望する緑丘発刊は誠に双手を挙げて歓迎し応分の助力をすべきであると思う。次は大野先生一いついかがですか。(大八)

鈴蘭のかおり

石川孝一

(東京支部)



五月末、久しぶりに北海道に行つて参りました。甚だ忙しい旅行で、小樽まで足を伸ばすことが出来なかつたのは残念ですが札幌、苫小牧、室蘭、函館と廻り、その間、同窓の岩本正義君、浜中学君にお目にかかり、函館ドックの先輩、駒井幸一氏および諸橋昌保氏にも色々とお世話になりました。この紙上をかりて厚く御礼申し上げます。さて東京に帰る段になって、何か北海道の土産がほしいものだと思つたが、なんと時間も時間がない、温

泉宿の女中の話では函館のトラピストバスターが何んと言つても一番ですよとすすめられたが、これも買う機会を逸した。いよいよ帰る日正午近く、漸く三〇分ほどのひまを作つて三越百貨店に飛びこんだ。頂度その日は、五番館は休みであつたので、何を買つて帰るかろうらうらしたのが玄関の近くで売つていた「鈴蘭」を買つた。翌日その「鈴蘭」は会社の子達に日頃のはたらきに対する感謝のしるしとして贈ることにした。

女の子達は、私の想像以上に喜んで内地で栽培したのと違つて、北海道の鈴蘭のかおりはとでもすばらしいと賞讃してくれたので、いささか私も内心面目をほどこしたと言つ次第でありました。

汽車と自動車と飛行機で五日間、道南を一廻りしましたが、何時来ても北海道の自然の雄大さと神秘なまでの静けさ、緑の色彩の美しさに心を打たれました。「鈴蘭」を手にした会社の子達も、あるいは、そのような北海道の自然の美しさを心の中にうかべていたのかも知れません。

私にとつて鈴蘭に対する最も深い想ひは多分二年の春、若松先生引

率のもとに寮生全部で島松に鈴蘭狩りに行ったことですが、どうも私は「鈴蘭のかおり」よりもあの石狩の原野に立ったとき、なにもささげぎるもののない地平線の彼方に雪を頂いた山脈が低く望見されたときのこと、が今でも心の中にきざみこまれて、鈴蘭と言うとその時のことを思い出すのです。その時、誰かが灰色の毛をした小さな野兎を一匹とらえて、寮に持ち帰り、校庭を追い廻したことがあつたが、あの兎をその後どうしたかは記憶にない。

実に、その時に鈴蘭狩りに行った皆川君が、いま病院に入院しているの聞いて彼の病床にこの鈴蘭を送つてやりたいと随分考えていたが、どうも宛先が分らずそのままになって、まことに残念に思われた。今日、墓目先輩の便りではいよいよ手術だと言ふ、また新潟の長谷川順治君より皆川の自動車運転は身体に悪いから止めさせてくれとの手紙が来ていた。ほんとに一日も早く全快されんことを祈っています。

さる五月二十七日、ひる過ぎ千歳空港に着いたとき、またまた岩本君が迎えに来てくれました。彼と逢うのも二十五年振りですが一目して彼であることが判りました。空港から札幌市内まで彼が自ら身を運転して積荷を交しながら、話は自然と昔の友達のことになりました。彼は、太田厚君どうしているか、太田にだけは一度逢つて見たいと言つていましたので、次回は是非、浅田(旧姓太田)厚君にお願ひします。(昭和一二 川崎重工業株東京支店 鉄構営業部次長)

ガイド試験失敗記

土屋龍郎

(大阪支部)



不惑の人生を越して五十路に差しかかる年輩になるとサラリーマン(敢えて復讐)の宿命

私は、緑丘会東京支部の壁に飾られた美事なる絵が墓目先輩の筆になつたことを最近になって知り、先輩をみなおしたと言つたら叱られますがこの「緑丘」の編集と言ひ、誠に感謝に堪えません。「寮会」の記事を読ませていただき私も寮出身の一人として緑丘に学んだものの幸福と言うものをしみじみと感じています。

命停年制が覆いかぶさつてくる。一代中相当な財を貯え、あるいはコネにより停年者下取会社に横すべり出来る者、身につけた技術専門知識を生かし独立出来る人は恵まれた方で大半は停年後の生活の不安焦燥にかられる小生も後者の例外ではなさそうである。こんな想いつきからガイドの資格をとつて停年後アルバイト稼業に身をやつし、青い目の連中に京都、奈良の日本古来の美を説き、復興著し

き日本の姿に目を見張らせ民間外交官(?)の役を買わんと老骨に鞭をうって受験したものの、一夜づけの要領はこの試験に通ぜず見事失敗した。

紙上にて赤恥をさらし後輩、また先輩のガイド試験の参考に資し、小生の構想をも披露する次第。受験資格、学歴、年令、性別の制限なし

試験期日、毎年四月

詳細 東京都運輸省観光局発行パンフレット参照

科目

(一)外国語。英、独、仏、西語、いづれか自信のあるものをどうぞ。訳、作文その他。古典の流れをくむ諸氏におかれてはすべからず戦後の新語を勉強すること、米語のスラングをある程度知っておかないと失敗の可能性濃厚。

小林教授、浜林教等のよき環境に育まれた小生には古典英語には強かつたが新語には青菜に塩であつた。

(二)日本史、日本地理。

高橋生の子息をもたれている方には現在使用している教科書を借用して勉強すれば結構。地理は観光地、歴史は文化、外交に力を注ぐこと。

(三)論文。

社会問題、経済問題、政治問題の中で現実に提起されている事態は充分研究して置くこと。

以上かいつまんで述べたが詳細は法学書院発行「ガイド試験必携」を見ることが。

ガイド試験は国家試験であり競争

率十倍以上であることからして学籍を離れ日常会社勤務の方々は少くとも半年位の勉強勉強期間を要す。これを裏書きするように大学在学中受験してパスする大学生の率が高いこと。すなわち学びつつあることがそのまま役に立っていること。

小生の構想。勇躍受験の士をつつります。緑丘停年者下取会社(失礼)を創つて、若い者は重役にでもなつて会社を運営し下取りされた者は老後の小遣いに不自由しないでガイド料金をもらつて楽しんで如何?次回、北海道拓殖バス株中木平三郎君へお願ひします。(昭一一 シェル石油大阪支店)

浜さんギツキング 巣取さん

玉井武

(札幌支部)



同期の友、穴釜さんからバトンをうけて、ついでに「餅は餅屋で」という御主旨もいただいたいて漫筆を走らせます。

記憶に間違いがなければ、確か大正十年の初秋のことだつたと思う。二年生の教壇に立たれた浜さんが、研究社の新企画で出版予定の英文学叢書について、ひかえめながら熱意のこもつた推せんをされた。かねてその叢書のことを第二章の中で話題にしていた宇野長作君と自分は、こ

れに勢を得て、寮と教室を一気に回り、同好の士を説いて、宇野君が二組分、自分が一組分を研究社に申し込んだ。その中で自分が購入した五冊のうち、ギッシングの「ライク・ロフトの私記」が入っていたのは、全く運命の仕業というのだろう。その後、浜さんはどの時間かをきいて、痛くこの書物を推奨された。三年目を迎える春休みに、雪だけの札幌の道路を歩きながら、もっぱら部屋ごもりをして、ライク・ロフトの「春の部」を読んだことも、浜さんにまつわる懐かしい思い出である。たまたましい単語引きを各頁にのこした春の部の終りに、「一九二二年四月十四日読了」としてある。

時は昭和十二年にうつる。自分は苫米地校長時代の母校に英語の教師として地獄坂を登ることになった。二月おくれで同じく地獄坂上の人となったのがオックスフォード出たてのストーリーさんだった。いわゆる同年兵のよしみで、二人の交情は日に日にこまやさを増した。しかし不思議なことに、ギッシングは二人の間を深く取結ぶことにもならず、ストーリーさんは戦雲はげしい日本を去った。

別れて十年、世界は大きく回転し平和国家として新しく出発した日本に再訪の足跡を印したストーリーさんは、極東の政治史を研究する学者であった。研究テーマの関係で、その後数回の来日を重ねているが、たまに自分の訳註にかかわるライク・ロフトの私記が出版の運びとなるころ

まんびつ五人集

折から滞日中のストーリーさんは、「ギッシングの一家は、僕の家庭と深い関係があるのだ……」と前置きして、お母さんがギッシングの父親の勤めていた学校に通学しギッシングの書簡集を編集したエレン・ギッシングとも家庭的な交際をもつようになったことをきかせて僕をよるこぼせた。十才ぐらいの少年ディックの目にうつったエレンは小柄な白髪の快活そうな小母さんで、眼鏡をかけていた——という。ストーリーさんが、東京の成城町に奥さんと長男の三人で、「果取」という表札をかけて住んでいたのは今から何年前のことだろう。いつに変わらぬ温顔の御夫婦に迎えられる、楽しい話をとりかわしていたが、やがて果取さんは書斎から余り厚くない一冊の洋書を手にも、ニコニコして出て来る。

「君に見せようと思つて遙々英国から運んで来たのだよ」と前置して、由緒ありそうにひろげたのが、ギッシングの父親の著した書籍であった。植物の研究に関するもので、自宅の書棚で全く偶然に発見したものとのことであった。果取主人と自分が庭先に立ってこの書物をひらいて、白いワイシャツ姿で見入っている写真に、その時奥の間からわざわざ出てきてシャッターを切ってくださった果取夫人を偲ぶ自分である。

パトンは同期の友、滝川の佐藤信雄君にお渡しいたします。
(大一二 藤女子大学)

北から南へ

河西辰男 (大阪支部)

天候は快晴、エレンは好調、日航機(シテイ・オプ・ナラ)は伊丹を出発し、箱庭のよう綺麗な若狭湾、天の橋立を通り過して日本の海岸線を北上して行く。大阪から北海道へ三時間。昭和二十四年ごろ札幌の営業所に勤務しておいた時は、握り飯を五食分りクサククに入れて、函館で駐留軍の命令によりDDTを頭から背中までぶっかけられ、牛肉と同様「消毒済」のスタンプを腕に押し、青森ではあの長いブラットホームをオリシビック大会以上の超スピードで列車にかけこみ、所々窓ガラスのない豚箱同様の列車にゆられゆられて三十八時間、煤煙で顔を真黒にして、大阪の本社へ帰って来たことが夢のように想い出される。十余年前とくらべて世の中の動きが如何に早くなっているかというのを痛感した。心よい飛行機の爆音に、何時の間にかぐっすり寝込んでしまった。

ホステスのアナウンスで眼をさまして窓の外を眺めたらなつかしい北海道の大地が眼下に展開していた。ふと先日緑丘会の総会を思い出した。千歳の飛行場へ降りると、いつ



天候は快晴、エレンは好調、日航機(シテイ・オプ・ナラ)は伊丹を出発し、箱庭のよう綺麗な若狭湾、天の橋立を通り過して日本の海岸線を北上して行く。大阪から北海道へ三時間。昭和二十四年ごろ札幌の営業所に勤務しておいた時は、握り飯を五食分りクサククに入れて、函館で駐留軍の命令によりDDTを頭から背中までぶっかけられ、牛肉と同様「消毒済」のスタンプを腕に押し、青森ではあの長いブラットホームをオリシビック大会以上の超スピードで列車にかけこみ、所々窓ガラスのない豚箱同様の列車にゆられゆられて三十八時間、煤煙で顔を真黒にして、大阪の本社へ帰って来たことが夢のように想い出される。十余年前とくらべて世の中の動きが如何に早くなっているかというのを痛感した。心よい飛行機の爆音に、何時の間にかぐっすり寝込んでしまった。

ものことながら、大きく深呼吸して北海道の空気を満喫すると、「ああ帰って来たな……」という感慨がわく。弾丸道路を快適にドライブして日航の事務所へ着くと、思いがけなくも相羽君(住友火災)が迎えてくれた。ニコリと微笑されたが渡された一枚の葉書は、今晩六時から渋谷会(昭和十四年卒業のクラス会)の案内であった。全く思いがけない朗報だった。年に一、二回札幌へ来るが、今日は全くドンピシャリ、渋谷会に出席できるとは……、全くツイているとは私のために作られた言葉のような気がした。大車輪で仕事を片付けて、すっかりおくれってしまったが、七時半ごろ会場へかけつけたところ宴まさに酣であった。いるはいるは……黒い顔、白い顔、頭のうすいの、濃い顔、なつかしい顔、顔……であった。かけつけ三杯の札幌ビールもおいしかったが、すっかりと手を握りしめながら「よく来たなあ……」との友情に全く心あたたまると思った。卒業以来二十余年ぶりであった。深見君や二、三名の人は、始めは誰だかわからなかったが、「おい一杯やれよ」の一語ですぐに思い出した。十八番中の十八番の珍芸、迷芸が飛び出して、二十年前の昔にかえって、大いに青春の気焔を上げた。心ゆくばかり、校歌や応援歌を合唱してお互に再会を約して解散した。

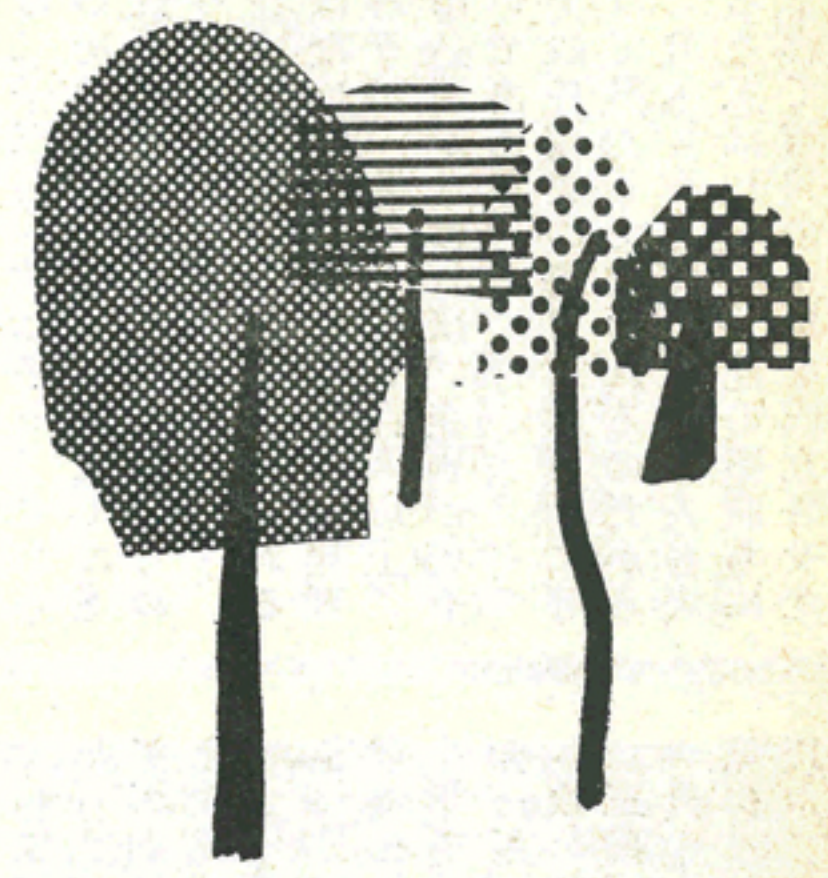
翌日沢村君(HBB放送映画)から電話がかかって来て、昨晩は仕事

【43ページ下段へつづく】

伴房次郎先生の追憶

【伴先生書翰集】

限定出版



あなたの申込とあなたの原稿を

伴先生書翰集を御申込下さい
伴先生書翰集の御申込をいただきました方々の御芳名を左に纏めました。まだ御申込みない方は是非御申込下さい。

(申込用紙)ハガキ「緑丘」アンケート住所氏名を書いてすぐ御申込下さい。限定出版ですから余分の印刷をいたしません。

伴先生書翰集刊行会員(到着順)

- 大久保 鹿式(大阪) 一〇
- 寺田 弥一郎(京都)
- 野又 貞夫(函館)
- 神沢 重治(富山)
- 讚岐 梅治(小樽)
- 越崎 宗一(小樽)
- 西川 正己(伊勢)
- 越川 清二(札幌)
- 藤我 栄一(札幌)
- 佐藤 二(大阪)

- 田中 喜多村 久盛(大阪)
- 宇山 慶三(大阪)
- 板垣 与一(東京)
- 盛田 稔(小樽)
- 杉原昭典(旧姓下野)(広島)
- 永田 利三郎(四日市)
- 富永 資(埼玉)
- 相沢 美(小樽)
- 古野 政蔵(東京)
- 天野 雅司(大阪)
- 堂野 不二人(大阪)
- 石田 平八(大阪)
- 松村 克己(大阪)
- 中山 太兵衛(京都)
- 山中 賢二(神戸)
- 宮地 邦介(大阪)
- 畑村 信太郎(大阪)
- 佐々木 周孝(東京)
- 稲川 直平(東京)
- 菅谷 重三郎(大阪)
- 椎名 儀一(小樽)
- 加藤 儀一(東京)
- 進藤 真一(富山)
- 西田 英夫(大阪)
- 玉井 英雄(札幌)
- 望月 鷹雄(札幌)
- 三浦 儀三郎(大阪)
- 若林 周五郎(島根)
- 大田 省三(東京)
- 穴井 升三(札幌)
- 齊藤 雄治(東京)
- 田代 治夫(東京)
- 鞍掛 駿二(東京)
- 杉中 弘吾(東京)
- 進藤 孝二(東京)
- 宮袋 孝雄(東京)
- 松本 浩三(東京)
- 猪熊 弘三(東京)

伴先生の追憶は
伴先生の追憶は「あなたの原稿で」

(1) 写真
(2) 第一部 書翰集
(3) 第二部 先生の追憶集
(4) 年譜

以上の構成です、めていきますのであなたの原稿をこの記念の刊行物に御投稿下さい。

(原稿送附先)
兵庫県西宮市清水町九ノ二
藤 目 英三 宛
「伴先生原稿」と表記願います。

伴先生のハガキ
伴先生のハガキを保存されておられます方へ
毎号連載されておりますようにお手持のハガキを原稿用紙に写していただき併せて其のハガキ受領前後の思い出を御記入下さい。

伴先生書翰集 刊行について

大久保 鹿式
(大一一)

緑丘紙上に伴先生書翰集刊行の企画が発表されてもう一年を経過した資料の提供者、購読申込者が毎月可なりあるようだが、六月号の集計が六八冊と発表された。

これでは余りにも少ない。伴先生が小樽へ赴任されたのは明治四十五年六月とあるから第一回生からである。その後吉米地前校長と昭和十年四月に交替されるまで廿五年間小樽に居られたのである。即ち第一回生から第廿二回生迄は教へを受けられた事になる。此の間の卒業生(現存者)は二千三百人位はある。これらの人がその二割応援されたとしても四、五百の賛成者がなければならぬと思う。

緑丘は全卒業生へ頒布されておるのではないから全体を率するは無理であろうが、少くとも五百人以上の賛成申込者がなければ、企画が成立しないであろう。

切角緑丘編集の墓目君は真剣に呼びかけて努力して居られるのだからあとで申込みも思っている人も沢山あると思はれるが、此の際直ちに申込み切角の企画を成立させたものである。

この種の本は記念出版物であって緑丘人何れの人にも是非一本は己が書架に備へ置くべきと思う。更にこの企画が成功すれば次から次へと快企画が目論まれて緑丘の誇りを増すこととなる。

この際第一回の試金石となるこの刊行企画を若い人達も是非賛与されて緑丘人の誇りを持っていただきたい。

編集者が資料を用意して呼びかけて居るのではない。緑丘人全体がこれの呼びかけに応じて立上るのでなければこの種の事は成功覚束ない。緑丘人伝統の団結と広い視野に立つての知性を働かされて賛同されんことを熱望してやまぬ。

【お詫言】

前号の「伴先生のハガキ」から京都中学時代の伴先生(一一頁) (一段、後ろから五行目) 「次ハ市中ヲ歩き廻リ」は夜に(三段、十六行目) 「其中ニ踊リ松茸(ノ)密生群を発見シ」は(ノ)を一字挿入 以上二ヶ所誤りに付き謹んで訂正いたします。

「伴先生のハガキ」から

白 土 栄 一

(大一一)

昭和三十一年三月十八日附

伴先生より白土栄一宛

拝啓 先達テハ各位ノ御好意ニ接シ誠ニ難有事デ御坐イマシタ、早速御礼状ヲト存シマシタガ、当時、身、心、腕共ニ意ノ如クナラズ其上使用中ノ万年筆マデガ平生使用ノ分ト異ナリ、何トナク都合悪ク端書一枚思フ様ニ書ケズ見苦シキマ、ニ投函仕リマシタ、御免下サイ、然ル処安藤君ヘノ分ダケハ、同氏ノ元ノ名モ前職モ不明ニテ結局礼状ヲ差出セマセシタ、アノ際ノ話ニヨレバ現在、教育ニ従事シ居ルモノト思ハレマシタノデ、貴君ヲ煩ハシ然ルベク御挨拶ヲ御伝言願フヨリアリマセシ、何卒宜シク御願ヒ申上マス。実ハ伴彦彦会社ノ用務ニテ只今在欧中デス月末ニハ帰朝スル由申シ来リマシタ、二ヶ月ノ短期旅行ニ過ギマセシガ小生使用中ノ万年筆ヲ突然携ヘ去リマシタノデ小生ハ不自由致シテマス」御面接ノ各位ハ年モ長ケ從テ世上ノ経験モ多ク職務上ノ自信モアリ各立派ニ成人セラレシコトヲ思ヘバ当然デスガ、老人ノ眼中ニハ只昔ノ姿ノミガ散ラツクモノ故面接シテ現在ノ紳士振ノ見事サニ驚キマスガ、ソレハ予期以上ノモノヲ得タル喜ビデアリマス、教師トシテハ大慶

至極デス、老人ハ一昨年家庭ノ不幸ニ遭ヒ爾來稍単調ニ月日ヲ送り居リマシタノニ今回ハコノ単調ヲ破リ急ニ意思ガ動イタモノト思ハレマス、從ツテ身ノ老ヲモ忘レテ次第デスガ相沢氏ハ徹頭徹尾身ニ添ヒテ世話ヲシテクレマシタ、之モ感激シテマス御土産ノ名産品大箱ニテ沢山アリ来客ニモ家人ニモ取り出シテ眼カニ享受シテ居リマス、のし梅ハ昔金沢四高時代ニ口ニ入レシコトアル様デス、其後ノ日月モアリマスガ中々上品ノヨキ味ト思ヒマシタ、業者ガ研究ヲ怠ラザルタメデシヨウ。

座右ニアル本ノ一節ニ「弥陀も釈迦も今に修業中じゃ」と云フ一節ガアリマス伝道ノ修業ハ無限デ常ニ向上ヲ志シ寸分ノ休ミセナイコトヲ示スモノデス、教育者トシテ大變立派ニナラレタコト前便ニモ申上マシタガ又此一句ヲ申添ヘテ益々御発展ヲ祈リ且祝シマス。油断ハ修業者ニ禁物トノ意デス。

手把白玉鞭 驪珠尽擊碎
油断ヤ自慢ノ心ガ生シタラ忽チ擊破セヨトノ意デス
三月十八日
大田区田園調布二四〇
伴 房次郎

阪神緑士会の集い

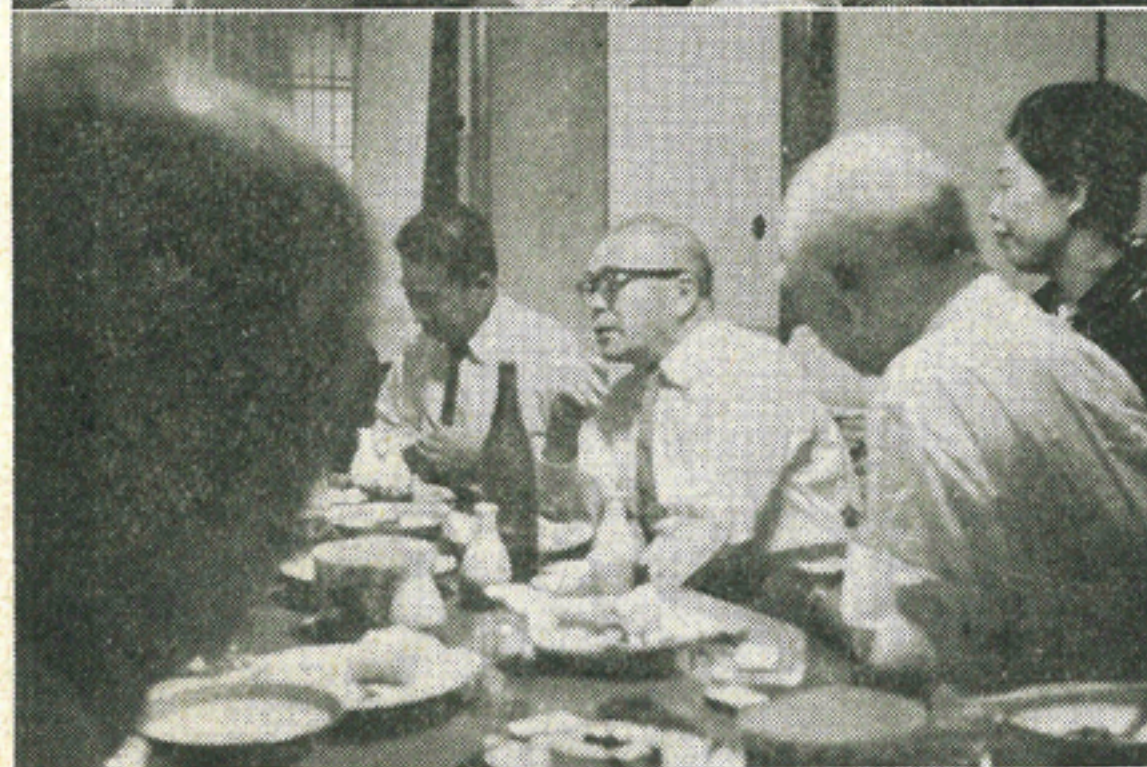
宮地 邦介
(大11)

(註) 安藤君一六五安藤(旧姓小田部) 浅次氏
相沢君一六三故相沢豊太郎氏
(水戸市出身当時千葉県我孫子町居住、東京のお宅から水戸まで先生を案内された)
昭和三十一年三月、茨城県緑丘会員有志が伴先生を梅の水戸市にお招きして久々に歓談の一夜を過した。色々懐旧談に花が咲き非常に御満足そうだった先生のあの温顔が今も眼に浮んでくる。その後先生は幾何もなくして御逝去されたので、御帰京後いただいたこのハガキは特に感慨深く、先生の晩年の尊い教訓として心に生きている。



杉山君が今度参議院議員を引退されて当地の日本製箔KK社長に就任されたので六月八日の宵曾根崎「みどり」にその歓迎宴を開いた。折からの梅雨空にも不拘出席者前例に無く多数、四谷、高浜、竹村、松本、久保、丘村、宮地の常連に久しく病氣中の山田君が元氣な姿を見せてくれたし、芸術家タイプの墓目画伯(昭和十一年卒)も同席して懐しく杉山君を迎えた。

わけて今宵は話に花が咲き御互に寄る年波は争はれず 保健法、死生観、靈魂不滅説等有る路より無る路に亘る話に尽き其の中には夏の夜にふさわしく幻霊説法迄飛び出したが結局病と命は別ものだと悟り済ましたような話に落ち、それでも病氣をせぬように身体を大事にしようじやないかでお開きにした。



尚次回は一晩泊りで伊勢参宮を兼ね中秋の志摩半島廻遊のことに話が決まり設営は津市在住の井上君に依頼することにした。去る五月湯ヶ原集会の折井上君が遙々持参してくれた伊勢名物赤福の好意が忘れ兼ねること。



卒業三十年の

つどいに参加して

山尾 温吉(昭七)

在京世話役からの案内状に「往時の美少年たちのめぐりあい……」という言葉があったが、風雪三〇年を経た往時の美少年たちはその頭に顔に体に歴然と、あるいはそこはかとなく尊い年輪を刻んでいた。

五月十二日の幕あけは一時半開場の浅草国際劇場見物であった。朝から降りだした雨がやまず折柄水キキンの東京には幸いしたが地方からの参加者にはうらめしい雨であった。事前に夫々指定席券が郵送されていたので入場であったが、はじまる頃には大方の顔が揃ったのであろう。あちこちでヤアヤアの挨拶がかわされていた。指定席は舞台のかぶりつきに近く、若い女の子の好ましい肉体を心ゆくまで堪能できた。フイナリーには全員出動、舞台を降りて客席まで足を運ぶサービスに、うつとりしているうちに幕が降りた。

劇場前になると、家族同伴の方も大分おられるようであった。あちこちで三〇年ぶりの対面に、顔と名前があわず、お互いに名乗りあつての交歓もみられた。観光バスに乗りこむと殆んど満員で同窓より同伴家族が多いようにみえた。バスは東京タワーに向った。一二五メートルの展望台に登り、雨は止んだが薄もやの

かゝった暮れなづむ東京のまちまちな遠望、晩餐会場である赤坂のプリンスホテルへ到着の頃は六時すぎにいた。直接ホテルへ出席の同窓も大分あり、配布された出席者名簿を見ながら改めて顔と名前を引合はす風景もみられた。メインテーブルには地方参加者という指示があつて着席をはじめたが、参加予定数をはるかに上廻り、ボーイが急いでナイフ、フォークのセットをして廻り、実に七十数名という大盛会となった。

先づ大島幹事長が起つて開会の挨拶、続いて谷本幹事が四十数名を数える物語者の名前を呼び上げ一同暫しの黙祈をさへげた。終つて藤原幹事の音頭でビールの乾杯、晩餐会に入った。

伊達町の吉田君から始つた自己紹介は、一人一分という制限も次第になくなつて、緑丘の同窓であることの喜びと誇りを述べるあり、同伴の娘さんを紹介してよき伴侶の世話をたのむあり、好ましき息子たちを紹介するあり、来遊をすゝめて、最大の歓待を約束する地方参加者ありで時間はたちまちのうちに過ぎていった。この間、夫人同伴者は夫婦仲よく年をとつた奥さんを紹介したことは勿論である。最後に大島幹事長が

軍隊生活中、自分は二等兵であつたが、少尉、中尉の若い後輩から、先輩々と大事にされ厚遇をうけた感激の思い出を語り、緑丘の同窓である喜びと誇りを更に強調した。緊急動議として大島幹事長の永年の労にむくいるため記念品贈呈の案が提出され満場異議なく、記念品選定委員に指名された助川、吉田、植木の三君は直に協議、記念品は大島夫人に贈呈する案を計つて満場拍手裡にこれを決定した。氷の台にあかりの入つたアイスクリームが持ちまわられる頃、吾等のテナー新田君に、あまたの声がかゝり「今宵出船かお名残りおしや……」の名調子に、ロマンズグレイ(近頃はチャイミンググレイ)となつた彼のなつかしい、つやのかゝつた声に一同シーンとなつて聞きほれたのである。我々が最終学年に制定された校歌と血湧き肉躍らせた行進歌の合唱はプリンスホテルをゆるがし、万才を三唱して閉会となった。

翌十三日は午後一時から赤坂の料亭富司林に散々集まり、囲碁、麻雀、懐旧談に打興した。あかりのともしつた頃にはキレイどころの顔もそろい、今宵は水入らずの宴とはなつた。宴に先立ち、前夜辞意をもらした大島幹事長に補佐役として谷本、森下の両副幹事長を選任して、大島幹事長の留任を可決した。

盃を重ね、酔がまわるにつれて、宴席は全く縦横に入れみだれ、いつ果てるとも知れない交歓の場となつた。突然、躍り出た花沢君のストリップにはちよつとびつくりしたが、新田君のリードで、モンパリアを唱い

パリの屋根の下を唱い、はては小樽小唄を歌うに及んで、かきむしられるような懐旧の情に浸つたのである。皆驚くほど元気で、全く青年の宴会と、かわらない賑やかさであつたけれど、このあと、三十五年、四十年のつどいにはもつとしんみりしたものになるのである。最後に在京世話役の諸兄に心からの感謝の意を表すると共に、たつた五人の北海道からの参加者の中に入ることの出来た喜びと、仕合せを、かみしめたのである。

- 参加者氏名
- 札幌 高橋 美雄 高橋興業(株)
 - 山尾 温吉 小柳商事(株)
 - 小樽 河辺 舜一 河辺石油(株)
 - 瓜生 仁 小樽地方水産物協組
 - 伊達 寺田 茂己 自営
 - 青森 安達 猛 青和銀行
 - 田鎖 省蔵 北洋硝子工業(株)
 - 渡辺 順三 東洋木材工業(株)
 - 佐藤 盛吾 振興相互銀行
 - 仙台 大隅 弘 宇迦殖産(株)
 - 森川正三郎(旧姓井草) 森川工業(株)
 - 島根 森川正三郎(旧姓井草) 森川工業(株)
 - 高崎 大井 康雄 東京会館写真部
 - 東京 中田 乙一 三菱地所(株)
 - 藤原 良静 藤原商事(株)
 - 常岡 亮 日本電気硝子(株)
 - 谷本 慶隆 日本銀行
 - 新田 次郎 日本ビール
 - 植木友次郎 日網石油(株)
 - 大島泰次郎 新日本窒素肥料(株)
 - 吉田 龍史 自営
 - 森下 梅一 東京交易(株)
 - 青木 豊 三陸木材工業(株)

訂正

北斗寮O・B会記事の創設者たる大先輩古関氏の記念碑を緑丘北斗寮跡に建てるべし」は発言した中川氏(昭一六)より訂正の申入れがございましたので手紙の一文を報告して訂正にかえます。

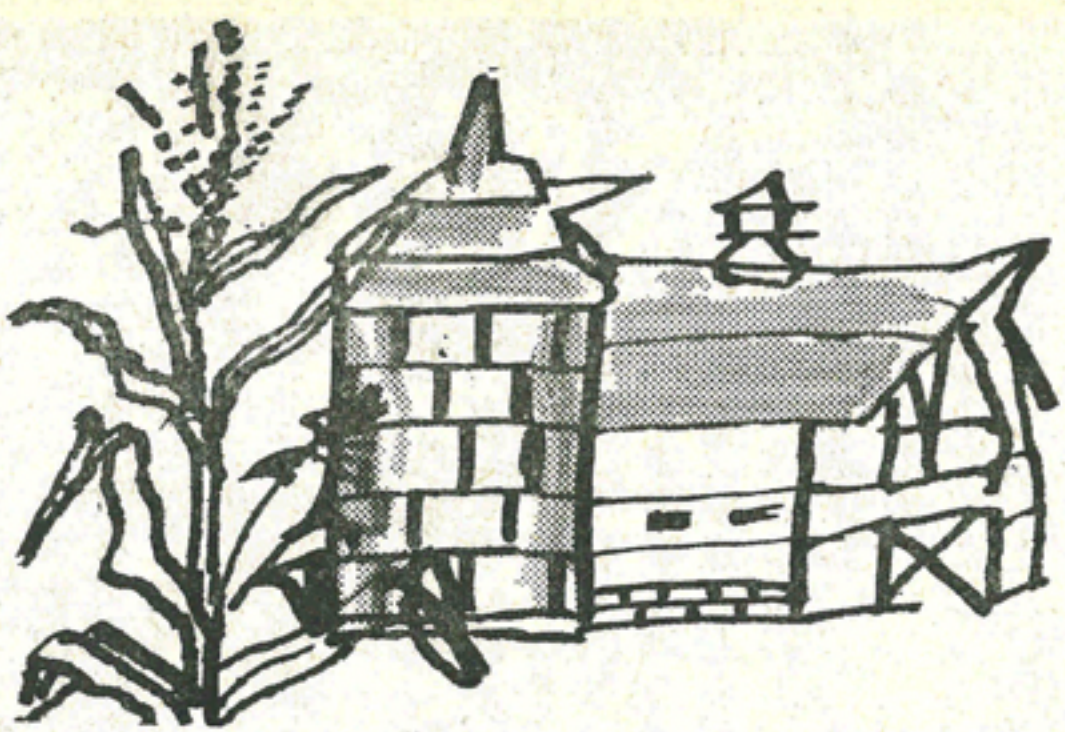
「母校五十周年記念式に参上したとき既に一寮は取りはらわれてなくなつていた。そのとき古関大先輩は、「こゝに自然石でも記念碑でも建て様ぢやないか」といわれましたので心から賛成し二年上級の渡辺先輩にも古関先輩の御意向を伝え麻田助教授(同期)にもその土地をつかえるように尽力を頼んだいきさつをご報告する。皆さんも古関先輩のご意向に賛同して頂きたい」と申し上げたつもりでございます。

訂正御願いたしますと共に一寮跡に一寮の記念碑の立ちますよう御挨拶いただければ幸いです。

(山内談)記事を書きました一人として古関先輩に大変御迷惑をおかけした事をお詫び申し上げます。北斗寮O・Bの一員として記念碑の実現を願っております。

の都合で出席できなかった。東京の前野君(興和不動産)と河西豊太郎君(中央農林金庫)と屋敷を一緒にしようといわれたのでグラントホテルにかけつけた。河西君とは卒業以来二十余年ぶりだった。出生地が彼は山梨県、小生は長野県。正気寮で同じ釜の飯を食つたり、ストームをやつた仲であつた。紅顔の美青年も大学と高校へ行つておられる御息があるといわれると、お互に顔を見合せながら、「自分の年令を忘れ、何時までも、若い気で一杯だなあ」と、わずか一時間足らずの時間であつたが、飯を食う時間も惜しんで語り合い再会を約した。なお個人としては親友であるが、商売では宿敵の工藤君(三菱電機)が東京本社へ御栄転の由、さぞかし札幌の酒の相場に変動があることと思うが、心からお祝い申し上げます。(函館)の老岐君から「まんびつ」をバトンタッチされたが、多忙のため原稿用紙をポケットに入れて、持ち歩いていたので、締切りの期日は迫つてくるので編集長にご迷惑をかけては申しわけないと思つておつたが、南から北へ往復四十二時の出張中の、全く思いがけない旧友とのたのしい会合を思い出しながら、帰途のシテイ、オプ、ナゴヤの機上で書きつづり、伊丹空港で投函させていただきました。か。向暑のみぎり、会員の皆さまには益々御自愛のほどお祈り申し上げます。

次は沢村重一君にバトンを渡します。(昭一四松下電器産業(株))



北海道の味

石田平八

(昭二)

何かの雑誌で穴釜さんが北海道の味覚を語る座談会に出席されているのを思い出したので、北海道の味を懐かしみつつ筆をとって見ました。毎年春秋二回関西北海道倶楽部の総会が開かれますが其の都度北海道の味を所望されるので幹事諸君は大

変な苦勞をするのです。春季総会には致し方がありませんが秋季総会では道庁、道漁連、北連等に無心して鮭新巻、柳葉魚(シシヤモ)シヤガ薯、トウキビ等を出すのですが大変な持て方でお蔭で折角用意したサツポロビールも予定の半分位しか空かない始末です。今年の五月高松でサツポロ会が開かれたので出席しましたが、其の際も何か北海道の味を持つて来いと注文でシヤガ薯(此処では五升薯と云わなければ気分が出ないといわれた)と冷凍のトウキビを重い思いをして携けて行った処大変喜ばれ丁度母校五十年式典で一此処に大学ありき」と名演説をされた大泉先生(大正十一年卒、香川大学々長)御夫妻で観音寺の川上貞光さん(大正十五年卒日本セメント代理店)父子も御出席されておられ大いに面目を施した次第でした。味には随分恵まれていた関西でありながらこのような事になるのも矢張り誰しも故郷の味を忘れかねているのでしよう。

故郷の味といえば蟹の好きな人は随分多いが私は此の蟹がすぎだという人達に私の故郷根室の沖で獲れる花咲蟹を自慢する事にしています。花咲蟹といっても殆どの人が知らないらしい、冬札幌市内の魚屋等で偶々見かける事もあったが札幌の人でも知らない人が多いようでした。この蟹程美味しいものはない私は今以て信じていますが御存知の方は如何なものでしょうか。尤も穴釜さんをしていわしむれば北海道の味の代表はビールということになるでしょうが。失礼。

小林先生を迎える

西川正己

(大一一)

六月十一日(月)三重県高等学校英語教育研究会で小林象三先生をお迎えして研究会を開いた。最初一時間ほどと御願したところ May I have more time for the same fee? as a matter of fact an hour won't do と云う御手紙を頂いて結局、滔々三時間、聴衆はまんじりともせず先生の熱弁に耳傾けて飽くことがなかった。小樽で三ヶ年教えを受けて、三十七年後の今日再び先生の講壇に列する光栄を得た僕は、最前列に席を占めて文字通りに全身を耳にして一ことも先生のお言葉を聞き漏らすまいとして傾聴した。先生のお言葉、話し調子、イヤというほど聞かされたランタン流の厳密正確な而も Speedy に語られる美しい英語、それにまた板書の英字が昔のまゝに一寸も変っていないところなどから、僕は津市の会場にあることを忘れて、しばし小樽の学窓に思いがた。窓外に懐かしい落葉松の裏山までが見えて来る如き感じがしたのである。

ン大学で Daniel Jones 教授について徹底的に発音学を修められ、爾來この道一筋に生きて来られた文字通りの学究であられることは今更喋々の要がない。口を衝いて機関銃のように吐き出される例文の一つ一つについて「これは number 5. これは number 13 の二重母音」と掌に物を指すように、その母音と子音の番号(母音にも子音にもそれぞれ Table of English Vowels と Table of English Consonants があってその順位に番号がつけてあって、その番号をいうと、その母音なり子音なりが直ちに聴き手に理解出来る仕組になっている)を自由自在に駆使されてお話を進められるのでウツカリしているとなつたことだか判らなくなつて了う。

例文が実に豊富である。いわゆる日本製英語や Japanese English の発音のデータメスを攻撃されるあたり先生の面目が躍如としている。奇しくも僕は先生の講義から小樽の看板英語の間違いを面白く指摘せられたマツキンソン先生を思い出したのである。

I think that that that that speaker used is right. を読んでみるといわれてもトツサに仲々読めない。先生は面白そうにその読み方を教へて下さった。mother nurse your Babies of you Cant't use nestle's といふ広告文に適當 Punctuation marks をつけよなどという懐かしい昔の小樽高商の入試問題まで飛び出して来て、正に文字通り時間のたつのを忘れて先生の声色交りの実に楽しい講義に耳を傾けた



庄内サン

堂城不二人

(昭二)

のである。先生の演題は The Importance of Being Phonetically-minded であつた。最後に先生御所蔵の英語のレコード数種を聞かせて頂いたがこのレコードが判らなかつたら英語教師は皆首だとおどされて、こわこわ聞いたのが何と大正時代の英語学者神保格先生の日本語の朗読法の吹込みだつたりして先生の茶目っぷりも相変らずだーとしばし小樽時代

の「小林教授」を思い出して青年時代に rejuvenize される思いがした。最後に筆者の「お礼の挨拶」の中の neglect の中の母音の発音にチョビリ皮肉な批評を差しはさんで元気で帰って行かれた先生を僕は何時までも忘れぬであらう。

(先生は目下大阪工業大学教授の傍ら京都外国語大学、立命館大学へ出講されています。)

営業中の大谷敏治さん(元教授)にもお出迎を頂戴し、何から何まで御世話になった事を改めて御礼申し上げたい。市中には既に「小樽高商剣道部員来る会場帯広中学校」のピラが張り廻わされ宣伝は OK、一行が偉風堂々?と会場である帯広中学校に向つた途中の珍事である。

一行は途上バラソルをかざした妙令の娘さんから「小樽高商の学生さんでせう、帯広中学校へ御案内致します」と呼びかけられた。見ればきれいな着物の娘さんである。顔も悪くない。我々の人気が満更で無いなと、思はず「お願いします」日傘を指したきれいなおべの娘さんを中心に白束装束の学生がとり囲んだ道行きは確かに奇妙だつたと思う。行き交う人々は我々一行を見て薄笑いを浮かべ、或は啞然としている。しかし一行特に私には一寸バラソルに気持丈けでも身体を寄り添ひ、そうして大道を闊歩する気持はまんざらではなかつた。

道行く人は我々一行をホホ笑みを以て見送つて行くように見える。娘

はバラソルを高々と持ち上げて歩く誠には我々を慕う?子供達が何やら声を出してついて来る。どうもおかしい、道行く人々はこの美人を見、我々を見てクスクスと笑うではないか。一寸不安になつて来た。「シヨウナイサンシヨウナイサン」という声も聞えて来る。

段々歩いてる中に気味が悪くなつて来た、連中も何かを感じたに違いない、一人二人と足速に私から去つて行く。行きがかり上私丈は立去る事も出来ない。つい私と娘さんと二人丈けの道行きとなつた。どうもおかしい。後で大きな笑聲がする。足速に去つた連中は振り振り返り腕で早く来いのサインを送つてる者も居る。腹を抱えて笑いながら走つてる奴も居る。何が何んだか判らぬが女と歩く事の不利となつた事と、娘の様子少しおかしいなとも感じ出した。離れねばならない。少しも速くと決心した私は連中のやつたように歩幅を大きくそうして速度を増した。しかし娘も私と同様速足となつて来る。これは唯事ではないぞと思ひ私は遂に走り出した。娘はバラソルを肩にスソを乱して何やら叫んで私を追い馳け出した。

私は剣道具を肩に会場である帯広中学校に汗みどろでどうして入ったか全く夢中であつた。試合中もあの娘が入つては来ないかと入口の方はかりが気になつて当日の大刀捌も誠に哀れな次第であつた。あれは色狂の庄内サンといつて帯広の名物と聞かされたいとなつたのも若き日の思い出だ。また暑い夏が来る。剣友諸士の御多幸を祈る。

運搬界の夢を実現した

KYCコンベヤ

光洋機械工業株式会社

取締役社長 奥村正美(昭和17年)

本社 東京都千代田区神田小川町2丁目3(井上ビル) TEL東京(291)1216.1309

支店 大阪府大阪市北区南心町1丁目12 TEL大阪(309)1(代)

支店 福岡市中央区中浜口町43番地 TEL福岡(3)1841

九州営業所

新刊紹介

写真集 啄木と小樽・札幌

編 小樽啄木会

昭和三十七年四月「啄木と小樽、札幌」という約四〇頁のアルバム紙コロタイプの写真集が発刊された。我々は啄木の歌を時々口づさむ事もあるが啄木が小樽や札幌に深い関係のある事は余り知られていない。この「啄木と小樽、札幌」は啄木の第一回の来樽、第二回の来樽、第三回の来樽を年譜の中に語り、一頁の札幌停車場から三十九頁の啄木歌碑の項まで全頁上段を明治時代の写真で埋め、夫々に啄木の歌を入れて足跡を語っている。

この冊子の写真は約半年の間今まで発表されたことのないいわば二番煎じでない写真を集めようと八方手をつくして集められたものである。この写真集ともいふべき出版は函館

啄木会が本年五十回忌の「函館と啄木」と題する写真集の刊行に小樽の啄木会が刺戟されて五十数年前に小樽、札幌に生活した跡を追うて、その関係写真集を出版することとしたとあとがきにある。

花園第二大通や公園通りなどの啄木に関係のある人々の家を配し、併せて本文写真頁(精養軒、小樽日報社、小樽商業会議所、公園通南部セブンペイ屋、寿亭、日本メソジスト小樽教会ほか)を市内地図に入れるなど親切な写真集である。



啄木と小樽 札幌

札幌に
かの秋山水の持てゆきし
しかしていまも持てるかなしみ
アカシヤのなみきにボブラに
秋の風
吹くがかなしと日記に残れり
こゝろよく
我にはたらく仕事あれ
それを仕遂げて
死なむと思ふ
(小樽公園内啄木歌碑)
かなしきは小樽の町よ
歌うことなき人々の声の荒さよ
(小樽公園内啄木歌碑裏)
小樽郷土史家越崎宗一氏(大一二)

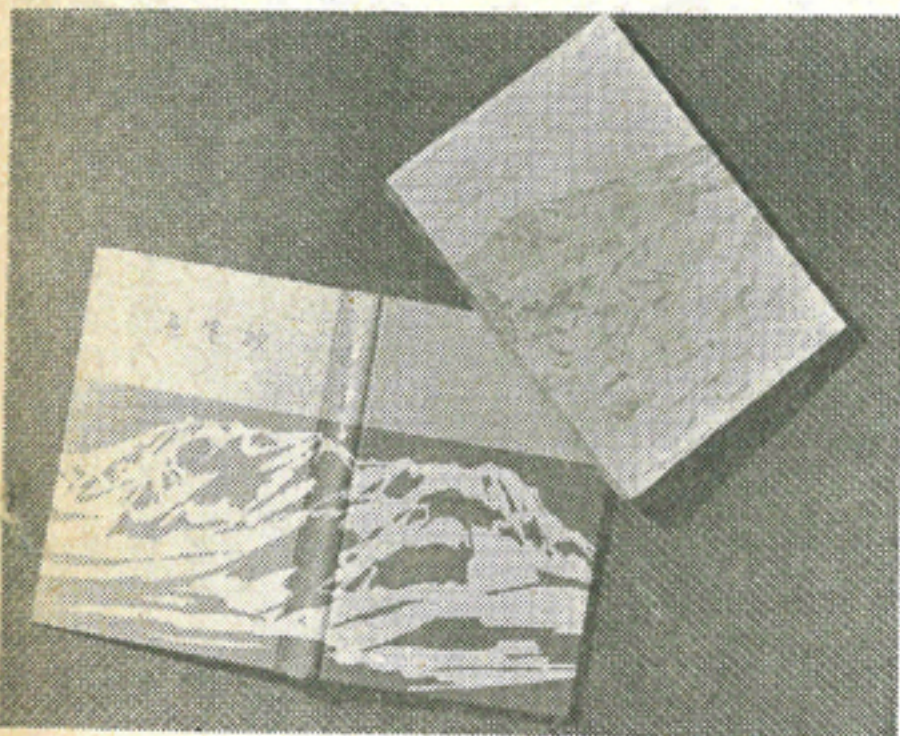
歌集 遊雪抄

大場寅太郎氏(大11)第二歌集を発刊する

この歌集は昭和二十六年から昭和三十六年まで主として「国民文学」に発表した作品の中から四七四首を採録したと著者はいう。

十数年前に「凍谷」を第一歌集として発刊、これに続く第二歌集である。

集中の作品は日常吟と出張或は小旅行等の折手帳に書きとめたものが大半のことであるが二十六年から住友化学や日本カーバイドなど多忙な生活の中から書きとめたこの歌集の集成は「徒に新奇を追って自己



もこの編纂に加わり写真の解説をされた事を附記する。

(小樽市立図書館内小樽啄木会 領価一五〇円)

を見失うようなことはしたくないと念ずる態度」を素直に歌に現わしている。

さるをがせ風に吹かれて乱れあふ日がほのぼのと差す原生林
海霧しらく流れてやまず伏しなが
ら大虎杖のぬれそぼつ丘
熊笹の丈たかくして暗きな往き
ゆきて山の湖を見むとす
右は北海遊吟であり私達の身近かに経験したことどもをよみがえらせてくれる。

前川佐美雄氏(日本歌人主宰) 装幀は高雅、お歌はいづれも清潔にて、上品のおもむきがありました。第一歌集として変りありとは思はれませんが、だんたんに深厚のようです。

大野誠夫氏(作風主宰) しつかりした写真主義をもとにした生活詠を興味ふかく拝見いたしました。

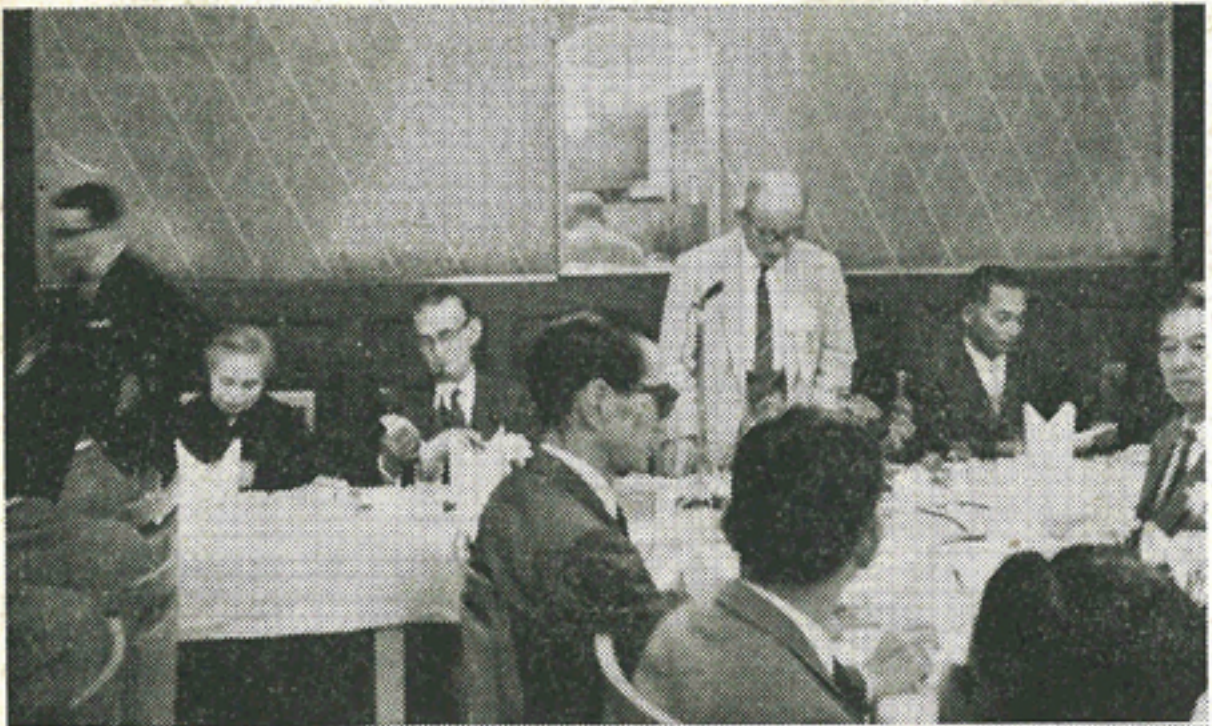
源氏鶏太氏(作家) 淡々として、しかも対象にしっかりと迫るものがあり敬服しております。

新星書房刊四〇〇円
(東京都練馬区中村北四)

緑丘会 大阪支部定時総会 加茂学長 苦米地三代校長夫妻を迎えて

五月二十四日、大阪銀行協会倶楽部において、緑丘会大阪支部定期総会が開催された。

在阪緑丘会員五十数名に加えて、苦米地先生御夫妻、母校から加茂学長の御参会を得て盛大であった。若山氏(昭十三年卒)の司会で、石田副支部長が開会の辞をのべられ、天野支部長の挨拶に続いて、墓目幹事長が、活発であった三十六年度大阪



支部の事業報告をされた。若山副幹事長の会計報告がなされ、天野支部長を議長として役員の変更が行なわれた。

如氏(大十四卒)が動議を出され昨年度の支部活動の成果を讃え、大変なことではあるが是非全員留任していただきたい旨発表されると、参会者は全員拍手でもってこの動議を支持した。新役員は次の通り

もて 人え 新加

支部長 天野雅司 (大十五年卒)
副支部長 石田平八 (昭二年卒)
幹事長 墓目英三 (昭十一年卒)
副幹事長 若山永太郎 (昭十三年卒)

なお、佐竹副支部長の東京勤務に伴う副支部長欠員補充の件は天野新支部長に一任された。

加茂学長は母校の近況を話され挨拶にかえられた。

募金はあと一千五百万程で完遂されること。アメリカのIBM社から最新式の電子計算機の購入が決定したこと。計算機を入れる建物は文部省との折衝が成功し、この十月には完成すること。また証券講座が二年目に入り発展しつつあること。語学教育が大きな成果をあげつつあり、英語の小樽としての名声に恥じない体制が復活しつつあること。

各自の出身寮をもつ緑丘人には、いよいよ新総合寮が完成し、旧寮は各々廃寮になるとの話は複雑な感慨を与えたことだろう。

しかし、半世紀のすぐれた伝統を継承し、さらに新たな要素の加わった寮風が確立されなければならぬ。この為の努力は惜しむものではない。また、その為には卒業生諸氏の御指導をまたなければならぬという学長の決意は大きな感動をもって受け入れられた。

尚、総合寮は「智明寮」と命名され六月九日が竣工式のことであった。苦米地先生は七十七才とはとても想像することの出来ない程お元気



で次期参院選挙には全国区から立候補する予定であることを語られた。

緑丘人のスピーチの大部分も、苦米地先生に久しぶりにお目にかゝった感激を、益々お元気で御活躍なさることを祈るものだった。

三十七年卒業の新人会員の紹介はいつものことでありながら、彼等の新鮮さには諸先輩の目をほそめさせないではないものがあった。

緑丘人のスピーチは次々と続き、いつ果てるともなく予定時間をはるかに超過していった。新入会員をリーダーとして、校歌、続いて進軍歌を高唱した時には、窓外の川面に映えるネオンの灯もさすがに静かな夜半を感じさせる程だった。

初めて出る社会への大きな期待とたくましい挑戦力を秘めて歌う新入の若者の姿、懐しさを一杯に表現して歌う先輩の顔、やゝ列からはずれ静かに煙草の煙りをくゆらせながら

ら、じつと見守られる大先輩の御風格、三者が一体となつてかもしだす雰囲気はすばらしく印象深いものだった。母校万才、緑丘会万才、大きく力強い万才三唱の声は、あたかも緑丘会大阪にあり、と天下に宣言する声のようだった。

角响記(昭三四卒)

総会に出席して

中田 昭生(昭三七)



学窓を巣立ち、社会に出て早くも二ヶ月がすぎ、だんだん学生気分が抜けて来たと思う時、母校緑丘大阪支部定時総会ありの報を受け、社会に出て間もない同僚の顔を見たさに、喜んで会社を早めに引き上げて出かけました。木曜日だったので行くか行くまいかとためらったが、結局、出席して有意義だったと思う。在学時代御世話になった加茂学長の御元氣な御姿、苦米地先生夫妻が御見えになりまた各々、会社では重要なポストを占めて活躍して居られる先輩各位と年令の差を問わず、遠き小樽の思い出を共に語るなんて全く小樽商大のすばらしい伝統に今更ながら驚ろかされた次第です。私も、先輩各位に負けぬようがんばらねばと決意させられた次第です。

総会に出席した同僚は滝川君、菊地君、松永君、小林君、島田君たちで、いずれも学生時代に話しをした

事のある連中で、皆駆け出しのサラリーマン第一歩の感想を語り合い、今後の健闘を祈って別れたが、まだ苦勞のある段階ではなく、何かと興味のある事ばかりなので、その方に気が向けられた。これが二、三年経過すると、いろいろと責任ある地位につかされるので、会えば苦勞話しが絶えぬようになるだろう。緑丘人の集りがその愚痴のはけ口となるのもよからう。とにかくそれが明日のエネルギーになれば幸いであろう。共に歩み、共に学び、共に遊んだ小樽の四年間を思い出し、しばしの学生気分を味う事の出来る事はすばらしい事だと思えます。今後ともこういう機会を多く持ちたいものと思えます。全国各地に散り散りになった緑丘同僚諸君よ、緑丘魂を忘れる事なく、力強くがんばらうぜ!!

(西島製作所経理部勤務)

母への手紙

菊地 剛(昭三七)



母さん、今日は緑丘会に出席したことをお知らせします。私が大阪に来る時みぞれの駅に立っていた母さんの顔は、私の門出を喜ぶというよりはむしろ不安に彩られていたようでした。それこそ母さん、この年令迄二十余年全く母さんの腕に抱かれていた私が、誰ひとりとして知る人のない、この遠い大阪に来ることになったのですから、私を心配する

のは当然だったでしょう。実際のところ私も、バスに乗る時は笑って見送りを受けましたが、未知の世界に對する不安が私の全身を廻っていたのです。

あれから二ヶ月余りになりますね。この新しい世界に足を入れてからは、自分ひとりで解決出来ぬことが次々と目の前に現われて来ております。しかし私は、そういう環境にあっても自分の進む方向を指し示される沢山の人の知り、確実に前進しております。

母さん、去る五月二十四日に緑丘会大阪支部定時総会があり、私たち新しい会員も先輩の温い目に迎えられるました。この日は、卒業の日にしっかりと手を握りしめて私たちの前途を祝して下さった加茂学長は、懐しく思われました。又高商時代の校長苦米地先生もご出席になりました。先生は来る参議院選挙全国区に出馬されるそうです。

この日先輩は卒業順に緑丘時代の思い出をお話して下さい、私は緑丘の生きた歴史を見ていられるように感じられ非常に楽しい一日でした。

私がこの会に出席して有意義だったことは、母さんの見送りを受けた時から抱いていた私の不安が、この日から消えてしまったのです。自分には目新しいものばかりのこの世界でも潤歩前進出来るという勇氣が湧いて来たのです。何故なら、同じ緑丘の空気を吸った多くの先輩が、この大阪で互いに強く結びついて、未熟な私たち新会員を見守ってくれているからです。また四月に私の会社

総会に出席して

島田 五雄(昭三七)



去る五月二十四日、加茂学長、苦米地先生を迎えて開かれた緑丘会大阪支部総会に、新入会員として初めて出席しました。約五十名程の先輩が出席され、私達五名の者を暖かく歓迎してくれました。相変らず御元氣な加茂学長にお会いし、友人達と語り合っていると、ついこの間までの学生生活が大変懐かしく思い出された。丁度今の季節は、地獄坂の緑が非常に美しい頃で、あの道を往復して過した四年間の色々な思い出が次々次々と浮んで来た。ビールを飲みながら先輩諸兄が色々な話しをされた。

学校を卒業してから十数年或いは四十数年という長い間の様々な苦心談やユーモラスな失敗談を聞いてみると、最初の緊張もほぐれ、大変愉快な一夜を送る事が出来た。私達もこれから社会人一年生として先輩の

進んだ後に続いていくと思うと、それだけの話しが、大変有意義なものであった。小樽での気楽な、のんびりとした生活に比べ、とまどう事も多い毎日ではあるが、このように多くの先輩が活躍していると思うと、非常な頼もしさを感じる。時代は違っても、同じ地獄坂を登り緑丘で学んだ人達であると思うと、私達も多くの努力を払って、先輩の切り開いた道をさらに発展させなければならぬと思う。

卒業後、数十年たつても忙がしい時間をさいて集まり、しかも単に昔を懐古するに止まらず、現在の母校の発展に積極的な努力をされている様子をみると、今日の先輩諸兄を作り上げる上で、緑丘での生活が、いかに大きな役割を果たしているかが理解出来る。大阪には二百名程の先輩が居ると聞いたが、若い先輩も多数出席され、語り合ったら良いと思つた。私達の中には、共通した何かか流れているのだから、最後に、校歌を合唱して楽しかった総会の幕を閉じた。

(東洋ゴム工業株)

関西募金事務局移転通知

今般支部役員諸君とも相計り事務局を左記へ移転しましたから御知らせします。

大阪市西区南堀江通り一ノ三
日邦工業株式会社内
電話大阪側二二九〇
二二七九四
五六一八六

緑丘大阪支部長 天野雅司
関西事務局長 宮地邦介

社団法人緑丘会第22回通常総会

東京支部総会 五月十七日午後六時半

東京大手町ビル地下レストランで開催

東京支部副支部長武岡嘉一氏の司会により開会、東京支部総会を先に開催し事業報告、決算報告を型通り済ませ、緑丘会総会に入る。本日一〇〇名の会員が時間の経過と共に忽ち会場を埋めつくし、追加テーブルの用意に東京支部の世話人大童の体であった。小樽から札幌から緑丘会理事も見え、久木教授も海外から帰朝したばかりで出席、遠く京都から森下支部長、大阪から藤目幹事長、若山副幹事長

も出席。佐々木理事長の挨拶に続いて三十七年度事業報告、収支決算、が学校の事情報告の頃は超満員となる。新寮が出来上り、一、二、三、四寮生全部収容して「智明寮」と命名した事を発表する。四十五坪の土地を用意して電子計算機(コンピュータ)設置場の計画や募金のスピードがぶって来た旨を報告、新人四十六名が各々起って自己紹介をすれば学長起って先輩のよろしき指導



佐々木理事長挨拶



加茂学長の近況報告



緑丘会東京支部総会会場

を御願いと師弟の美しい場面を展開した。

司会者小貫東京支部長から苦米地三代校長先生、京都支部長森下弘氏、中川精一郎氏(昭五)藤目大阪幹事長、大平一橋大学教授等に指名挨拶を御願いすれば何れも参議院議員立候補の苦米地先生を支援して必ず当選せしめようと絶叫、今や苦米地先生の激励会となる。誠に美わしき総会であった。最後に小樽商大校歌を高らかに合唱して万才を以て会を閉じた。

東京総会に続いて

名古屋支部総会を

五月十九日

名古屋の総会は東京総会に続いて五月十九日(土曜日)に開いた。苦米地先生も何年振りかでお見えになるとの事、加茂学長も小樽へお帰りになるのを東京総会に引き続いて名古屋までお出で下さるとの事で高橋一男氏(副支部長)(昭四)も会場の御世話やら案内状の準備に忙しく極力多数の在京人の集合に心をくばった。



支部長高橋一男氏(昭四) 栗原勇次郎氏(昭五) 幹事長山田鳳蔵氏(昭一七) 顧問服部兵吾氏(大正一三)が夫々決定した。

大阪から藤目、若山両氏(幹事長、副幹事長)が見えたので藤目幹事長に挨拶を御願した所、苦米地先生が参議院議員に立候補されたので名古屋支部も中京地区の中核となり協力願いと力強く先生への協力を求めた。

古関前支部長も東京から見えて苦米地先生推薦の辞を述べれば苦米地先生立って今回立候補の挨拶と海外事情などをお話になり益々お元気な所を見せた。

加茂学長次いで学校の近況と募金事情を御説明になった。会場も夜の更けるにつれて騒然となり会員諸氏に先生の御声のどかなかった所があったのでないかと心配しておる。

増田新支部長は小樽高商卒業生であることの誇りを強調される。会はなごやかに進み、会場はビール工場敷地内だけにビールの消化の少ないのを高橋副支部長さかんに気を使わう。

緑丘の歌に続いて方才を三唱し、名古屋総会も八時に幕を閉じた。

京都支部総会

—5月25日—

京都国際ホテル

昭和三十七年度
緑丘会京都支部総会

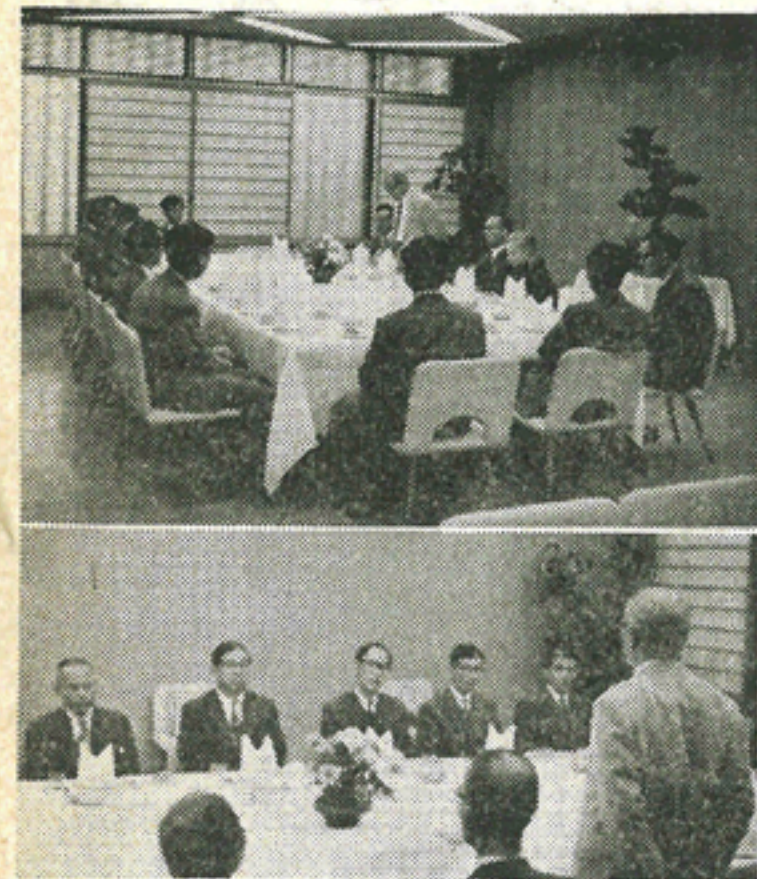
日時 昭和三十七年五月二十五日 午後六時
場所 京都市中京区油小路二条下ル
京都国際ホテル

支部長との間の「おへこ」論議には満場しばし哄笑の渦に引きこまれた。名残惜しかったが八時半過ぎ散会した。

当日の出席者次の通り
(来賓)

- 苦米地英俊(元校長)
- 御奥様
- 加茂 儀一(学長)
- 畑 信太郎(大阪支部相談役)
- 藤目 英三(幹事長)
- 若山永太郎(副幹事長)
- (支部員)

- 森下 弘(大正十四年)
- 桐田 鉄郎(十四年)
- 越智 易延(昭和七年)
- 大塚誠四郎(十三年)
- 堤 正五郎(十五年)
- 松本 義夫(十五年)
- 服部 奎吾(二十二年)
- 茶木 博治(二十五年)
- 小田島和夫(三十一年)
- 神田 隆志(三十六年)
- 田中 敢二(三十六年)
- 石丸 祥年(三十七年)



薫風さわやかな五月末の夕、苦米地先生御夫妻、加茂学長を迎えて本年度支部総会が京都国際ホテルにおいて開催された。

今回は常連の方で都合により欠席された方もあったが四人の新顔の参加もあり淋しい中にも活気にあふれ和気藹々の中に進められた。

苦米地先生の興趣ある懐旧談、加茂学長の熱誠あふれる緑丘の最近の状況報告あり、引続いて恒例の自己紹介に移った。数々の珍談、奇談も飛び出したが中でも藤目来賓と森下

神戸支部総会は

五月二十六日
三宮 第一樓で



挨拶する湊副支部長(右)

緑丘会神戸支部総会は五月二十六日、大阪、京都に続いて開催した。この日苦米地元校長が見えるとい

うので七十二才になる第一回卒業生高橋徹男氏も時間が待ち遠しく早くから会場に顔を見せ、またはるばる明石から大塚氏(大正一五)も駆けつけ、副支部長湊静男氏、八家要氏も東京からこの日に間に合わずべく帰神したという。

会場は三宮、第一樓。

土曜日の事でもあり予約満員の会場を本間幹事長の顔をきかせて一室確保したとの事、急に計画した神戸支部総会だけに二十数名の顔をそろえる事もまた並たいていの事ではなかった。特に当日新人(転任者)の参加も多かった事は今後の神戸支部発展のためにも意義のある総会であった。

午後六時本間幹事長の司会で始まる。高橋翁は苦米地先生を是が非でも当選させねば「緑丘」の恥であり一人十殺の目標をと具体的攻撃方法を挙げて檄を飛ばす。次いで乾杯の後、湊副支部長立って個人の意見と前置きして苦米地先生推薦の弁を振る。苦米地先生は身辺近況を伝えて挨拶され、水垣氏(昭五)も酒に酔う、酔わず秘ケツは酒がいくらでもあるからんでくれと常にいう。それがコツであると引例して宣伝方法の具体策を挙げて協力を誓う。続いて自己紹介が始まる。総会は苦米地先生後援会に変わり次々に立つ自己紹介は先生への激励の言葉をそえて益々意気高くなる。

ユーモラスな本間氏の司会で会場は賑いを見せ、日が暮れて静まり行くこの建物にただ緑丘会神戸支部のなごやかな歓談の流れのみが何時までも続いていた。

編集後記

この四代校長大野先生の特集号は西川正己さん(大正一五)の企画によるものです。

七月末に出版予定でありましたが皆様の御投稿が多く、編集に嬉しい悲鳴をあげました。頁は増えてゆく一方で広告の確保に苦勞を重ね、こゝに遅まき乍ら発刊出来ました事は広告スポンサーのご協力によるものと厚く御礼申し上げます。

猛暑の病床で皆川君(昭一二)それに橋田君(昭三四)上勢君(上勢清次氏)昭四の御令息)らの校正への御協力を心から感謝します。

苦米地英俊

新住所 東京都杉並区西田町二の四二七番地
(電話三九二局三〇三八番)

昭和三十七年七月

拝啓 盛夏の候高台益々御清祥の段御慶び当し上げます

借て此の度の参議院選挙に際して賜りました御厚志身に沁みて有難く御温情は肝に銘じて終世忘れ得ません同時に現代世相の半面を見て新たな驚に打たれ憂を深めて居ります

ともあれ今私は感謝の外何物も無い心境に居ります 衷心より深く御礼申し上げます

今後は左記の茅屋にて静かに余生を送ることにいたしましたこの方面へ御出掛けの節御立寄り頂けますれば幸に存じます

敬具

和田製糖株式会社

取締役社長 和田 久 義
常務取締役 松ヶ野 寿 夫(昭13年)

東京都中央区日本橋蛸殻町1-2 TEL 03 4005